

玉名市立玉名中学校2年 堤 柚杏

私の祖父は、みかん農家だ。小さい頃から秋の収穫時期には、必ず手伝いに行っている。

ある日祖父の家に行くと、数か所あるみかん畑の中の一つの畑が、見たことのない景色に変わっていた。みかんの木が一本もなくなっていたのだ。びっくりして、

「じいちゃん、みかんの木どうしたと？」

と祖父にたずねると、

「みかんの木ば植え替えるみたい。ここにまた新しいみかんの木ば植えるけんね。四年たったらまたみかんがなるよ。」

と言った。

みかんの木にも寿命があって、四十年から五十年たつと、みかんの実がなる量が減ってきて、植え替えが必要になるそう。ということは、これから四年以上は、みかんの収穫量がかなり減るということになる。

心配になって、祖父に大変じゃないのかとたずねると、祖父の答えはこうだった。「うん。だけん、みかんの改植ばして収穫が出来るようになるまでの間、国からの補助があるとたい。」

「え？それって税金からってこと？」

「そうたい。」

驚いた。こういう所にも税金が使われていたんだと。

この税金からまかなわれる補助金のおかげで、祖父は大切なみかんの木が寿命をむかえても、また新しいみかんを育てる楽しみができる。そして、長い間みかん作りに精を出す祖父が生きがいを持つことにもつながるのだ。

この補助金を受けることができる畑には、それぞれ植えるみかんの品種が指定されているそう。だから、いろいろな品種を作る農家に分担されることによって、価格競争が少しは抑えられるというメリットもあるそう。

農家に給付される補助金には、他にも、農地を整理するためのものや、農機具を購入するためのものなどがあり、どれも農業を継続していくための大切な支援となっている。

私はこれまで、社会保障や教育に税金が使われていることを学んできた。働いている人が税金を納めることは当たり前だとしても、消費税が上がり、買い物をするたびに税金として支払うお金が増えるのはいやだなと思っていた。しかし、税金は思ってもみなかったところで私たちの生活を支えてくれている。それを知った私は、誇らしい義務を果たしているんだと感ずることができた。

高齢化が進み、農業をする人が減っていることは、日本の自給自足率を保つための大きな問題となっている。若い人が農業を引き継ぐ、または新しく始めるには、多くの経費がかかり、将来への不安にもつながっている。

私は将来農業にたずさわっていきたくて一人だ。祖父が大切に守ってきたみかん畑を引き継ぎ、未来に残していくために、税金は大切なものだと再認識させられた。

学校法人森教育学園岡山学芸館清秀中学校 3年

植田 空近

「二%はきつい。」「今のうちに買って…。」そんな言葉も、学校の「租税」の授業の資料に目を通してから聞こえ方が変わった。十月から消費税が上がることで、人の思考や行動にどんな変化があるのだろうかと考え始めたからだ。でも、本当に二%を意識して消費するのがいいことなのだろうか。もしくは、家計に負担だから、と控えるべきなのだろうか。図書館で令和元年版経済財政白書を見つけ、消費について調べてみた。前回二〇一四年には、貯蓄割合が高い、話題になった物は買いたい、より節約したい、そんな人を中心に増税前の駆け込み購入が増えた。その反動は大きく三兆円規模となり、その後の消費低迷に結び付いたという。他国と比較すると、消費税(付加価値税)引き上げ時にOECD加盟国で平均〇.六%の消費の伸び下落に対して、日本はなんとその七倍強。イギリスについては、一〇年、一一年と二度にわたって、二.五%ずつ税率が上がっても、消費動向に変化は無かったそうだ。この違いはどこからくるのかを自分なりに考えてみた。

この夏、私はイギリスへ約二週間滞在した時に、何人かに税金について尋ねて回った。そのほとんどの人が、税制について満足していた。その理由は、食料品、新聞、書物、国内の交通費、個人の家屋建設費、処方箋のある医薬品、障害者用機器、教育に関する物等、生活に密接な物は課税ゼロ。一方、菓子やイートインメニュー、アルコール等は標準課税の二十%と、庶民が本当に必要とする物については税負担が軽いというのが定着しているからだそうだ。しかも、価格表示は税込み。更に税率引き上げの日に一斉に値段が変わるのではなく、売り手が好きな時に価格を決めているので、増税を意識することも少ないらしい。また、ある新聞記事に書いてあったが、イギリスやフランスでは、保険料や税金で賄う医薬品は、その効果が期待できる物に限っているそうだ。つまり、税金を使うべき物に使い、国民が納得できるようにしているのだ。だから税率アップに敏感になり過ぎて反動が起きるようなことがないのではないだろうか。

昨夏の西日本豪雨の被災地で毎週のようにボランティア活動をした縁で出会った方々は、国や地方自治体の支援を受けてみなし仮設住宅で過ごしたり、住宅再建の補助を受けたりしている。莫大な費用の復旧復興工事も含め、そうした支援に税金を使っても異を唱える人はいないと思う。消費税もそうだ。暮らしやすくするために社会保障や教育無償化等に使われるのだから、もっと当たり前のこととして受け止めていはずだ。軽減税率、ポイント還元、自動車取得税の廃止等のメリットも予定されているのだから、余計増税を負担ととらえることも、急に購入を控えることも必要ないと思う。今の私の消費はわずかだが、今後は、税金が生活を豊かにするという視点も持ちながら行動していきたい。

「年金もらうの楽しみだなあ。みんなも将来ちゃんと税金納めてね。」
クラスで税について話し合いをした時に社会の先生が言いました。するとみんなは、「自分で稼いだお金だから、全部自分で使いたい。」「知らない・会ったこともない人の年金にされるのはいや。」と税金を納めることにすごく消極的でした。確かに私も、お金があつたら自分のために使いたいと思うし、どうせ年金になるんだつたら、知らない人ではなく、自分のおじいちゃん、おばあちゃんにあげたいとは思いますが。でも、私の意見は少し違います。私は、税金を納めることと学校の清掃分担の仕組みは同じだと思えます。

中学二年生の時、私の清掃担当場所は、グラウンドのそばのスタンドでした。そこは、一部の部活生しか使わないような場所で、私も清掃担当になるまであまり行ったことがありませんでした。自分は使わない場所だし、教室からも離れていて、正直最初はスタンドの清掃がすごく嫌でした。でも、その考えは間違いでした。なぜなら、私はとても大切なことを見落としてしまっていたからです。それは、清掃をしているのは自分だけではないということです。私が清掃したスタンドを使っている人が、もしかしたら私の机をよせてくれているかもしれない、くつばこを掃除してくれているかもしれない。考えたら分かる簡単なことなのに気づけませんでした。

学校の清掃は”学校をキレイに保つ”という目標があつて、その目標のために生徒全員で分担して清掃します。それと同じように国も”国民全員が豊かで安心した暮らしを送る”という目標のために、国民全員が税金を納めています。それなのに、税金を納めたくないという人は、スタンドの清掃が嫌だった私と同じです。とても大切なことを忘れてしまっています。学校でもらう教科書や病院に行った時の医療費など、私達は今までたくさんの税金に支えられてきました。もしかしたら、税金を納めてくれた人は、スタンド清掃が嫌だった私のように、嫌々ながらやったかもしれません。でも、その人が税金を納めてくれて、助かったし、とても感謝しています。

次は私が税金を納める番です。もしかしたら、私が納めた税金で誰かの命を救うことができるかもしれない。もしかしたら、私の教科書代や医療費を払ってくれた人の役に立てるかもしれない。もしかしたら、日本のどこかで、私のように感謝してくれる子供がいるかもしれない。そう考えると、ロマンがあつてすごくいいなと思えました。考え方一つで税金に対するイメージがだいぶ変わります。周りの意見に流されるのではなく、みんなが自分自身で考えて本当に大切なものに気づいたら、積極的に税金を納める人も増えて、より良い日本になってくれると私は思います。

東京学芸大学附属世田谷中学校 3年

西崎 友佳子

今年七月、小惑星探査機「はやぶさ2」が小惑星リュウグウの地表と地下の岩石を採取することに成功したことが、大きなニュースとなった。二〇一〇年には、はやぶさ初号機が、プロジェクト中に発生した様々なアクシデントを乗り越えて地球に帰還し、映画化された物語を家族と観に行き、感動した思い出がある。

こうした宇宙探査プロジェクトを行っているJAXA（宇宙航空研究開発機構）には、運営費交付金などの国の資金、つまり税金が使われている。日本の宇宙開発予算は世界屈指の規模であり、国際宇宙ステーションの運営にも、アメリカに次ぐ資金を分担しているという。

税金が科学の研究開発に使われる意義とは何だろうか。小惑星のかけらを持ち帰ることは、私たちの生活に、直結して役に立つわけではない。しかし、はやぶさプロジェクトによって、私たちは、新しい発見に心躍らせ、私たちの生きる太陽系や惑星がどのようにできたのか、地球外生命体はいるのかなどと想像を広げることができる。人々に、未知の世界を知ろうとする好奇心や、未来への希望や大きな視野を与えているのではないだろうか。

現在では、民間企業によるロケット打ち上げも盛んになっていて、「宇宙ビジネス」や「商業衛星」という言葉も聞かれるが、ビジネスとして成り立つまでになったのは、国が多額の資金をかけて開発してきた技術や知識の積み上げが基礎にあったからだと思う。

科学には、すぐに役立たなくても、利益に結びつかなくても、長い目で見れば、人類の発展に繋がる分野が多くある。そうした分野は利益を出す必要がある民間での基礎研究は難しいので、広く人々が出し合った税金によって支えられる必要があるのだと思う。私も将来、自分が納めた税金が、そのように使われていれば、嬉しい気持ちになるだろう。

私には、将来、研究医になりたいという夢がある。大学などの機関で研究するときには、国から研究助成金を受けると思う。税金を使っているからには、人々の助けになる研究をしたい。人体の謎を解き明かし、病気の治療法、予防法を開発することができれば、月日はかかっても人々の役に立つと信じて頑張っていきたい。

一方で、私は研究内容を分かりやすく説明し、多くの人に知ってもらおう工夫にも取り組みたい。そうすることが、病気に苦しむ患者さんの希望になったり、子供たちが科学に興味を持つきっかけになればいいと思う。

また、それは、税金が有効に使われていることを広く国民に理解してもらうことにもなると思う。税金は、未来に向けた人類の探求を支え続けているのだ。

身近に感じた税金

北海道教育大学附属函館中学校3年 花田 知

僕には祖母がいます。仕事をしている両親に代わり、小さい頃から僕の面倒を見てくれた大切な存在です。その祖母は数年前、ひざの手術をして、歩くことが困難になっていました。杖をつきながらがんばっていましたが、この夏、足の力が入りづらくなり、外に出て歩くことができなくなりました。とても残念な気持ちになりましたが、少しでも前向きに生活を送って欲しいと、僕の家族は、祖母の生活に助けになることを調べてみました。

まず、何よりも最優先に考えたことは、介護をしやすくして、本人も家族も明るい気持ちで日々を過ごすことでした。介護保険は、ある程度の年齢になると支払う義務が生じます。うちの両親も、祖母も払っています。介護保険のサービスを知るために、地域の支援センターの方に来ていただき、その内容や、できることを教えてもらいました。すると、うちの祖母の場合、少しの負担で、色々な支援を受けることができるということでした。

「だって介護保険払っているからね。」

と、母や叔母が言っていましたが、その財源は介護保険からだけではなく、公費、つまり国や道、函館市の税金から支払われているということを知ったのです。色々な支援の一割は本人が負担し、そのほかの半分は介護保険そして費用の残り半分は税金から支払われます。この税金からの支払も、国が負担する部分が二割、都道府県が負担する分が十二、五パーセント、市町村が負担する部分が十二、五パーセント、調整交付金が五パーセントと四つに分割されます。僕たち家族は、これまで介護は保険からと、単純に考えていましたが、税金の負担分もこれほどあったのかと、改めて知ることになったのです。

祖母の体の様子から、手すりなどの器具を借りること、バリアフリーの器具を設置すること、歩行を補助する器具を借りることがあつという間に決まり、すぐ設置してもらうことができました。歩くことをあきらめ、がっかりしていた表情が、生き生きと変化し、自分から進んで立ち上がろうとする祖母を見て、僕たち家族は安心しました。思いの他、たくさんの支援を受けることができたのです。

今まで、税金については、学校で学んだ範囲しか知らなかったし、身近に考えることはありませんでした。そして、どちらかと言えば、税は一方的に『払う』存在だったのです。今回、祖母の出来事をきっかけに専門家の方の話を聞き、財源についての知識を得ました。そして実際に税金によって助けられた経験は、いずれ納税者となった自分にとって税金の使われ方について積極的に知る第一歩となるだろうと感じています。税金の使い道はたくさんあります。子供から老人まで、たくさんの人の幸せな生活を支えるため、みんなが支払った税金を有効に使って欲しいと思います。そして、将来、誇りをもって納税する大人になりたいと今回僕は思ったのです。

雪国を支える税

北海道教育大学附属札幌中学校 1年 本田 瑠々花

「雪が多いので冬の除雪が大変です。」

これは私の学校のフィールドワークで訪れたシニアホームで「何か困っていることはありますか」と働く方に質問した際におっしゃっていた言葉です。北海道では冬になるとたくさん雪が降り、私が住む札幌市では去年は少し少なめだったけれど、年間平均五七七 cm も降ります。なんと私の身長約四倍もの高さです。春になると溶けてしまう雪ですが、そのまま放っておくと生活できなくなるため、それを道路脇によける作業「除雪」を行います。実はこれにも税金が使われています。

今まで当たり前のように歩いてきたきれいに舗装された道路。その陰にはたくさんの方々が納めてくれている税金と日々雪の中働く方々の努力がありました。小学生の頃、まだ除雪されていない公園に入ってみたことがあります。浅そうに見えても深くまで雪が積もっていて、足がもつれてしまいました。この時初めて「これが道路一面だったら本当に危ないなあ」と除雪のありがたみを知ると共に雪道の危険さを感じました。つまり、除雪は、雪国の住民の命を支える、なくてはならない存在なのです。しかし、これには膨大な費用が必要で、なんと札幌市では除雪関係費として年間二〇八億円（平成二十九年度決算）もかかっているそうです。赤ちゃんも含め札幌市民一人当たり年間一万円を負担していることとなります。なぜこれほどの費用をかけて除雪を行うのでしょうか。それは、私達の安全を第一に考えてくれているからでしょう。そしてそのために日本中の方々が税金を納め、雪と共に生きることの楽しさを与えてくれています。

楽しさや喜びの陰には必ず誰かの努力と苦労があります。そして、その努力と苦労があるからこそ、私達は毎日安全に楽しく過ごせているのです。今年の冬、除雪され、きれいに舗装された道路を見て、私は何を思うのでしょうか。きっと税を納めてくれている方々、除雪をしてくれる人々に素直に「いつもありがとう」と改めて感謝すると思います。最近では、技術が進歩し、昔手作業で行っていた除雪もほとんど機械で行うようになりました。それによって、住民だけが家の近くの道路の除雪を行うのではなく、市や町内会、企業から委託を受けた除雪専門の会社はその仕事のほとんどを行っています。私達の仕事が減ったということは、その分誰かが賜ってくれているということです。私はそのような方々の努力とそれを支える税金の仕組みに深く感謝しています。日本では高齢化が進んでいて、ますます除雪が大変になります。このため、税金を払わなくてよいならそれに越したことはありませんが、税がなくては安心して生活ができないため、みんなで負担する税の仕組み、雪国を支える税は大切だと思います。

輝かしい未来のために

学校法人石川義塾石川義塾中学校3年 菊地 未柚

私はこの夏休み、学校の社会科見学で国会議事堂を見学した。議事堂内では、参議員選挙で障害をもつ二人の国会議員が誕生したことによる議事堂内のバリアフリー工事中であった。私は、国の重要機関である国会議事堂内のバリアフリー化が未だに試されていなかったことに驚いた。そして最も衝撃を受けたのは、この改修工事に対する反対意見があるということだ。工事費用が税金で賄われることから、バリアフリー化の必要性、さらには障がい者が国会議員になること自体を問題視する意見もあるという。健常者も障がい者もフラットに生き、選択が出来る世の中であるべきなのに…。東京からの帰り道、私は母とのこんな会話を思い出していた。

母は、通信制の高校で教鞭をとっている。通信制の高校には、様々な事情を抱えた生徒も在籍している。学習障害や知的障害などの発達障害を持つ人、一見どこにでもいる学生に見えて家庭環境が複雑で苦しい思いをしてきた人、人生をやり直そうと頑張る五十代の人などなど。

「みんな個性的で楽しい。ま、個性が豊かすぎて大変だけどね。」

と、母は嬉しそうに笑っていた。どのような環境の下でも“学びたい”という各々の意思を尊重し、サポートしている母の姿が誇らしくも思えた。そしてもう一つ、学費についての話も聞いた。高校在学中の生徒に対して国が学費を支援する「就学支援金」があるという。支援金は全日制でも通信制でも大差なく、保護者の収入によって支援の金額が決まるそうだ。その支援によって助けられ、安心して学んでいる生徒は数多くいると母は話していた。

「就学支援金制度」の財源は、国民が納めている「税金」だ。税金とは身近なもので、「大人が働いて払うもの」では無い。十月から消費税が引き上げられ、軽減税率が導入されるにあたり、マスコミや新聞でも様々な意見や論争を耳にする。確かに買い物をして、高い消費税が掛かれば損をした気持ちになるかもしれない。世の中には、自分の損得だけを考えて“税金逃れ”をしている人が少なくないと聞く。しかし、大切なことを見失ってはいないだろうか。私たちが支払った税金の先には、障がいを持っている人が生きやすい環境があり、学費が無く就学を諦めていた人がもう一度学び直せる環境がある。そして何より私たち一人ひとりの輝かしい未来がある。いかなる事情があっても、多くの笑顔や未来を創る大切さを誰にも忘れて欲しくはない。

様々な立場の人たち同士が支え合い、人間らしく生きる権利を保障する「社会保障の充実」こそが、日本の未来であると私は確信している。来年、私も高校生になる。将来、納税者の一人として皆さんに恩返しができる人物に私はなりたい。

私の妹は、身長が伸びにくいという、病気を抱えていました。ですから、一年前まで、定期的に病院に通い、毎日注射を打っていました。

私と妹は、小さいときから身長が低めで、母からの遺伝のせいだろうと思っていました。特に妹は、幼稚園で並んでいても、他の子より格段に小さかったのを覚えています。

あるときの小学校での身体計測で、妹は病気で背が小さいことが発覚しました。時がたてば、身長は自然に伸びて、他の子との差も縮まるものだと思っていた私達家族は驚き、とてもショックでした。加えて、妹は背が小さいことで、学校で友達にいじめられていました。家に帰って来てから泣くこともあったし、学校に行きたくないと言うこともありました。もしも、このまま他の子と身長の差が開いてしまったら、負けず嫌いの妹は精神的に辛いだろうし、私も悔しくてたまりません。

けれども、その病気にかかっている間、薬による治療を行えば、身長が伸びる可能性があるということを知りました。私は一安心しました。

「背、伸びるって。良かったね。」

と、妹に笑って声をかけたのを覚えています。

しかし、安心したのもつかの間、両親が、治療にはお金が必要、という話をしているのを耳にしました。それも、金額は莫大。私の家庭で容易に払えるものではありませんでした。私はその頃、まだ金銭感覚が身についておらず、明確な金額までは分からなかったけれど、家族の深刻な表情から、それは感じ取ることができました。

けれど、数か月後、妹は病院に行き、治療を開始しました。税の力のおかげです。税金の使い道の一つとして存在する、小児慢性特定疾病対策における医療費助成によって、本来ならば高額な医療費がかかる治療でも、各家庭の経済的負担を減らすことができるのです。妹もそれによって治療を受けることができました。

今、妹は、他の子と同じくらい背が伸びて、並んでいても差を感じないようになりました。税の支えがなかったら、今頃、もっといじめがエスカレートしていたかもしれません。今のように、自分に自信を持ち、堂々とした妹はいなかったかもしれません。妹は、身体面でも精神面でも税に大きく助けられました。

世の中には、今日も、妹のように税によって心が照らされている人がたくさんいると思います。税を払えば、必ず誰かの力になることができます。これからは、そういうことを心に留めて、日々税に向き合っていきたいです。税は、人の心を明るくし、社会を明るくします。

私たちの暮らしを守り築く税金

気仙沼市立大島中学校 1年 新妻 千里

平成三十一年四月七日、私が住んでいる気仙沼大島と本土を結ぶ、島民にとって悲願の橋が開通した。名前は「気仙沼大島大橋」。大島と気仙沼市の本土を結ぶ架橋の考えは、一九六七年に策定された宮城県勢発展計画で初めて示された。それから約半世紀を経て、大島と本土が橋でつながった。

何故、気仙沼大島大橋が建設されることになったのか。その理由は、平成二十三年三月十一日に起きた東日本大震災にある。この震災で大島は津波に襲われ、山火事が発生した。島民の生活を支えてきたフェリーや客船は陸に打ち上げられ、焼失した。本土と結ぶ船の運航が途絶え大島は孤立し、食料や医薬品、救援物資などが届かず、島民の命が脅かされる事態になった。

震災当時、四歳だった私は、津波で家を流された親戚の人たちと一緒に、自宅すぐ近くに住む祖母の家に身を寄せていた。本土で仕事をしている父とは約十日間連絡をすることや、船がなくなり会うことができなかった。

気仙沼大島大橋が開通する以前は、大島と本土を結ぶ交通手段は定期的に運航する船だった。本土へ通勤や通学、買い物や病院に通院するなど、その定期船は、島民にはなくてはならない生活の足だった。しかし、三月十一日に発生した震度七の大地震。大津波が東北地方の太平洋側、ここ、気仙沼大島にも押し寄せ、これまでの安定した生活を一変させた。そこで、県は災害時の島民の安全や、これからも安心して生活ができるように、「命の橋」として大橋を建設することにした。

気仙沼大島大橋本体の建設にかかった費用は約六十億円。大橋につながる道路も含めた総事業費は約二百七十億円と、多額な税金を使い、今も建設を進めている。

大地震や津波だけでなく、洪水や土砂崩れ、地球温暖化の影響による異常気象など、毎年、数多くの自然災害が日本各地で起きている。政府や地方自治体は、自然災害に対する減災や防災の施設を建設し、被災した後の住民の生活再建や街の復興など、国民や市民の生命を守り、私たちが安心して暮らせる社会づくりを税金で行っている。

現在、約二千五百人が暮らす気仙沼大島。気仙沼大島大橋ができたお陰で私たちは安心して生活ができるようになった。そして、気仙沼大島を訪れる観光客が増加し、地域経済を活性化させる源にもなっている。「命の橋」気仙沼大島大橋。気仙沼市の本土と陸続きになり、島民にとって、「命の道」がつながった。

税金は、少子高齢化や環境問題など、日本の社会情勢の変化に伴う課題の解決や、何年、何十年後の国づくりを考え出されている。現在の幸福だけでなく将来の国民生活が豊かになるように、つまり持続可能な社会づくりに重要な役割を担っているのが税金であることを理解し、一国民として納税の義務を果たしていきたい。

助け合う力

茨城県立日立第一高等学校附属中学校3年 寺崎 千尋

「行ってらっしゃい。必ず帰ってきてね。」放射線量を示す電光掲示板にそう書かれてあった。今年福島へ行く機会があり、その時それを見かけた。元々は交通安全を願ってのメッセージだろうが、帰宅困難地区にあったため、また皆で暮らしたいという地元の人達の思いが込められているようだった。震災から八年が過ぎたが、今も苦しみや悲しみと闘っている人がいることを改めて気付かされた。

中学生でも出来ることはないだろうかと、福島の実況を調べてみた。仮説住宅は災害公営住宅へと建て替えられ、悪天候や災害時でも円滑に救援救助が行えるようにと相馬福島道路も開通された。津波地区の復旧、復興事業は今年度で概ね完了する予定だ。復興に向け、確実に歩んでいた。また復興には、長い年月と莫大な費用がかかるため、「東日本大震災復興法」という法律を制定し、復興特別税が作られたことを知った。復興特別税は被災地の復興にのみ使用されるもので、所得税、法人税、住民税からなる。法人税は二〇一二年から二年間で廃止となったが、所得税は二〇一三年から二十五年間、住民税は二〇一四年度から十年間、一人一人の大切な増税によって成り立っているものだった。

この期間を長いと思う人もいるかもしれない。だがそれこそが帰宅困難者のこと、事故の起きた原発の廃炉問題、風評被害問題等、難しいことも全て解決し、復興を成し遂げるという強い思いが伝わってくる。勿論納税することだけが福島を応援することではない。しかし思いはあっても、個人で二十五年間応援し続けることが出来る人は少ないのではないだろうか。

「納税の義務」について学習したが、義務という言葉に拘束を課されるというイメージが強かった。だが今回福島を通じて、税金は私達の生活の礎であるだけでなく、窮地に立った時には支援してくれる存在だと分かった。募金や福島産の物を購入することも、福島を応援することになる。しかし税金は国民一人一人が力を合わせて助け合っているからこそ大きな力になれる。

東日本大震災後も熊本や北海道でも大きな地震が起きた。また少子高齢化も進み、益々税の果たす役割は大きくなっている。だが二〇一五年度に発覚した脱税額は一三八億円。発覚していないものを合わせると、それ以上になる。いつ何が起きるか誰にも分からないからこそ助け合うことが大切で、そのために税金があることを認識すべきだろう。また財源には限りがあるので、税の使われ方にも関心を持つ必要があると思う。

私の世代から成人が十八才になる。共に助け合うという自覚を持って納税したい。そして一日でも早く、被災者全員が安心して暮らせるように、これからも微力ではあるが、福島を応援していきたい。

税金は不平等？

矢板市立矢板中学校 1年 石川 結衣

今回、税金の作文を書くにあたって、何を書けばいいか母に相談してみた。母は、「伯父さんとあなたのお父さんどちらがたくさん税金を納めていると思う？そして、どちらがたくさん税金を使っていると思う？」と尋ねてきた。

伯父は独身で祖父母と一緒に住んでいる。いつも食事に、連れて行ってくれたり、欲しい物を買ってくれたりする。お金に不自由はなさそうだけれど、税金をどのくらい納めているのかなんて想像がつかない。父に関しても、納めている額は分からない。しかし、うちには私を含めて子供が三人いる。学校からもらったプリントに、年間教育費負担額として、中学生は約百二万二千元、小学生は約八十九万四千元の税金が使われていると書いてある。税金を多く使っているのは、多分うちだろうということは想像できた。

正解は、たくさん納めているのは伯父で、やはり、たくさん使っているのはうちだった。

税金は、扶養家族（子供など）がいる人や、ローンを組んで家を建てた人、医療費がたくさんかかった人などは、安くなるらしい。

伯父は、独身で子供もいなくて、家も建てていないので、もしも父と同じ収入だったとしても税金は高くなるそうだ。たくさん納めているのに、他の人に使われるなんてなんだかかわいそうだと思った。

祖父の家に遊びに行ったときに、伯父に聞いてみた。「税金をたくさん納めるの悔しくない？」伯父の答えは意外なものだった。「うちのおじいさんとおばあさんが年金を貰っているし、おじいさん達の医療費はずいぶんと安い。その分だと思えば仕方がない。それに、子供を育てるのは周りを見ていて分かるけど、すごく大変だと思う。自分はそれをしていないんだから、税金くらい納めるよ。」と言っていた。その答えに私は^{はっとした}衝撃を受けた。

私は、損得で税金を考えていたのだ。税金は、助け合いの精神の上に成り立っているんだなと思った。

日本は累進課税という方式で税金が計算されているそうだ。たくさん所得がある人がたくさん税金を納めて、所得が少ない人は、納める税金が少ないか、納める必要がない。

今までの私だったらすごく不平等だと思ったかもしれない。今回、母や伯父の話聞いて、自分のためでもないのに高い税金を納めてくれている人達がいることが分かった。そして、そんな税金を私達子供は、たくさん使わせて貰って生活している。学校に通って勉強できるのも、病気やけがをしたときに安心して病院に行けるのも、みなさんが納めてくれた税金のおかげなのだ。だから、絶対に無駄にしてはいけないと思った。

そして、いつか私もきちんと税金を納めて、社会の助け合いに参加できる大人になりたい。

その電話は今年四月中旬の夕方、母の携帯にかかってきた。「あなたのお母さんがトイレで倒れ、救急搬送中です。すぐに病院に来てください。」あまりに突如な電話だったため、母は新手の詐欺を疑ったらしい。しかし、その知らせは現実だった。僕の祖母は脳出血で倒れ、緊急手術。一命は取り留めたものの、自立生活ができない「要介護5」の身体になってしまった。明るく元気な祖母を襲った病気は、母の実家の環境だけでなく、僕たち家族の生活も変えた。そして、僕にとって、「税金」について考えさせるきっかけにもなった。

81歳の祖母は、88歳の祖父、障害のある叔父（母の弟）との三人暮らしだった。祖母は休みなく家族の世話をし、僕たちが遊びに行くと、料理好きの腕をふるってごちそうを作ってくれた。しかし今は、左半身が全く動かずおむつをして病院のベッドに寝たきりの状態。口から飲食できずに、胃ろうで栄養を摂っている。時々お見舞いに行くと、抑揚のないとぎれとぎれの言葉で、「うれしい。ありがとう。」と言って泣く。悲しいことだが、この先もずっとこのままの状態、自宅に帰ることもかなわないそうだ。僕は祖母の病状も心配だが、経済面も心配になってしまった。この状況が続くと、収入のない祖父母にはかなりの負担になるからだ。すると母が、「年金をもらっているし、医療費は税金で補助してもらえるから大丈夫。おむつも、申請すればお金が戻ってくるんだよ。」と教えてくれた。僕は驚き、今まで税金についてきちんと考えたことがあっただろうか、と思い返してみた。

僕が使う教科書には、「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています」と書いてある。医療費も中学卒業までは無料だ。朝出したごみはきれいに片付き、通学路も整備されている。日本を担う僕たち若者にとって、税金はとてもありがたい。これまではその程度の認識しかなかったが、祖母の病気を通じ、税金はすべての人に等しく役立っているということを実感した。祖母を搬送してくれた救急車は無料だったし、入院費や介護用品の購入には補助がある。祖父と叔父のためにヘルパーさんが食事を作りに来ているが、その費用の補助もある。免許のない祖父はお見舞いに行く際にタクシーを使うが、その運賃にも補助が出るそうだ。また母は毎週末、税金で整備された高速道路を走って実家へ通っている。まさに万人のための税金だ。今回の件で僕は「みんなが納める税金で社会が作られている」、「この安定した暮らしは国民みんなで支えている」と気づくと同時に、自分の立場でしか考えていなかった甘さを反省した。

祖母は寝たきりながら、毎日リハビリに励んでいる。僕がやるべきは自覚ある納税者になり、万人が輝ける社会を築くことだ。今後は広い視野で物を見て、日本を担う若者としての責務を果たしていきたい。

日本に生まれて

狭山市立堀兼中学校3年 栗原 優衣

「勉強ができ好きなことができる今のくらしは幸せですね」この作文を書こうと思ったときこの言葉が頭に浮かんだ。これは私が小学校三年生のときに担任だった先生からいただいた年賀状に書かれていた言葉だ。

先生は毎年クラスの児童達と撮った写真で年賀状をくださるが、この年はカンボジアに旅行したときの絵はがきで年賀状を書いてくださった。二年前にいただいたこの年賀状を私はもう一度読み返した。その絵はがきには、カンボジアが本当に貧しい国で内戦が続いていた中、懸命に生きているたくましい暮らしに感動したことと、この絵はがきを、「一ドル？」としつこく売りにくる子供達は、裸足だけど、目が輝いていたことが書かれていた。私はその光景を思い浮かべて胸が痛くなった。世界には、そんなに貧しい子供達がいることを改めて知った。先生の字で書かれていると、より身近なことに感じた。先生はどんな気持ちでこの絵はがきを買ったのか、そして私にどんなことを伝えたくて、このはがきを書いてくださったのか、改めて色々なことを考えた。裸足で絵はがきを売らなければ生活できない子供がいるカンボジアの税金の制度が気になった。調べてみると、カンボジアにも税制はあるが世界の最貧国の一つなので、国連を中心とする各国の支援により治安も経済も安定してきてはいるが、人々の生活は、大変苦しいそうだ。色々な支援により学校もつくられてはいるが、親が働けず収入を得られないと、子供が働いて親を助けなければならない為、就学ができない。進学率も深刻で小学校四十七%、中学校四十%、高校三十二%という低さだ。しかし、こうした貧しく苦しい生活のなかでも、子供達や若者達の表情は明るく意欲的だという。私は、カンボジアの人々が少しでも豊かになって、子供達が勉強や運動ができる環境が整うといいなと思った。それと同時に、私の今の暮らしは恵まれていて、本当に幸せなんだと思った。生まれた国が違ったら、私が裸足で絵はがきを売っていたかもしれない。そう思うと、この国に本当に良かったと思った。

今回税金について勉強し、両親が一生懸命働いてくれるだけでなく、日本の税制の恩恵を受けて今の暮らしができていくことに、深く感謝しなければならないと思った。受験勉強が本格的に始まり疲れてしまうときもあるが、勉強ができることは幸せなんだと思って、頑張ろうと思った。改めて、大切なことを気がつかせてくれたこの絵はがきを送ってくれた先生にも感謝しなければと思った。

先生の絵はがきは、

「しっかり勉強して下さい。英語は、とっても大事だよ。世界は本当に広いと思った二〇一七年の始まりでした。」

という言葉で締めくくられている。受験生の私を応援してくれているかのよう

夏の日に想う

さいたま市立浦和中学校2年 ガーナー アンジェリー すみれ

今の私がいるのは、たくさんの方に助けていただいたおかげです。

八月二十日、蝉の声が聞こえる夏の日。我が家にとって特別な日がやってきました。毎年、部屋にバラの花が飾られるこの日は、私の姉、ローズィこころの日です。

私の姉は、生後一ヵ月健診で心雑音が聞こえ、病院で診察すると、生まれつきの心臓の病気、ファロー四徴症だと診断されました。そこからの日々は、カテーテル検査に生後七ヶ月での心臓手術。その後、ICUでの長期入院。ローズィは日本の最先端治療を受け、両親は献身的に看病したそうです。

病状とともに心配だったのが、桁違いの医療費。のしかかる高額医療費に救いの手を差し伸べてくれたのが、『小児慢性特定疾患医療給付制度』、『育児医療費制度』、『高額療養費制度』だったそうです。

しかし、蝉がなく暑い夏の日、ローズィは病院の先生方、両親、祖父母に見守られながら母の胸の中で天国へ旅立ちました。

国からの助成金に助けていただき、若かった父と母は、失意と悲しみの中、感謝の気持ちとともに、人生を前向きに生きていくことが出来たそうです。なぜなら、多額の出費はとて払える金額ではなかったため、もし、全額借金で支払うことになっていたら、生活は成り立たなくなり、今の私は生まれてはいなかったでしょう。そして、ローズィと同じ誕生日に生まれてきた双子の妹たちも、この世にはいなかったと思います。

少子化が進む中、三姉妹で賑やかな毎日を過ごしているのは、高額医療費制度で安定した生活を補償してくれたおかげだと思います。考えてみると私の身の回りにある、道路、公園、学校、大好きな給食と図書館、ゴミ回収から処理。また、生活の安全を守る警察や消防、災害時には自衛隊。このように、生活のあらゆる場面で税金の恩恵を受けて、私は育ってきました。今、私が通う公立中高一貫校でも、さいたま市の大切な税金を使わせていただき、充実した教育を受けています。

私は、今まで支えてくださった方々へ恩返しができるよう、これからもしっかりと勉強に向き合って学んでいきたいと思います。そしていつか大人の一員として、立派な納税者になり、少子超高齢社会がますます進む日本の未来を今度は私が、支える側になりたいです。

ローズィは天国からそっと見守ってくれている気がします。夏の蝉とともに。

心を育てる源

新潟大学教育学部附属新潟中学校3年 中島 ももみ

私が住む新潟市には、誇れるものがたくさんある。青い海や緑いっぱいの山々、黄金の田園、自然も多いが、文化的な事業が盛んであることも私が故郷新潟を誇らしく思える理由の一つである。新潟市には、新潟県民会館や芸術文化会館、美術館、また各区にある小中規模の劇場など文化の受け皿となり、発信基地となる施設がたくさんある。そして、そのような施設には、たいてい税金が使われており、希望がある人に広く利用してもらえるように維持されているのだ。私は、幼い頃から、バレエや音楽、演劇を習ってきたので、このような劇場を年に何度も使用してきた。

そのような環境が整っているせいか、新潟市には、日本で唯一の劇場専属舞踊団の noism が活動している。また高校、大学ダンスがとても盛んであったり、ジュニアオーケストラや合唱団、劇団なども熱心に活動している。

私が稽古に通う会館では、noism が活動していて、憧れのプロのダンサーの姿を身近に見ることができ、影響を受けることも多い。このようなことを言うと、「別に踊りには興味がない」「芸術ではお腹がふくらまない」などと公的な資金を使った文化的な事業を無駄だと断罪する人もいる。たしかに、そうかもしれない。少子高齢化が叫ばれる今日、もっと生活に直結することに税金を使うべきだという意見にも頷ける。また、外交の問題などが山積みするなかで、文化事業は最優先すべき課題とは言えないというのもわかる。

でも、私は文化こそ、平和な生活において絶対に守らなくてはいけない大切な余分だと思うのだ。歴史を学んでみると、戦時下には音楽や演劇などが自由に楽しめなくなっていたことが分かる。好きな音楽を聞くことができ、歌うことができる、感情を身体で表現する自由がある。そして、それらが自由にできる場所があるというのが平和のバロメーターともいえるのではないか。

税金で文化をサポートしていく活動は、平和な町だからこそできる素晴らしいことだ。図書館もその一つである。あれだけの蔵書を個人で集めることは到底できないのだから、学生だけでなく、大人もおおいに利用すべきだ。

何か新しいことを税金を使って始めようとするとなぜか無駄か無駄じゃないかという議論になる。しばらくして利用者が少ないと無駄だと断罪される。そうではない。地域に住むみんなが町の文化を作り上げていこう、担っていこうと考えればよいのだ。すぐに利益が生まれることではないかもしれないが、細く長く育てていかななくてはならないことだからこそ、国や自治体の力が必要なのである。私たちの町に納められた税金を使っているのだから、心を育てる事業も、みんなでどんどん利用して、明るく素敵な町になるようこれからも守り続けてほしいと願っている。

それでも私は「消費税増税」に賛成です

信州大学教育学部附属長野中学校3年 松澤 翠子

「消費税増税、反対！」先日の選挙時など、よく耳にした言葉だ。生活に直結するからこそ、反対意見があることは理解できる。では、なぜ消費税の増税が必要なのだろうか。

日本の借金は約一千兆円。しかし、その中の多くは日銀や政府の借金であるため「国民一人当たり約九百万円」という表現に惑わされる必要はない。また、お金は常に循環している。例えば、徴収された税金から年金が配分され、その年金から生活費が支払われる。その時のお金が国の資産となる。つまり、国の借金として支払われたお金が資産として戻ってくる。これは、国債の約九十二パーセントを国内で所持する日本だからこそ成り立つ循環だ。だから、増税は必要ない—反増税論者が唱える意見の一つだ。私は、これらの意見については納得できた。しかし、日本経済がこのまま順調に成長を続け、同様の公的サービスを将来も私達は受けられるのだろうか。

少子高齢化の厳しい現状があり、年金を含む社会保障費が今後増え続けることは避けられない事実だ。より財源を確保する必要がある。低所得者にも一律の負担を強いるのは不公平なように思えるが、高所得者は別に多くの税金を支払い、経済を牽引し、豊かな日本へと導いている。最近、「オールドリッチ」「ニューリッチ」という言葉を知った。ニューリッチは自分や仲間のために浪費をし、オールドリッチは文化育成などの社会貢献のためにお金を使うことが多いと聞いた。日本が文化的に富み、国力を保ってこれた背景にはオールドリッチの存在がある。ただ、残念ながらこのような思想をもつ人は減少しつつあり、花開くまでの投資は不透明である。だからこそ、消費者全員が平等に国、文化、産業を支える担い手の一人であるとして考えてみてはどうだろうか。

私は、膨大な借金があっても破綻せず、GDP世界三位である日本に生まれたことを幸せに思う。ごく普通の家に生まれ育っているが、衣食住に困ることなく、多くの選択肢や自由に恵まれているからだ。困った時には、国が助けてくれる。そのような公的サービスを支えているのは、税金だ。日本人は心配性で「もったいない」という精神を持ち合わせている。よって、貯蓄率も高い。これは、日本人特有の素晴らしい経済観念なのかもしれない。驚くような税率の北欧の人々は、納税負担と引き換えに安心と安定を得ている。私も安定した将来のために安心がほしい。消費税の増税分についても、貯蓄の上乗せ、保険として考えてみてはどうだろうか。消費税は公的サービスの恩恵を受ける人全員が平等に負担し、安定した財源を確保できる税金の一つだと思う。

情報が錯綜する現代で、正解を見い出すことは難しい。自分自身の答えを出すことが、必要だ。増税に反対する意見も多々あるが、『それでも私は「消費税増税」に賛成です』。

「税を使うばかりではなく、支払い、社会を支える側になりたいんです。」この言葉は、会社の人事部で採用の仕事をしている母が面接したハンディキャップのある人から聞いた言葉だ。母は年間何十人もハンディキャップのある人を面接しており、中には重いハンディキャップを持ちながら何社も応募している人もいるそうだ。

納税という言葉を知ると中学生の私でも厳粛な気持ちになる。ニュースでは連日、消費税増税に対する話題を取り上げている。消費税はほとんどの国民から徴収する私達に一番身近な税なので、もちろん私達も「納税者」だ。「納税者」になるとなんだか自分が国を背負っている気持ちになるなあ」と軽い気持ちでつぶやいたら、「碧みたいな気持ちを持ちたくて納税者の立場になることを心から望んでいる人たちがいるんだよ」と母が冒頭の台詞を教えてくれた。母の会社を受けに来るハンディキャップを持つ人はほとんどの人が「障がい者手帳」という物を持っているという。調べてみるとこの手帳を持つことにより交通料金や税金の減税や免除、映画館などでの利用料金の減免など様々な福祉サービスを受けられることが分かった。そしてその財源は国の社会保障関係費だ。しかし、それらのサービスを受けるだけでなく、自ら「働いてお金を稼いで、納税して社会の一員であることを実感したい」と強い思いをもつ人も多くいるそうだ。冒頭の思いを話してくれた人も寝たきりでも在宅で働けないかと北海道から応募してきたのだという。社会の一構成員として「社会と繋がりたい」「社会に貢献したい」という気持ちを強く持ち続ける人が多くいると聞き、私は身が引き締まる思いになった。本来、社会に出て働き、納税することは「喜び」であり「誇り」なのだ。そう考えると納税は国民の義務であると同時に権利であると言えるかもしれない。未来の誰かを支える権利。私もいつか納税を通じて未来の子供達を支援したい。誰もがこの権利を行使したいと思う世の中になって欲しい。そのためには納められた税に対し私達自身が積極的に学びを深め、より良い使い方がされているか、意識を動かすことが必要だ。税がどのように生活の中で役立っているかを知る機会が今は圧倒的に少ないと感じる。学びが少ないことはその後の知識の貧弱さに繋がる。人は分からないことに対してはだんだん関心がなくなっていく。そしてそれが納税者から本来ある「社会の貢献への喜び」を奪い、納税を怠る事や増税への不安、不満を生むのではないか。

「納税」した後の「使い道」にも納税に喜びを感じてくれた人がさらに喜びを感じる社会になると良い。私もいつか喜びとともに、支払う立場にたてるように学びを続けるつもりだ。

豊かで住み良い社会にするために

北区立堀船中学校 2年 青山 はる花

朝起きて顔を洗う。朝食を済ませ学校へ。私の日常…。私は普段の生活の中で税について考える事はほとんど、いや全くありません。でも税金が私達の生活を支える為に使われている事は知っています。学校へ行くまでだけでも、洗顔や朝食等で使用する上下水道の一部や登校時の道路や信号機。学校では教科書や机、椅子等、税金によって生活できています。税金によって私達は豊かで安全な生活を送る事ができているのですが税金は、「増税により生活が苦しくなる」「税金がどの様に使われているのか不透明だ」等、悪いイメージが先行されていると思います。なぜ税金が必要なのか。救急車の例で考えてみました。現在日本では電話をすれば無料で救急車が駆け付けてくれます。一回の出動で約四万五千円程の費用が掛かるそうです。休日や深夜だった場合、時間外の人件費や手当等を考えると、それ以上の金額が税金から支払われている事になります。もし全てが自己負担だったら、命はお金に代えられないと言うけれど生活に余裕のない人は、どんなに具合が悪い状態でも救急車を呼ぶ事はできないかもしれません。また、倒れた見知らぬ人を助けようと思い救急車を呼んだら、感謝されるのではなく、何て余計な事をしてくれたんだと怒られる場合もあるかもしれません。一一九番すれば救急が一一〇番すれば警察が。私達はこれを当たり前だと思っていますが、このような恩恵を受けられるのは税金があるからです。私達が様々な形で納めている税金が、私達の暮らしを支えているのに、なぜ「払わされている」と思ってしまうのでしょうか。物を購入する時にはその代金と引き換えに自分の手元に商品が来るので文句を言う人はいません。しかし今、自分が救急車を呼ぶ訳ではない、自分の家には子供がいないのだから教育費に税金を使われても…。反対に家に高齢者がいないのだから他人の福祉や介護に税金を支払いたくはない等と思ってしまう人がいるのではないのでしょうか。自分がいつ具合が悪くなるかわかりません。今は子供がいなくても将来、自分の子供や孫が産まれるかもしれません。それに人は必ず年を取ります。ですから私達一人一人が目先の損得ばかりを考えるのではなく、税金を払う事は巡り巡って自分にも返って来るという事を理解しなければいけないと思います。税金を払わされている、税金を納める事は国民の義務であると思うより、税金によって私達は助け合って生きていると皆が思えば、もっともっと豊かで住み良い社会になれると思います。私はまだ中学生なので自分の力でできる事はないに等しいですが、将来、社会に出て働く様になったらしっかりと税金を納め助け合って生きる社会の一員になりたいです。

大好きな夜景から学ぶ税金

千葉市立葛城中学校3年 吉野 碧

東京に勤める父の帰りを夜の生ぬるい風を浴びながら九階のベランダで待っている。辺りを見渡すと自分の暮らしは、暑いながらも幸せであることを感じずにはいられない。

今日は、八月十四日。終戦記念日前日だ。私の祖父は決まって話すことがある。

「おじいちゃんが小学校のころは、戦後間もなかったからみんな貧しかった。だから教科書は、友達と半分ずつお金を出し合って二人で使っていたんだ。」

幼少期にはあまり理解できなかったことだが、今年もこの話が出るだろうと予想する。教科書は、国の予算で負担され、無償で配布され続けているものだとずっと思っていた。しかし、明日祖父からこの話が出ることを思うと、自分なりに調べてみようと思った。すると、学制が始まった明治五年から、戦後十五年が経過するまで、教科書は無償でないことが分かった。教科書を国の予算とし、無償にするため人々の熱意や努力があったことは言うまでもなく、感謝をしなければならない。また、格差社会と言われる現在でも、誰もが平等に教科書を手に取り、学ぶことができるのだ。大切に扱い、一層勉学に励んでいかなければならないと痛感した。夜空を見上げると、空には羽田空港へ着陸するための旋回ルートがあるのか、二、三分置きに、赤・黄色・緑のライトを点滅させ弧を描くように頭の上を飛んでいく。

公共交通機関である空港には、税金はどのように関わっているのだろうか。私は再び部屋に入り調べを進める。道路や橋、空港の建設など、公共のための工事を「公共事業」と呼ぶ。産業に役立つ「公共事業」は、国や地方公共に団体歳入として預けられ、議会によって予算決定を経てから造られることで、私達の生活が成り立っている。

今年の七月、私は「子ども議会」に参加した。「みんなが住み続ける千葉市にするために」をテーマに十年後の千葉市について集まった仲間と考えた。教育や道路、自然をテーマにした公共事業など、千葉市長や市議会議員さんに提案した。議会の最後に市長が、「予算は私達の支払った税金」であることを教えて下さった。だからこそ、議論を繰り返して決定し、暮らしを豊かで便利にするために大切に使ってほしいと願う。

現在の日本は、超高齢社会、少子化問題など税金に関わる問題は大きく、毎日のようにニュースや新聞で取り上げられている。日本の財政を改善することが緊急の課題となっているので、自分ごととして捉えていきたい。

明日は、七十四年目の終戦記念日。平和であることに改めて感謝をしながら、教科書のこと、私達の支払った税金の使われ方について祖父に伝える。そして、生活と税金について、自分なりに課題をもって生活してみようと、父の帰りを大好きな夜景を見ながら強く感じた。

税が支える幸せな社会

佐倉市立井野中学校3年 藤井 優花

「幸せ」それは、物事が願ったとおりになり、心配や苦しみがなく、心が満ちたりている状態を言う。私は、この「幸せ」には二つのものが存在すると思う。一つは、個人が求める幸せ。これには個人の価値観や気持ちが何よりも一番大きく表れる。だからこそ、個人が求める幸せはそれぞれ違い、同じものはない。二つ目は、たくさんの、個人の幸せが寄り合わさってできる社会の幸せである。こちらは多くの人々の考えをまとめなければならない。互いの意見の尊重や、平等であるといったことも大切になる。そして、その社会の幸せを実現していくために必要なものの一つとして、税がある。

私達中学生も、税によって様々な場面で支えてもらっている。例えば中学校生活について考えてみよう。教室で使用している机、椅子、教科書。ほとんど全てのもものが税金によってそろえられている。税金が存在しない世界の中では、みんなが同じように学校という環境で学習をすることはかなわないであろう。今私達が学校で学んでいることは、当たり前のことではなく、税によって整えられた大変ありがたい事柄なのだ。税によって私達の学習が支えられていることを再認識し、机に向かう時の気持ちが変わった。感謝の気持ちが生まれた。

国や千葉県の支出割合を見てみると、どちらも教育にあてる割合がとても高い。それだけ、将来の日本を担っていく私達への期待が大きいのだと感じ、気持ちが引き締まった。教育によって人が成り立ち、社会が創られる。私達もその期待に応えられるように、今だからこそ学べることをしっかりと学習していかなければならない。そして、大人になった時、税をしっかりと納めることで次の世代の教育を支えていけるようになりたい。今から税について理解を深め、多くの税金を納めていけるような立派に仕事をする社会人になりたい。

今の日本は、急激な少子高齢化が進んでいる。他国と比べても、日本は六十五歳以上が占める人口の割合がとても高い。将来、一人の高齢者を支える大人の数もより減少し、それだけに税の役割も大変大きなものとなっていくだろう。そもそも、日本がこれだけ長寿の国となったのも、税により介護や医療などの制度が充実したお陰である。だから、自分の将来の幸せばかりを考えずに、私達の国全体の暮らしやすさを求め、支え合いや助け合いの気持ちを忘れてはならないのだと思う。

税とは、共存を目指す社会の象徴だと思う。日本国憲法に三大義務として「納税」が定められていることから、とても重要なことだとわかる。人々が皆、それぞれの幸せを少しずつ分け合い、社会の幸せは形を成していく。私達は納税によって、よりよい未来の一部をつくる。皆の思いやりが集まる未来は、きっと明るいものだろう。社会が一つになって幸せを目指す道に、赤信号はないのだから。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」小さく印字されたこの短い文には強いメッセージ性がある。

母の故郷であるインドネシアに行った時の話である。ある日、いとこのレンディの学校を訪れることとなり、他国の学校生活を体験できる機会に胸を躍らせた。しかし校舎には扇風機もエアコンもない。傷んだ机には、滝のように流れ落ちる汗が池をつくりあげた。つぎはぎだらけの教科書。三人で一冊を見ている生徒もいた。教材はお金がかかり、決して安くない。新品を一式揃えるのが厳しい家庭も多いのだそうだ。生徒を取り巻く環境が日本と違うことに気づかされた貴重な体験だった。

意欲的に学校へ通うも、十分な環境で学習することが叶わず、結果的に理想としない進路となり、就職などにも影響がでているそうだ。否応無しに働く子供、遠距離移動をする手段も無く、通学を断念せざるを得ない子供も世界にはいる。学校教育の課題の大きさは計り知れない。

「租税とは文明の対価である。」アメリカの内国歳入庁に刻まれたオリバー・ホームズ裁判官の言葉には強い共感を覚えた。日本では税金から成る大きな財布、すなわち国からの費用として多額の予算が組まれ、支出されている。それらが、学校施設や教科書教材、研究費用に教師の給料までも賄っている。税金が公的支出となることで全ての子供が平等に学業に励む体制をつくることができ、家庭環境及び経済的問題などの影響で子供の学力に大きな差が出ることを対策することにもつながるのだ。そして、通学に使う道路や僕たちの安全を守る警察や消防なども税金によるものである。水やガス、電気と同様に、税金もライフラインとして生活を支えているのだ。

買い物をする時に払う消費税。このお金が経済の血液となり、やがて誰かを助け、幸せにするのだろう。税金はいわば共に助け合って社会を発展させていく大きな礎であり、憲法で保障された義務の通り、もはや欠くことのできない大切な制度だ。そして更に大切なことは、僕たちがこうした制度の上に立っていることである。対価とは公助であり共助でもあることを意味する。僕たちは税の存在意義を見直す必要があるのではないか。そして、将来の担い手として数年後には納税をし、新しい日本の社会で平和に暮らすことが義務でもあるのではないか。

手にとる教科書には、多くの人の夢と希望が詰まっている宝物だ。そして、創意工夫のなされた落書きを施した教科書は、今、目にすることができない人々からの贈り物でもあるのだ。僕たちにできる納税者への恩返しは、教科書を一年間大切に使うこと。社会に貢献する第一歩は誰かの役に立とうとする意識によるものだと思う。

税金が与えてくれる安心

鎌倉市立第一中学校3年 中島 咲季

現在、日本では急な病気やけがをした際、重症、軽症に関わらず、すべての人が救急車を利用できます。救急隊の人件費、救急車のメンテナンス代、ガソリン代や医療機器の費用を含めた搬送料金も、払う必要はありません。それは、日本での救急車による搬送料金が、すべて各自治体の税金で賄われているからなのです。

私は、今までに三度、てんかん重積状態になったことで、救急車で搬送されました。その中でも、小学四年生のころに発作が起きたとき、それが夜間であったのにも関わらず、すぐに救急車と救急隊の方々が駆けつけてきてくれたのです。私は、そのとき意識を失っていたために、車内の様子は全くわかりませんでしたが、その間に救急隊の方がさまざまな処置を施してくれたこと、そのおかげで脳の損傷も起こらず、命を落とさずに済んだということ、当時入院していた病院の看護師さんが教えてくれて、私はとても安心したのをよく覚えています。また、海外だと、救急車を要請した際、アメリカ、カナダ、ドイツ、フランスなどの先進国でも搬送料金が請求されることを知り、すべての人が、移動距離の遠さに関係なく無料で利用できる日本の救急車搬送は、とても良いサービスなのだと思います。急な病気やけがをした際、誰もが大きな不安に駆られるはずですが、そのときにお金の心配がなければ、救急車を呼ぶことをより早く判断できます。そのため、搬送にかかる費用をすべて負担している税金は多くの人の命を助け、生活の中で大きな病気やけがをしても大丈夫だという安心を与えてくれている偉大なものだと気付かされました。

それだけでなく、病院での受診料や検査にかかる費用も、健康保険がその多くを負担しているのです。私たちは経済的に心配なく病気を治すことができます。また、学校で受けられる健康診断も、公費負担となっているために無料のことが多いのです。私たちが小さかったころ、予防接種の費用が無料だったり、出産のときの費用に補助金が出るのもすべて税金のおかげだったのです。こうして考えてみると、私は産まれたときから今まで税金に支えられながら暮らしてきて、けれどそれは一生懸命働いて納税をしてくれる方々がいて、その税金を管理してくれる方々がいてのことなので、無料という意味をはき違えたりせず、身近に使われている税金に対し、感謝の気持ちを持っていようと思いました。

中学生の私が払える税金は八パーセントの消費税という小さなものにすぎません。しかし、私は消費税以上の恩恵を税金から受けています。私も大人になったとき、一生懸命働いて納税をし、将来の子どもたちが安心して生活を送れる日本を守り続けていこうと思いました。

恩恵への感謝の気持ち

山梨学院中学校3年 千葉 優月

私が生まれる前から建っていた、山梨県立博物館。家から徒歩五分のその場所へ、幼い頃家族によく連れて行ってもらった。時に昔の文化を知り、十二単を着せてもらった。凧揚げをして、戦国時代の弓を引いて、武田信玄の愛馬のモデルに乗った。宇宙の神秘を展示で体感したこともあった。ドジョウを掬って、ほうとうを振舞ってもらった。幼少期に拾い集めたかけがえのない体験に、私はいつも心踊らされ、博物館に連れて行ってもらうのが本当に楽しみだったのを覚えている。しかし、私に様々な経験を与えてくれた博物館の存在に対して、ある日の授業をきっかけに私の意識は、一八〇度変わった。

小学六年生の社会の授業。その日は、「税」を知ろうというコンセプトのもと、自分たち自身で街を築き上げるシミュレーションゲームを取り入れた授業が展開された。友達と楽しみながら学んでいくうちに、私達を陰で支える「税」の存在を知った。またそれは皆が払わなければいけないもので、そのうちの一つに「消費税」があることも知った。だからお菓子の値段はいつも端数なのだと、良く分からないながらも感心したのを覚えている。その次に発せられた先生の言葉には感嘆したのを覚えている。

「公共施設と言ってね、皆の身の回りにある、税金を使って建てられた建物は、無料で利用できるところもあるんだよ。そうだね…図書館、公園、博物館などがその例だよ。」

あの博物館は、今まで知らなかった「税」によって建てられていたのだ。幼かった私の世界を広げてくれた陰の正体は「税」だった。

色々な経験に恵まれて育った私の夢は、医師になることだ。自分の夢を具体化するために、山梨県立中央病院へ医師体験に行った。そこで私の目を奪ったのは、屋上に毅然としていたドクターヘリだった。現役の医師がその巨体を背にこう教えてくれた。県中のドクターヘリは年間五〇〇件ほど出動し、救急患者への迅速な措置に貢献して、尊い命を多く救っていると。なんとフライト費用も税金によって支払われているため、患者さんは安心してヘリで搬送されることができるという。私達の命を救ってくれるドクターヘリが山梨内に待機してくれていることを心強く思うと同時に、ここにも存在していた「税」がどれだけ自分の身近にあり、皆を陰で支えているのかが理解できた気がした。

日常生活で、「税」はあらゆる所に出没し私達に恩恵をもたらしてくれている。しかし、その恩恵が目に見えないが故に、「税」を負担だと感じる人は少なくないと思う。でも、そんな時は周りを見渡してみると、そこには図書館、美術館、博物館、科学館が建ち、道路は整備され、空にはドクターヘリが飛んでいる。全て「税」の恩恵である。私は今感じている恩恵への感謝を大人になるまで忘れず自分の手で納税したいと、強く思う。

「ねえ、俺って税と関わっとるよね？」

僕は恥ずかしげもなく簡単に母に尋ねた。すると、料理中の母は手を止めず淡々と言った。

「中三にもなって何言っとるの。自分で調べられ。」

そんなに冷たい態度をとらなくてもいいのに、と思いながら仕方なくスマホを手にした。僕だって全く何も知らない訳ではない。常識程度の知識はあるし授業でも習った。物を購入すれば消費税を払い、病院を受診すれば医療費は税金が補ってくれる。また、学校で使う実験道具などの備品や毎年配布される教科書などにも税金が使われている。でも、僕が知りたかったのは、もっと他の税の世界だ。

こんな時、物知りのスマホは助かる。検索すると次々と出てきた。僕たちの暮らす社会には想像を超える多くの種類の税があり、国に納める税と地方自治体に納める税があることを知った。今話題のふるさと納税もそのひとつだ。他にも、税を納める方法は幾通りもあることが分かった。

それから一週間ほど経ったある朝。部活へ向かう車内で、運転していた母がルームミラー越しに僕の顔を覗いて言った。

「ねえ、この前言ってた税の話、調べたん？」

なんだよ今さら、と思いながらスマホで既に調べ終えたことを伝えた。

「へえ、ちゃんと調べたんだ。ちゃんと自分で調べた方が分かるでしょ。」

母はそう言って優しい口調で話を続けた。車会社に勤務していた母は、仕事柄車に関する様々な税に携わることが多くあったという内容だった。スマホで知った内容も多くあったが、母の話の中で気になったのは延滞税の話で、納税の義務を怠る人がいることに衝撃を受けた。ふと車の外を見ると、置かれた山積みのごみが目に留まった。このごみの処理だって公的サービスの一環。朝で静まり返るあの公園の維持やそこに広がる河川と架かる橋の整備もである。さらには、冬になれば雪国富山は除雪車の恩恵を受ける。走る車から眺める街の風景には、税の学びが至る所に映しだされていた。もし税金がなかったら、僕たちの暮らしは成り立たない。

中学生の僕は、義務教育とされている暮らしのなかにのほほんと暮らしている。でも、成人とされる一八歳まであと僅か。そこで与えられる選挙権。無駄のない税の使い道を決めるリーダーに投票する一票を真剣に選ぶ必要がある。そして、社会を営んでいくという自覚を育てていきたい。国民の三大義務のひとつ「納税の義務」を心に置き、税は「取られている」という意識から「納めている」という社会貢献の気持ちに変えて、一人ひとりが国を支えていくべきである。そうすれば税の滞納も無くなるのではないだろうか。

税は、明るく安心して暮らすための重要なシステムである。個の富ではなく社会の豊を大事にしていこう。

税金は「得」を買うもの

敦賀市立松陵中学校 1年 和田 瞳

小学校六年生の時に社会の先生に借りた『学問のすすめ』の現代語訳版を読んだ。その中に「税金は気持よく払え」という文があった。国家に税金を払って自分の安全を保証してもらうことほど安い買い物はないという意味だ。『学問のすすめ』は約百五十年前に書かれたものだが、そんな昔にも「税金」のしくみがあったことに驚いたとともに、その「安い買い物」とはどういうことか知りたくなった。そこで、税金が何に使われているのか、改めて詳しく調べてみようと思った。

税金は、私たちの病気を治すときの治療費・医療費、お年寄りのための年金・介護サービスの一部に使われている。また、障害者や生活に困っている人を助けることにも使われる。そして、私たちがきれいな水を使うための上下水道と、通学・通勤するための道路、その他に公園や港、空港の整備や森林を守る活動にも使われている。最近では教科書が無償で使えるようになったが、その教科書や実験器具、体育用具など、教育にも税金が使われているのだ。さらに、宇宙開発や科学技術の研究にまで使われている。それから、救急活動や警察の犯罪の取り締まり、ごみの回収と処理など、私たちが当たり前だと思っていたことにも税金が使われている。そして私が初めて知ったのが、世界で困っている人たちが多くいる国にお金を貸したり、ダムや道路、病院をつくったり、病院で使う薬や注射器を送ることに税金が使われているということだ。日本の税金は日本だけで使われているものだと思っていた私は、日本の税金が世界の国々のために使われていることに驚いた。

これらのことから、税金は、私たちが安全で安心な生活をするためや、世界で困っている人を助けるために使われていることがわかる。今まで当たり前だと思っていたことに、国民が払った税金が使われていたのだ。しっかりと税金を払い、みんなの役に立つことに税金が使われる。このサイクルが、社会を成り立たせることのひとつになっているともいえるだろう。だから、絶対に税金は払わなければいけない。税金を払うことは国民の義務であり、国民のためにすることだ。私はまだ税金を払う年齢になっていないけれど、成人したら、しっかりと、正しく税金を払おうと思う。それが日本の誰かを救うことにもなるし、世界の誰かを救うことにもなるからだ。最初に書いた「安い買い物」の意味が、今はよりわかる。実際はすごくお金がかかることを、税金を払うだけでしてくれるのだから、「安い買い物」ということだ。

つまり、私が強く思うことは、税金をありがたく思い、しっかりと払わなければいけないということだ。税金を払うことは「損」になることではない。税金を払うことは、「得」を買うことなのである。

私はミャンマーと日本のハーフです。とはいっても生まれてから数回しかミャンマーに行ったことはありません。しかし、その数回の間だけでも確実に国の様子に変化しているのを感じました。例えば、ショッピングモールが新しくなったり、インフラが以前より整備され道が広くなったり、空港も初めに行った時より綺麗になっていたりしました。調べてみると、日本もミャンマーの発展に貢献していることが分かりました。

日本には政府開発援助、通称ODAという組織があります。ODAとは先進国が発展途上国の経済発展のために様々な形で支援するというものです。ODAのお金は税金や国債などから支払われています。つまり国民が払ったお金で発展途上国を支援しているのです。これだけ聞くと多額の債務を抱えている日本が、税金を使って他国を支援するなんておかしいのではないかと思いますよね。しかし、調べてみるとODAによって日本にもメリットがあるということが分かりました。まず、資金援助や技術協力をする事で両国間の関係が良くなります。そうすると外交などをする上で日本の味方についてくれたり、スムーズに話が進んでいったりします。また日本企業の海外進出がしやすくなります。日本企業が発展途上国の雇用を生み出すことで相互協力することが出来ます。ただ、その一方でデメリットがないとは言えません。例えば、ODAの活動によってたくさんの建物やインフラの整備が進められていますが、それを享受している当事国の国民はその事実を知らされていないことが多いのです。また不正流入や、政治家同士の賄賂などの問題はあります。そのような問題は無くしていくべきですが、私はODAは必要であると感じました。戦後、貧しかった日本は先進国からの援助により発展を遂げました。また、東日本大震災など災害がおきたとき、世界中から多大な援助を受けました。その中には決して自国にお金の余裕がない国々も含まれます。このような話を聞いて私は税金を無駄遣いするのはいけないけれど、国同士が協力することには使われる必要があると思いました。お金が無くても支援してくれた国があるということは、お金を持っている日本はさらに発展途上国を支援しなければいけないと思います。しかし、日本は年々積み重なる債務によって、以前より少ない額しか支援していません。そうするとやはり日本国内の経済状況を好転させていけないのだと思います。税金を納めないことには債務は減っていきません。国民がしっかりと税金を払えるような、無駄遣いをしない世の中になって欲しいと思います。増税反対の人が多いのは政府が正しい用途で税金を使っていないと考える人が相当数いるからだだと思います。

私は日本国内だけではなく世界中が協力するために税金が使われるといいと思います。

私の小学校の入学式は、体育館ではなく小さなホールで行われた。校舎の中にあるため体育館の四分の一ほどの広さしかなく、約一五〇人の新入生とその保護者を収容するには狭すぎるホールだった。ではなぜ体育館で行わないのか？理由は簡単だ。震災の影響で体育館の一部が壊れ、使うことができなかったからだ。当時住んでいた仙台市は震災の被害が大きく、今まで日常的に行っていたところもがれきの山と化し、幼いながらに恐怖を感じたことを覚えている。そんな仙台市に三年ぶりに行ったとき、私は思わず息をのんだ。今までがれきだらけで全く手つかずだった場所が、とても綺麗になっていたのである。車が通れるように道路脇によけてあっただけのがれきはほぼ処理され、新しい施設が建設されるようにまできていた。なぜそこまで復興を進めることができたのだろうと疑問に思い、母に尋ねてみると、

「それは復興特別所得税のおかげだね。」

と言い、棚からごそごそと確定申告の控えを出してきて私に見せてくれた。するとそこには「復興特別所得税」という項目があり、そんなものがあるのかと驚くとともに復興特別所得税に興味をもち、私は調べてみることにした。

復興特別所得税とは、被災地の復興のために必要な財源を確保するために二〇一三年から二〇三七年の間、課せられる税金のことで、個人で所得税を納める義務のあるすべての人が納めなければいけないそうだ。そこで私ははたと気づく。復興は、全国の顔も知らないたくさんの人たちが協力して作りあげる場所であるということ。友達の中には、家が流されて住む場所を失った人もいた。その人の助けとなったのは、他でもない「見知らぬ誰かが建ててくれた仮設住宅」だ。仮設住宅はその人にとってどれだけ心の支えになっただろう。税金は、見知らぬ誰かを笑顔にする力があると私は思う。私だって、家が流されたり家族を亡くしたりといった大きな被害はなかったもののたくさんの人の支援を受けて、前を向くことができた。また、震災だけでなく今の生活においてもそうだ。公立中学校の年間教育費は一人当たり約一〇二万円もかかるが、これらは全て国や都道府県、市町村が負担しているそうだ。このように、私たちの生活は税金の上で成り立っている。そのことに感謝して過ごしていきたいと強く感じた。

小さい頃、東日本大震災の復興に協力してくれたのは、前述したとおり「全国の見知らぬ誰か」だ。私はまだ納税者ではないが、あと何年かしたら納税者になる。今まではもらってきただけで何もできなかったけれど、今度は自分が「見知らぬ誰か」となって、困っている人の力になりたい。助けになりたい。恩を返す、というのが適切な表現かもしれない。そのためにはもっと税についての理解を深めなければ！私の中の何かがはじけた。

幸せを気づかせてくれた税

静岡大学教育学部附属島田中学校3年 田代 愛実

「今あなたは幸せですか。」と聞かれて、すぐに「はい、幸せです。」と答える日本人中学生が何人いるだろうか。

私の父は、私が幼い頃から海外へ行く事が多く離れて暮らしていたこともあった。

家族で父の赴任先に出掛けた時、父の仕事の関係者でアフガニスタンの方が話しかけてきた。そして、今まで何も気に留める事なく過ごしてきた事が、世界では普通でない事を知った。私が将来の夢の事を話し始めた途端に「日本はなんて素晴らしい国なんだろうね。女の子がこんなに生き生きと夢を語れる。それは私の祖国では有り得ない事なんだよ。」

その言葉の意味が私には理解できず、不思議そうな顔をしていると、彼は私に説明してくれた。アフガニスタンでは、継続する紛争と治安の悪化、貧困により学校に通えない子供がたくさんいる。その六十%が差別により女の子だと言う。民間人が攻撃されて、たくさんの死傷者が出て安心なんて言葉はどこにもない。この状況で未来が語れる訳がない。平和慣れしている自分に気づき、後ろめたい思いが込み上げてきた。日本に戻り、アフガニスタンの子供達に私達が出来た事はないかと調べると、日本には政府開発援助というものがあり国際社会の平和を願い、世界の人々の為に支援として税金が使われている事を知った。今まで遠い存在だった税金が急に近く感じた。

税金歳入額全体の〇. 五%である五〇二一億円というお金が開発途上国へと支援されている。アフガニスタンには、二〇〇一年以降総額約四九一二億円の支援を実施しており、二〇一二年七月には概ね五年間で開発分野及び治安維持能力向上に対し、最大約三十億ドル規模の支援を行うことを表明している。税金は、自国の為だけに使われると、思っていた私は驚く事ばかりだ。日本にいると見えない世界の教育の現状を知り、私は税のおかげで成り立っている義務教育制度の有り難さを改めて感じた。

読み書き出来る事は当たり前で、その事に対して疑問すら持つ事はなかった。しかしこの当たり前だと思っていた事は、世界的に見ればとても贅沢で幸せな事であると認識せざるを得ない。私は、これまで大人の方々が働いて納めてくれた税金のおかげで不自由なく勉強することができた。明日が見えない、語れない、その日生きるだけで精一杯そんな現実から世界中の子供達が、誰しも夢を語れる社会に。そして日本を含め世界中の子供達が幸せになる為に納税の大切さを心に刻み生きていきたい。

何気なく生きていると見えないことも多いが、日本には素晴らしい納税制度がありその税というみんなの優しさに支えられて、自分の夢を語れる。

私は胸を張って「今、幸せです。」と言える。

税の使い道

滋賀大学教育学部附属中学校3年 牧野 綾音

八月半ば、夏季連休に入った会社員の父がいつもより遅い時間に朝食をとっている。受験生の私が、塾へ行く準備をしている時、ボソッと呟いた。

「最近、肩が痛いわ。」

「どうしたん。」

父が尋ねてきた。

「教科書が多くて、鞆が重すぎるねん。」

「そうか。最近、企業では電子化が進んだけど、学校や塾は電子化されへんのかな。」

「そやろ。学校の教科書も重すぎるねん。教科書も問題集も電子化して、タブレットを持っていけば良いようにして欲しいわ。ノートだけでいいはずや。」
ちょっと疲れている私が愚痴っぽく話すと、父がニヤリと笑う。しまった、こういう顔をする時の父は面倒な話をすることが多いのだ。案の定、父が続ける。

「そら、ええ案や。ほな、日本の小中学生全員にタブレットを配布するなら、いくら必要になるか調べてみ。併せて、その税収を消費税で実現するなら、何パーセントアップすることになるかも調べてみ。」

塾から帰宅してみると、机の上にタブレットが置かれている。父の仕業だ。仕方なく、検索してみる。

日本の小学生は約六百四十三万人、中学生は約三百二十五万人、合計約九百六十八万人。タブレット一台が十万円とすると、配布に必要な費用は、おおよそ一兆円。消費税は、八パーセントから十パーセントになると、約四・五兆円増加するらしい。そうすると、小中学生全員へのタブレット配布には、消費税を約〇・四五パーセント引き上げる必要がある。これを父に説明すると、隣で聞いていた母が口を挟んでくる。

「消費税がこれ以上増えるのは許せないわ。鞆が重いぐらい我慢しとき。」
隣で大笑いしている父が言う。

「税源はいろいろあるけど、消費税増は主婦には大問題らしいね。お父さんは、所得税が気になるけどね。」

私の何気ない一言から始まった我が家の中での小さな調査で、一つの施策を実行するためであっても多くの税金が必要となることが実感できた。だからこそ、税金をどう使うか、何を優先するか、どう選択するかは難しく、大切なことだと知ることができた。

中学生の私は、税金を払うことはほとんどなく、学校等、税金を使う立場にある。改めて、私たちのために用意された、ひとつの授業、ひとつの教材に感謝し、頑張って勉強しようと思った。

僕を救ってくれた「税金」

与謝野町立加悦中学校3年 安田 康太郎

「税金は大切」、「税金はなくてはならないもの。」僕がそう思ったのは、つい最近のことだ。なぜそう思ったかという、税金がなければ、僕はこの世にいなかった可能性があったからだ。

二〇〇五年二月二十三日、僕は与謝の海病院で生まれた。僕は長男で父も母も初めての出産で大変だっただろう。そしてなにより、生まれた赤ちゃんを抱きたかっただろう。しかし僕は、親に抱かれることもなく、病院のベッドに運ばれた。先生は、僕の体に異常があると言った。僕は、京都の大学病院に、ドクターヘリで運ばれた。その病院で検査を受けた。親が医師に話をうかがうと、医師は、心臓疾患、大血管転位症である事を告げた。僕は、すぐに手術を受けた。手術は成功した。手術時間は十時間にのぼった。手術終了後、病院で検査を受けて、五月ごろに退院した。手術料金はおよそ二千万円だった。しかし、親は二百円しか払わなかった。なぜ親は、二百円しか払わなくてよかったのだろうか。

それは、日本には税金というものがあるからだ。税金とは、大きく言えば日本社会全体を支えるお金のことであり、日本に住んでいることに支払う、「会費」のようなものだ。僕の手術代は、この税金で賄われている。最初にも言った、「税金がなければ、僕はこの世にいない」とはこういうことだ。二千万円なんて、結婚したばかりの親が払えるはずがない。しかし、税金があったため、そこから二千万円を払ってもらえた。税金がなければ僕は手術を受けるお金がなく、手術を受けることすらできなかったかもしれない。僕を救ってくれた税金に感謝している。

さて、今年から消費税が十パーセントになる予定だ。日本国民はこれに賛成するのだろうか。それとも反対するのだろうか。ちなみに、僕は賛成だ。理由は、消費税が上がっても、僕達に何のデメリットもないからだ。確かに、二パーセント上がるだけでも払う金額は上がる。しかし、その税金でだれかが幸せになっているかもしれない。もしかすると、気づいていないだけで、自分も幸せになっているかもしれない。税金が上がることで、この日本がもっと良くなるかもしれない。税金を払っている日本国民全員が、日本を良くするヒーローだ。こう考えると、悪いことは一つもないはずだ。

僕はこれから、税金への感謝を忘れずに生きていきたい。そしてあのとき、僕を救ってくれた二千万円分の税金を、生きているうちに返したい。そう強く思っている。

思いやりの輪

大阪教育大学附属天王寺中学校 3年 中島 里菜

二〇一八年六月十八日、大阪北部地震発生。残念なことに六つの尊い命が失われ、多くの建物が損壊した。

私は大阪府茨木市に住んでいる。震源地に近く、震度は北部地震最大の六弱が観測された。発生当時家にいた家族によるとドーンという大きな音とともにマンションが下から強く突き上げられ、身の危険を感じたらしい。私は通学中で電車の中にいた。鳴り響く緊急地震速報の音と揺れ動く窓の外の景色は今も忘れられない。

毎日通う駅までの道では建物が倒壊し、近隣の家の屋根瓦は落下していた。近くの小学校では女の子が倒れてきたプールの塀の下敷きになって亡くなられた。地震が平和なまちの日常を壊してしまっていた。

そんな中、まちの復旧のために市役所の人が壊れた屋根を覆うためのブルーシートを配布し、自衛隊の人が被災者用のお風呂を用意し、ボランティアの人がお年寄りの家の片付けをしてくれていた。私はその姿に心から感謝した。見も知らぬ人のために惜しみなく働いてくれる人は輝いて見えた。

現場で動いてくれる人は本当にありがたいが、災害の復興には国民が納めた税金が充てられていると父から聞いた。だから、税金を支払った国民全員に感謝しなければならないとのことだった。災害と税金の関係なんて考えてみたこともなかったけど、屋根のブルーシートにも、自衛隊のお風呂にも、塀の建て直しにも、多くの部分で税金が使われているに違いない。あの当時は音を聞くだけで地震の恐怖が蘇ってきた緊急地震速報も税金で成り立っている。緊急地震速報は、地震の際に気象庁が最初に発表する情報で、強い揺れが届く前に可能な限り素早く地震の様子を知らせてくれる。平成二十年に一般提供が開始されてから今に至るまで、東日本大震災や熊本地震などいくつもの地震に際して発され、多くの人役に立ってきた。

また、大阪北部地震では茨木市を始め、大阪府の十二市一町に災害救助法が適用された。これは災害時に行われた救助に要した費用のうち五割以上を国庫が負担する仕組みだ。普通の生活に戻ることができて、ほっとするとともに、税金のありがたみを痛感した。

社会保障や図書館、道路等の公共施設の整備、小中学生の教科書のみならず、税金が災害時にも私たちを支えてくれていることは自分が被災して初めて実感できることであった。

税金は必要とされるすべてのところに納税者の思いやりとして届けられていた。みんなの税金が寄り集まって、大きな思いやりの輪になっていく。私も昨年の地震でその輪を受け取った。次は私の番だ。あと十年もしたら私も、多くの税金と関わるようになる。その時には必要とする人へ思いやりの輪を届けられるように、昨年の感謝の気持ちを込めて納税の義務をしっかりと果たしていきたい。

税への感謝

枚方市立楠葉中学校 3年 高田 悠名

「高校の為に節約やね。」

高校受験を半年後に控えた私に、最近母がよく言う言葉です。その言葉で、私は以前語学留学に行ったフィリピンでの出来事を思い出しました。それは、私が外出に利用した自転車タクシーの運転手が当時の私と同じ年齢の子供だった事です。

私は同い年の子供が学校に行かず働いている事にとっても驚き、帰国してからフィリピンの教育制度について調べてみました。フィリピンには日本と同じ義務教育制度があり授業料は無料なものの、教科書や学校の設備費用、特別授業料などは自己負担の為、裕福でない家に生まれた子供はその負担により学校に行き教育を受ける事が出来ず、安定した十分な収入を得る職に就く事が出来ないの税金が納められません。そしてその子供も…そのまた孫も…と悪循環が続き、学校に行く事が出来ない子供が多くいる事が分かりました。

学ぶ事は新しい力を身に付け、その力を使って新しい世界を広げる事に繋がります。教育を受ける事の出来ない彼らは未来への可能性を奪われてしまっているのです。

それに比べて日本はどうでしょう。授業料、教科書、机、椅子…全て税金で賄われています。六歳になれば小学校に、十三歳になれば中学校に、当たり前のように入学できます。つまり、私たちの未来への可能性は保証されているのです。それなのに最近、学校に行く事、教育を受ける事を嫌がる人が大勢います。「勉強なんて面倒くさい。」「なぜ学校に行くのかが分からない。」そう言える事自体が贅沢だという事に気づいていません。

今、私は何不自由なく毎日学校に行き、授業を受けています。しかし、これは当たり前の事ではないのだと改めて実感しました。様々な人が納めてくれている税金での支えがあるからこそ、恵まれた環境があるのです。

これだけの環境を与えられてきた私に出来る事。当然収入もない今の私が納税しているのは消費税しかありません。でも、こうして税について深く考えるきっかけを得た事は、私にとって大きな出来事となりました。今まで私には面倒なものでしかなかった「税」は人と人との支えあい、繋がりがあいただのです。税金を払う事はすなわち、誰かの為に役に立てた証拠でもあります。その事をもっと多くの人理解し、全員が納得して税を納めるようになればきっと社会は今よりも素晴らしいものになると思います。そんな日が来る事を願います。この作文も、誰かが考えを改めるきっかけになればいいなと思います。

私は春から高校生になり、義務教育制度は終わります。「税」があったからこそ得られた数えきれないほどの知識や発見を無駄にしないよう、また、日本の未来を担っていけるような大人になれるよう、日々勉強に励もうと思います。そして、税の大切さをきちんと理解し、しっかりと税金を納めます。

私の夢は、公務員。私の父も公務員だ。

天災など私が不安な気持ちで側にいてほしいと思う時は、父はほとんど仕事で家にいない。幼少期の頃から「父は家族より仕事の方が大事なのだ。」安易にすぐそう感じていた。

最近、学校で将来の夢を考える機会が増え、税についての勉強もした。それでもまだ、家族に謝って、急な仕事に出かけて行く父の気持ちに寄り添うことはできなかった。その後はきまって母に諭されていた。「お父さんはね、公務員だから市民を守る使命感が強い。市民を守ることは、あなたたちを守っていることにつながっているんだから。」

父は公務員として、医療や水道の施設管理、住まい・まちづくりなど、市税を介して、市民のよりよい生活を守る立場で働いている。

この夏、父の職場見学会のイベントがあり、母に弟と参加してみないかと誘われた。漠然とした勝手な職場のイメージしかもっていなかった私は、そこで自身の稚拙な考えに恥ずかしくなったのだ。市会議事堂や消防管制室など、税金で建てられた建物、税金で運営されている設備など、そこには税なくしては存在できないものばかりを目の当たりにした。

そして、父からある一枚のDVDを見せてもらった。それは、東日本大震災の時に、神戸市職員がすぐに派遣され、現地での仕事ぶりをテレビのドキュメンタリーで放映されたものだった。阪神淡路大震災を経験し、復興を遂げたノウハウでもって支援している、必死の活動ぶりだった。それは、昼夜寝食を惜しんでの活動であり、寝泊まりする部屋にはカップラーメンの空容器の山だった。長時間に及ぶ重労働を支える食事ではない。

その部屋の様子を現地の方が見て、「こんな食事では倒れてしまう。支援に来てもらっている私たちが、ただ見て待つだけでは申し訳ない。」と、温かい炊き出しやおにぎりをその部屋で作ってくれている姿があった。職員が夜中遅くに帰ると、温かい食事と一枚のメモでお手紙が添えられているのを見つけた。それから毎日食事を作ってくれている方々とは会えないまま、その職員たちはお手紙のやりとりを繰り返しながら、あたたかい心あふれる食事とお手紙の活力をもらい、支援の日々を続ける映像だった。

公務、それはまったくの社会福祉のみを追求する仕事。提供される側は、自ら支払った税金が、当然のごとく、自分自身に何らかのかたちで返ってくることを考えがちな。

だが税金とは、見知らぬ人との心のつながりをもたらすあたたかいもの。私が払っている消費税も誰かの福祉につながる。誰かが払ってくれた税で私の、家族の幸せにつながる。そのつながりの大切な担い手として公務がある。税を知ること、より一層、私の公務への夢に対する意義を見出せた。私もいつか、あたたかい税を自身の心のぬくもりも重ねて、大切に届けられる大人になりたい。

私は、今年、消費税が増税されるに当たって世界の税が高い国を調べてみることにしました。すると、税が高い国は北欧に集中していることがわかりました。北欧の国々の消費税は二十パーセントを超えていて、住民税も日本の二倍もありました。私が驚いたのは、車を買ったときにかかる税が百パーセントだということです。高い買い物をするときは大変だと思いました。私達は、八パーセントでも消費税に不満を持ちます。だから、北欧の人たちも不満があるのではないかと思いましたが、驚いたことにみんな不満がなく、これらの税金が高い国は、世界幸福度ランキングの順位が上位にありました。

北欧の国が幸福度が高いのは、税が高いことと関係がありました。なぜお金を多く取られるのに幸せなのかというと、税があることによって充実した生活が送れるからだそうです。

北欧は社会保障が充実しているそうです。例えば、ベビーカーを利用している母親はバス代が無料であったり、小学校から大学院まで学費が無料です。また、病院で高度治療を受けても、子供を産んでも料金がかかりません。育児保障、失業保障、様々な制度に人生が手厚く守られており、ホームレスも全くないそうです。元気な高齢者は現役として働け、地域社会で活躍できるように国が支援をしています。このように多額の税金が人々の暮らしのために使われているので、北欧の人は税金に不満がなく、老後の不安も全くありません。だから、世界幸福度ランキング上位に輝くのだと思われれます。税金は人々の幸せと密着に関わり合っていました。

この夏休みに多くの議員候補者が選挙活動をしていましたが、テレビを見てみると消費税をなくすと言っている候補者もいました。そう言うからには何らかの策はあるのだろうけれど、私は中学一年生のときに税がなかったらどのような暮らしになるかを調べ、税があるから私達は安全に暮らすことが出来るのだということを知ったので、それで本当によいのかと思ったし、それでは幸福な国から遠ざかっていくのではないかと、北欧の国のことを知って思いました。

また、現在日本では老後のことが心配されています。北欧とは違い、税が少ないので、十分な保障ができないからだと思います。そのことを考えると、私は、減税ではなく増税が正しいのではないかと思いました。今回の増税は社会保障財源のためと聞いたので、少し北欧に近づけるのではないかと思います。

消費税は特定の者にばかり負担がかかるのではなく、高齢者も含めた国民全体で広く負担することが出来ます。自分達の暮らしのためなのだから、自分達が税を少しずつ払って豊かな国を作るべきだと思うので、これからも税をちゃんと払っていかうと思いました。

税の力で交通事故削減を実現させたい

和歌山県立向陽中学校3年 小谷 高司

税が、誰のために、何のために使われているか、今まで考えたことがなかった。しかし最近、同じようなニュースを度々耳にしたことで、税制度の必要性を初めて認識することになった。それは、高齢ドライバーによる死亡事故のニュースだ。警察庁が発表した年齢別死亡事故件数によると、運転者の年齢が高齢になるにつれて、事故件数が増加する傾向にあると分かった。その理由として、加齢による身体機能や認知機能、判断の速さの衰えが事故の発生につながっている、と考えられている。そこで現在、国や地方自治体で、運転免許の自主返納を促している、ということも耳にした私は、大伯父から聞いたある話を思い出した。

大伯父は現在八十代で、京都府に住んでいるのだが、お盆やお正月になると、和歌山県の私の祖母の家に来て、一緒にご飯を食べたり、様々な話を聞かせてくれたりする。そしてこの前、大伯父から運転免許は七十代で自主返納した、という話を聞いた。大伯父は、「早いうちに免許を返納することで、誰かに迷惑をかける心配が無くなる。」

と言っていた。その時、私は大伯父の考え方とそれを実行に移す行動力に驚いたと同時に、返納後の交通手段はどうしているのか、気になった。そこで、大伯父に京都から和歌山までどうやって来ているのか尋ねると、以前までは車を運転して来ていたのが、最近では電車に乗って来ているとのことで、その電車の運賃は大伯父の自費であると分かった。

このことを聞いた私は、実際に自治体等が、免許返納後の生活をどのように支援しているかを調べることにした。すると、現在ほとんどの自治体で、公共交通機関の運賃割引が受けられる施策を設けており、その他にも車を使わなくても快適に過ごせるよう、様々なサービスを提供して支援している自治体もあると分かった。しかし、地方部ではまだ十分な支援が受けられておらず、車なしの生活に不安が残る人が多くいることも事実である。

そこで私は、全ての人が免許返納後も安心して生活できるようにするために、国全体で税金を使い、支援していく必要があると考える。税は、国民全員が平等に、安心して暮らせるためにあると、私は思う。だから、私たち一人一人が税金を納めることへの理解を深め、税金を納めることの重要性を認識することが大切であり、私たちの思いをくみ取ってくれる国でいてほしいと、私は強く思う。税の力で交通事故を減らせる社会が、近い将来日本で実現されることを、私は信じている。

本当の公平

島根大学教育学部附属義務教育学校 9年 高瀬 萌永

今年の七月に参議院議員選挙が行われた。私には、選挙権がないが、選挙について興味があった。そこで、新聞を読んでみると、各政党や候補者の掲げる政策を知ることができた。その中で多かった話題は、税金の使い道についてだ。それらの意見に目を通していくうちに、私はこのような疑問を抱いた。

「税金は、本当に公平なものなのか。」

それぞれが掲げている政策には、対象になる人と対象にならない人がいる。それは、年齢、職業、住んでいる場所などで決まる。もし、国会である政策が可決されて実現したら、対象となる人々は、より良い暮らしを送れるようになるだろう。一方で暮らしが何一つ変わらない人々も多くいる。納める税金の金額も人それぞれ異なり、一人あたりに使われる税金の金額も人それぞれ異なる。私は、税金は不公平なものだと感じるようになった。

ある日、学校である一枚のお便りが配られた。そのお便りは、文部科学省からの税金を用いた奨学金についての文章だった。私は、驚いたと同時に嬉しい気持ちになった。この取り組みによって、経済的な理由により高校への進学を諦めたり、行きたい高校に行けなかったりする人が少なくなるだろう。

「学びたいから手を貸してください。」

そう思っている人は、国内にいる人々だけではない。世界中にいる学校に行けない六才から十四才までの子供達は、約一億二千四百万人。税金は、発展途上国の人々のためにも使われている。私は、これらのことを知って心があたたかくなった。学びたいと思っている私達と同じような年齢の子供達の弾けるような笑顔が浮かんできた。困っている人を一人では助けることができなくても、みんなで力を合わせれば助けることができる。そして、みんな喜びを分かち合える。税金もそれと同じだ。

私にとって「学ぶ」ということは、当たり前のことだったが、それは税金に支えられていることに気がついた。外に出てみれば、道路整備や防災対策など多くのことに税金が使われている。

税金には、大きく二つの役割があると思う。一つ目は、全ての人々の日常生活をより良いものにすること。二つ目は、本当に助けを必要としている人々のサポートをすることだ。

多くのことを学んでいくうちに、初めに考えていた公平と税金における本当の公平は、異なることに気がついた。本当の公平は、税金の金額とは関係なく「全ての人々が一人残らず幸せに暮らせること」だと思う。そして、それは国会や行政機関などで議論・検討されることで実現されていく。選挙期間中に見た政策も助けを必要としている人々のためのものであった。今の私なら、

「税金は、公平なもので、助け合いが詰まっています。」

と、胸を張って言えるだろう。

私の予算案

広島大学附属東雲中学校1年 小寺 葵生依

私は小学生の頃、法人会の方から税金のお話を聞きました。わかりやすく言うと、みんなで払う社会の会費のようなもの、と教わりましたが、少ししくみが難しく、私にはあまり縁がない世界だと感じていました。ところが、改めてふり返ってみると、私の身の回りにはたくさんの税金に関わることがあったのです。

例えば、コンビニでお茶を買えば消費税を払うし、学校の運営や警察、消防など、社会は税金で成り立っていると言っても過言ではないと思いました。また、私の父も公務員なので、税金で給料が払われています。よって、私がこうして生活ができるのも税金のおかげだな、と改めて感謝しました。

仮に税金がなければ、警察がなくなり治安が悪化するし、火事の時も消防車が来ないし、事故の時も救急車が来ません。それから、最近とても多くなった災害が発生した場合、復旧したり、人々を守ったりできません。つまり、安全で安心な生活ができなくなるのです。

このように、国民生活に欠かせない税金ですが、脱税などの悪いニュースもテレビなどでたまに耳にします。そういう時私は、国民の義務である税金を払わないなんて、物を盗むのと同じ犯罪だ、と思います。また、税務署の方が、税金を払わない人に督促をしたり、苦勞して払ってもらっている姿も、同様にテレビで目にします。そんな時、そういう役割の人がいることを改めて知るとともに、税金で成立している日本の社会を支えてもらっていることに、感謝の気持ちで一杯になります。

さて、このように私たちの暮らしに必要な不可欠な税金ですが、この税金が国の予算の財源になっていると父から聞きました。

毎年、予算案が閣議決定され、国会の議決を経て成立することで、再び税金が社会に還元されているのですね。そこで、このたび私なりの予算案を考えてみました。

次の三つの予算案です。

まずは、災害時の専用の避難施設を地域ごとに作ることです。一般的な避難所は避難者のプライベートな空間が不十分で、ストレスの原因になっているとニュースで聞いたことがあります。そこで、具体的には、防災機能を備えたユニバーサルデザインの専用施設を作りたいです。

次に、学校にテレビ会議システムを取り入れて、校舎以外の場所でも授業が受けられるようにすることです。目的は、やむを得ず登校できない生徒の教育を受ける権利を守るためです。

最後は、少し夢のある案を考えました。

みんなが平等に楽しめるように、全国各地に低料金の遊園地を建設することです。また、料金収入を園の管理のために使うことで、予算の良い循環にもなると思います。

こうして色々考えていたら、将来税金や予算に関わる仕事をしてみたいくなりました。

税金に感謝して

美馬市立脇町中学校 1年 脇川 千里

新しい時代、令和がスタートした。私達の暮らしも新しく変わる事がいくつかある。お札が新しくなったり、消費税が八パーセントから十パーセントに増税されるのだ。小売業をしている私の家にとって一番の問題は消費税らしい。レジやパソコンのデータを新しく十パーセントに変えなくてはいけない。でも一番の問題はお客さんに理解し、納得して消費税を支払ってもらうことだと両親や祖父母は言う。私は不思議に思い「みんな払うだろう？何かあるん？」とたずねた。すると祖母が今から三十年前、消費税が三パーセントで始まったころの話をしてくれた。「当時はな、お客さんも消費税について知らん人が多かった。一番困ったのはな、消費税で商売人がもうけを増やしとると誤解し、支払いの時に文句を言うたり、まけてと言う人も多かったんよ。」その度に、祖父母は「商売人のもうけが増えて得しとるわけでない。私ら商売人も、お客さんから預かった消費税を国にきちんと納めてます。どうぞご理解ください。」と何度も頭を下げるらしい。理解して払ってくれる人もいたが、中には「もうこんな店では買い物せん。消費税のいらん店で買うわ。」と怒る人もいたそうだ。「あそこの店は消費税を取らんええ店じゃ。」と小売店の中には消費税をサービスしてお客さんをよびこもうとする店もあった。

時が過ぎ、消費税も私達の暮らしにとけこんできた。でも、やはり支払うお金が高くなるのは嫌だとおこづかい制の私も思う。「あああつ消費税とられんかったら、もう一つ買えるのに。」と母と買い物に行き私が言った。すると、母が「消費税を払うのはもったいないと思うかもしれんな。でも、あんたもお母さんもみんなが消費税や他の税金でずい分助けてもろうとんよ。」と言った。私は別にお世話になってないと心の中でつぶやいた。でも私が小三の時に耳の手術で入院した時の話を聞き、今までと考えが変わった。「あの手術で入院した時も、個室の差額代と食事代だけの負担ですんだんよ。そうでなかったら、何十万もあの時払わないかんかったんよ。みんなが払った税金であんたも助けてもろうたんよ。」と言われた。毎日当たり前に楽しく学校に通えること、学年が変わると新しい教科書を当たり前に無料でもらえることなどずい分私も税金にお世話になっていたことに気づいた。

この作文を書くことで、あらためて税金のありがたさや大切さを考えることができ、前よりも税金を身近に感じるようになった。税金はとられているのではなく、税金を納めることでみんなで支え合い、平和な暮らしが保たれているのだ。これからも税金に感謝することを忘れず、きちんと税金を納める大人になりたい。そして、私の納めた税金も社会を支える力のひとつになれば良いと思う。

子供たちの未来を支えるぜい（税）

香川大学教育学部附属坂出中学校3年 濱田 陽向

今年の十月、消費税が増税される予定となっている。私にとって一番身近な税金と言えば消費税なのでとても関心がある。「増税」と聞くとマイナスのイメージがあるが、増税の意味を考えると、私たちの生活をより良くするためということに他ならない。

私は二歳の頃に小児喘息と診断された。現在、症状はほとんどないが、今でも万一に備えて必要な吸入薬は自宅に常備しており、旅行の時にも欠かさず持って行っている。病院の先生からは、「今は落ち着いていても、何かの拍子で喘息の症状が出るかもしれない。」と言われているからだ。だから、吸入薬は私にとってお守り替わりなのだ。

私は当時他県に住んでいたが、当時の「乳幼児医療費助成制度」のおかげで通院一回につき二百円の負担で診ていただくことができた。その後香川県へ引っ越したのだが、香川県の同制度では負担額無料で診察を受けることができた。現在は「こども医療費助成制度」と名前を変え、満十五歳に達する日以後の最初の三月三十一日まで負担額無料で診察を受けることが可能になっている。少額もしくは無料で受診できることに、母はとてもありがたく思っていたようだ。また、引っ越しても同じような制度があることに、とても心強かったとも言っていた。

都道府県によって多少の違いはあるが、低負担で病院にかかることができるのは、乳幼児がいる家庭にとってとても助かることだ。乳幼児は大人と比べて病気にかかりやすく、病院へ行くことが多いからだ。一般的に健康保険診療にかかる自己負担は三割だ。もし、乳幼児も同じ三割負担であれば、大人と比べて通院回数が多いので、医療費が家計を逼迫することは想像にたやすすくない。このことを考えても、安心して病院へ行くことができるのは、税金の礎があるからこそなのだ。

私は中学校生活最初の夏、「中学生姉妹都市親善使節団」に応募した。姉妹都市の一般家庭でホームステイをしながら、現地の人々と異文化交流できるというものだ。実はこの旅費の一部が、市の税金から負担されていることを知った。つまり、税金が私たち若者の未来を応援する活動に使われている。世界へ羽ばたくきっかけを後押ししてくれているのだ。

私は姉妹都市交流に参加し、異文化を自分の五感で感じた。世界には自分の知らないことが多くある。自分と他者、自国と世界の違いを認識し、世界で生きる国際人になりたい。私にそう考えるきっかけを与えてくれた。私たちの未来を応援するために税金を充ててくれていることに感謝している。

税金があるからこそ、私たちは安心して生活できているのだ。税金の使い道を考え、税金への関心を高めるために、私たちは今まで以上に自分の身の回りのことに目を向けなければいけないと思った。

税たくな病気

福岡市立原中学校3年 古賀 乙羽

「なんで税金って払わないといけないの。もったいないよね。」

物を買うときや外食するときなど、お金を払うときに必ずついてくる税金を私は必要のないものとしか見ていませんでした。しかし、そのことを家族に話すともいかなかった言葉が返ってきました。

「税金は乙羽にとって命そのものだよ」と。

私は産まれてすぐに心室中隔欠損症と肺動脈閉鎖症という重い心臓の病気わかり、子ども病院のNICUに長期間入院し、二度の大手術を受けました。どちらにも、驚くほどたくさんのお金が必要になるはずですが、退院するときに支払ったお金は数千円だったそうです。なぜなら、主治医の先生の勧めで、小児慢性特定疾病医療給付制度の申請手続きをしていたからです。その申請書に添えられた手術の見積りは数百万円、二回の手術以外にも高額なカテーテル検査を何度も受けさせて頂きました。もし、この制度がなかったらどうなっていたでしょうか。医療費を全て私の家族で払うことができず、最善の治療を受けられなかったかもしれません。また、受けていたとしてもたくさんのお金を借金をして治療を受けたことで、今のような幸せな生活を送れていなかったかもしれません。そう考えるととても怖くなりました。私は、今でも一年に数回、定期検査のために通院しています。その検査の費用も、数年後に予定されている人工血管の交換をするための三度目の手術費用にも、小児慢性特定疾病医療給付制度を使わせて頂きます。私は今まで、このようなことに税金が使われていることを全く知らなかった自分を恥ずかしく思いました。また、自分の命がたくさんの人の支えによって生かされていることを改めて知り、感謝の気持ちで一杯になりました。

税金は昨年度、約五十九兆円納められています。私も大人になって仕事をしてお給料をもらったら、その中からきちんと税金を納めて少しでも恩返しができるようにしたいです。私たち一人一人がしっかりと税金を払うことで私のように救われる命もあり、高額な治療費のために借金をせず普通の生活ができる人もいます。

私は、この病気で生まれたことで胸に大きな傷があったり運動制限が厳しく、みんなと同じことができなくて辛いときもあるけれど、贅沢な、いや『税たくな病気』だと心から強く思いました。これからも、この税たくな病気と一生向き合いながら、自分の命を大切にし一人でも多くの人に税の大切さを伝えていきたいと思います。

思いやりをつなぐ税金

新宮町立新宮中学校3年 水本 結奈

日本はとても住みよい国だと思う。当たり前のように教育が受けられ、ごみの処理や私たちの生活を守る警察、消防など公共サービスも充実している。普段通っている学校。生徒一人一人に配布される教科書。日常生活に欠かせない道路や交通機関。無償で本を借りることのできる図書館。普段何気なく利用している身近なものは、国民全員に税金を納める義務があるからこそ成り立っているのだろう。

しかし、世界には私たちにとって当たり前の生活が実現されていない国もある。お金がないために教育を受けられない子供たち。十分な医療施設や環境が整っていないために救えない命。そんな貧困や飢餓など深刻な問題を抱えている国や地域がある。そこで暮らしている人への資金援助も日本の税金が使われる要素のうちの一つだ。私はこのことを知った時、「他国の援助をするお金を自国の発展のために使えば良いのに」「その分国民の納税額を引き下げれば良いのに」と思うところがあった。

しかし、税金は自国のためだけにという考え方は間違っていると気づいた。日本は世界の中でも震災が多い国である。度重なる地震に見舞われ、そのたびに再生してきた。その陰には、周りの国々から送られてきた数多くの資金や物資があった。外国の方々が復興のためにボランティアに参加しているところもニュースで目にしたことがある。そのような国の中にセルビアがある。セルビアは長く戦争の渦中にあった。現在は、様々な紛争が解決し、比較的平穏で復興が進んでいるとは言っても、経済状態は貧しく国民の平均収入は約四万円と言われている。そんな中で、日本が東日本大震災に遭った時、セルビアは二億円もの寄付を集めてくれた。なぜと疑問に思う人もいるだろう。それはセルビアで紛争があった時、日本が医療、教育、交通整備の面で大きな支援を行ったからである。セルビア人は毎日目の前を走り、自分が使っているバスや学校、地区の病院が日本の支援で供与されたり、修復再建されたりしたことを知っていた。それが人口七百万人から二億円という寄付を集める結果に結びついたので。

このように私たちの税金は自国の発展や住みよい町づくりに使われるだけでなく、世界の困っている人々の支えになっているのだ。でも日本が支援しているばかりではなく、日本が困っているときは「今度は私たちが助けよう」と手を差しのべてくれる多くの国々がある。そんなお互いに支えあえるあたたかな国と国の関係を築いていける税金の使い道は素晴らしいと思う。私が大人になり、自分で稼いだお金から税金を払うようになったらほんの少しかもしれないけれども自分の税金が日本だけではなく、世界をもより良いものにできるという誇りをもって社会に貢献していきたい。

税金の大切さ

学校法人東明館学園東明館中学校3年 伊藤 りんか

「うわ、救急車だ。事故かな？救急かな？」こんな会話を救急車のサイレンを耳にするたびにしています。一分一秒を争う命の現場で救急車は必要不可欠なものです。

私は0歳のとき、頭にガラスの電球が落ちてきて意識を失いました。すぐに父が消防に電話し救急車を呼んだそうです。その日はちょうど花火大会と重なり大渋滞だったそうですが、救急車が道路の真ん中を進んでいったと聞きました。もし税金が無かったら、つまり救急車がなかったら私はどうなっていたのかと考えるととても怖いのです。私の命は治療して下さった医者や看護師だけでなく、税金を納めているみなさんによっても助けていただいたと思うと感謝の気持ちでいっぱいです。私も国や地域に貢献できるように、そして一人の人間として社会を支えられるようにしっかりと税金を納めなければならないのだと今は感じています。平成二十九年度の救急車の出動件数は約六百三十四万件と五秒間に一回のペースで出動し、搬送人員は約五百七十三万人と国民の二十二人に一人が搬送されたこととなります。そのうち約九十七パーセントの方々の命を救うことができます。年齢別にみると、搬送人員の約五十九パーセントが満六十五歳以上の高齢者であり、少子高齢化が進む日本は年々搬送が増加すると考えられます。それと同時に医療、年金、介護、福祉などの社会保障にかかる費用は増える一方、その費用を負担する働き手が減っていくなど問題があります。誰もが安心して生活するためには私達納税者が税金を正しく理解する必要があります。

そして令和元年十月一日から軽減税率の対象外の商品は消費税が十パーセントに引き上げられます。引き上げによる増税分は社会保障の財源とされ、社会保障制度を安定、充実させるために使用するそうです。消費税が上がると納税者に負担がかかり、生活が苦しくなったり、経済が活性化しなくなるという反対意見もあるようですが、今よりも社会保障制度が充実、人の助けになれば、実施するべきだと思います。

今の私があるのは税金のおかげです。小さい頃に命を救ってくれたこと、今までの医療費の保障、義務教育の費用など、生まれてから現在まで税金に支えられて生活してきました。社会は一人で維持するのは不可能であり、一人の力で生きていくことも不可能です。社会の一員として暮らしていくために税金を正しく理解し、誰もが「健康で文化的な生活」を送ることができるようにしていかなくてははいけません。これからは私達が社会に出て、たくさんの税に接し、重要な納税者になります。私は税金の大切さ、重要さをしっかり理解し、感謝しながら明るい未来へと一歩ずつ歩み出していきたいです。

日本国民であるということ

学校法人大隈記念早稲田佐賀学園早稲田大学系属
早稲田佐賀中学校 2年 板垣 仁菜

参議院選挙当日、テレビ番組はどこも選挙速報を流し、コメンテーターが焦点の一つである消費税増税や社会保障と負担について語っていた。その時ちょうど我が家に泊まりに来ていたアメリカに住む友人一家が、「日本人は国土に対する意識が本当に低いよね」と呆れたように言った。

「そもそも国土に住むためには、税金を納めるのが当然だし、私達は税金を納められるっていうことに誇りを持っているよ。国民である証でもあるからね」と語るのだ。

アメリカでは他国から流入して、税金を払える国民になったことを感謝する人もいるという。国土に対して特別な思いがあるのだ。私は、母の友人であるシンガポール国籍の女性にも税金について尋ねてみたところ、「税金はこの地に住むために必要なお金」という発言があり、私は日本との違いを確信した。

アメリカもシンガポールも多民族で成り立っている。彼らにとって、自国は自分の民族のためだけの国家ではない。国民として税金を支払う義務があり、その義務を果たしているから国民として居住し、権利を主張できる。税金を拒否することはその国に住まない選択とするということだ。一方、日本に住むために税金を納めるという認識がどれほどの日本人にあるだろうか？日本は単一民族国家であり、周囲は海に囲まれ、国境を足で行き来することもない。他国から流入した日本国民は少数であるから、自分が日本に住むのは当然であって、自分と国土を考える機会が極端に少ない。生まれながらにこの地に住む権利があるという意識ならば、税金は単なる負担に見えるだろう。いつか、多民族が日本国民となって、税金を払い、日本という国の経済を支え、政治を動かした時に、初めて、日本人は日本という国と国土が日本人固有の特権ではなかったことに驚かされるだろう。そして、そんな未来は決して遠くはないのだ。

私達は日本人＝日本国民という固定観念では乗り越えられない時代を迎えている。今、日本で出会う外国人の彼らが、いつか日本の国民になることもあるだろうし、日本人でもアメリカ国籍を選び移住した人もいる。今後、私達が職場を海外に選び、いずれその国の国民となることも同様にあるだろう。

人が集まれば、十人十色の考えがある。年齢も育った環境も、宗教も収入も異なれば、万人に理想的な税金の在り方は程遠い。どの道も誰かにとっては不満が残る。だが、誰にだって、本当は遊園地に行きたいけれど弟に折れてプールに行ったことや、本当は焼肉が食べたいけど体調の悪い祖父に付き合ってお粥で我慢した経験はあるだろう。その記憶には、自分の不満よりずっと大きな家族への思いやりがある。同様に、私達は日本という国土に住むために、希望と妥協を繰り返しながら、税金を納めて運営しなければならない。同じ国土を選んだ同じ国民への思いやりと共に。

妹と税

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校3年 岩切 智哉

僕の妹は、税金のおかげで色々なサービスを受けられている。妹は小学二年生で、知的障がい者だ。生まれた時から、色々な病気がみつかった。これまでに二回大きな手術をしている。一歳の時は、心臓の手術後、高熱が一ヶ月以上続き、家族はとても心配した。今では元気になったけれど、発達の遅れが残った。言葉もあまり話せない。だから小学生になった今みなみのかぜ支援学校に通っている。

妹は、青色の手帳を持っている。療育手帳だ。療育手帳は、知的障がい者にとって各種サービスを受けるためのパスポートになるものだ。妹は、平成三十年にB判定からA判定になった。A判定は重度の知的障がい者を意味する。正直、これまでより障がいが重くなったので悲しくなった。しかし、その一方で福祉のサービスはこれまでより沢山受けられるようになった。調べてみると、例えば、病気になって病院に行くと、重度心身障がい者申請書の提出で、保険診療の自己負担額を助成することができる。僕が病院に行くと二千元と薬代で千円の合計三千元ほどかかる。これは、病気がちな妹にとってかなり助かる。

妹の通うみなみのかぜ支援学校は、児童四人に対し、先生が三人で色々な活動をしてくださっている。また、生活能力向上のために必要な訓練、社会との交流の促進などを行ってくれる放課後等デイサービスを一割負担で受けている。妹の成長にあわせて手助けしてくれていて、妹はいつも喜んで通っている。

公共施設も妹と介護者は無料だ。例えば、科学技術館や動物園、美術館などだ。また、駐車場も施設などに近いおもしろい駐車場にとめられるし、妹と一緒にだと高速道路の通行料金も半額になる。

さらに調べると、所得税、住民税も障がい者控除があった。妹の場合、所得税四十万円と住民税三十万円が所得金額から差し引かれている。まだ、他にサービスがあるかもしれないが、妹は税金で沢山のサービスを受けていることが分かった。僕は、メリットばかりでとても驚いた。母にデメリットがあるか聞いてみると、「ないよ」「本当に助かる」と言っていた。それから母は、「発達障がい児の親として進学と就職先は心配だったけど、療育手帳を持っている人向けの就労先があるから安心」と教えてくれた。妹がサービスを沢山うけ、安心して生活することができるのは税金のおかげだ。

今回障がいのある妹を通して税金の使われ方の一部を知る事ができた。

僕の将来の夢は障がいのある妹を支えられる医者である。そして、きちんと税金を納めて社会を支える一人になりたい。

納税とは私たち自身を守ること

今金町立今金中学校 3年 田中 琴奈

日本では「水と安全はタダだ。」とよく言われる。私も今までに自分が暮らす中で、そのことについて何の疑問もいただいていたわけではない。でも、果たして本当にそうだろうか。私の税に対する疑問、関心はここがスタートだった。

ある時私は、父と進路のことを話していて父が高校三年生のときに税務官試験を受けたと聞いた。私は「税務官」という仕事があることさえ知らなかった。漠然と「税金を集める人」くらいのイメージでしかなかった。「税金(お金)を集める」何て地味な仕事だろうか、と。おまけに時代劇で、「年貢(税金)をとりたてる悪代官」みたいな場面を見ていたこともあり、「税金を取り立て、人から疎まれるイヤな仕事だ」と。

しかし私は、社会科の学習で税金の仕組みを学ぶことをとおして少しずつ、税金や、税務という仕事への印象が変わっていった。国税と地方税の役割の違い、特定の目的のために使われる「目的税」のこと、税金の逆進性の課題などを学ぶ中で、税金と私たち国民がいかに近い存在かを知ることができたからである。

私の父は特別支援学校に勤務している。また私の叔父は海上自衛隊に勤務している。共に税金から俸給を受けて、仕事をしている人であるが、教育サービスや国防のために懸命に仕事にあたっている。税金をもとにして作られた財政を効率的に執行しながら生徒の学習環境をよりよいものにしたり、また国防だけでなく国際貢献、災害復旧に取り組んでいるのである。父が仕事をしている特別支援学校の生徒は障がいに対応する分私たちの通う学校よりも人手とお金がかかる。叔父の仕事に至っては、もはや個人で対応できる範囲のものではない。つまり、税金が果たす役割がいかに大きいのか、ということなのである。そして税金にそのような大きな役割を果たしてもらうためには、私たち国民一人ひとりが、「納税」の義務をしっかりと果たすことが大切なのである。

「(納税とは)これ即ち 政府と人民の約束なり。」

私は、税金について学ぶ中で、福澤諭吉の「学問のすすめ」の中のこの言葉が強く心に残った。現代社会においても、人と人、組織と組織の間には大なり小なりの「約束」があり、それが守られているからこそ、安全、安心に暮らせているのである。どうすれば福澤のいうとおり「納税」も同じことではないだろうか。日本国憲法が規定する「納税」という「義務」即ち約束を守ることは、私だけでなく、国民全体の安全と安心につながるのである。

日本でも、水も安全も決してタダではない。私も私自身や家族、地域の人たちの暮らしや人生を守るためにも、納税の「約束」をきっちりと果たす大人になりたい。

税はみんなの助け合い!?

秋田大学教育文化学部附属中学校3年 高橋 太陽

税 (tax) とタクシー (taxi) という言葉はとてもよく似ているが、そのどちらもラテン語の『触れる (tango)』から由来しているらしい。タクシーは、乗客と運転手が会話をするなど、ともに「触れ合う」ことのできる乗り物である。

では、私たちが日々その恩恵を享受している税において、「触れ合う」というのは、どのような意味をもつのであろうか。

私は、税の概念である「弱きを助け」にこそあると思う。一般的に、この後には強きを挫くと続くが、税の場合、そうではない。あくまで税は、強者の力を弱めるためにあるのではなく、「困難を分割する」ため、つまり、互いの弱さを補うためにあるからだ。

例えば、現在私たちが使用している教科書には、「これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。」と書かれている。これは、私たちの教育費を政府が負担していることを意味する。事実として、公立中学校の生徒にかかる年間教育費は約一〇二万二〇〇〇円だそうだ。とても容易に払うことのできる額ではない。したがって、税金によって、「弱きを助け」ていると捉えられる。

こうしてみると、日本における納税制度とは、資本主義の私有財産制度のもとに成り立つ集金方法であると同時に、国民の公正・平等を追求する社会主義の制度でもあるといえるだろう。日本は、納税を前提とした資本主義と社会主義の調和で維持されているのである。

しかしその反面、某番組で取り上げられているように、日本には滞納者とよばれる人々が存在する。いわゆる税を納めていない人たちのことである。私は考えた。「なぜ、こういった人たちは税を納めようとししないのか。」と。その人たちは、必ずしも全員がお金がなくて払えずにいる人ばかりではない。彼らの多くは、税の重要性を十分に理解していないために、家計に計画性をもたず、滞納に対して無知であるか、無感情であったのである。

税というのは、国民一人一人から国のためにと集められた、いわば希望なのだ。そう思い私は、滞納者の話を知り、ひどく侮辱された気持ちになった。そして、将来私は、義務としてではなく、国のために快く税金を納められるようになりたいと強く思った。

最後に、先人達の国への思いが詰まったこの制度を維持し、次の世代に伝えることが、無償で教科書を渡された本当の義務であると思う。

おかげ

会津若松ザベリオ学園中学校3年 内山 紡

世の中には、自分以外の誰かが払ってくれるから税金を払わなくてもいい、と考えている人がいるそうだ。だが私はその考えに同意することができない。自分が税金を納めないということは、誰かが納めた税金のおかげで教育を受ける。誰かが納めた税金のおかげで病気の治療を受ける。つまり、誰かが必死になって稼いだお金で生きることになる。「おかげ」が多すぎても、私だったら申しわけないという罪悪感を感じるだろう。

私は幼いころ、小児ぜんそくを患った。苦しくて、息も思うように吸えず、入退院を何度もくり返した。だが、病気中のことを思い出していた時、ふとこんなことが頭の中に浮かんだ。「もし税金がなかったら」

私がそう考えたのには理由がある。それは、私達が払う税金の使い道の中に、「医療費助成制度」というものがあるからだ。医療費助成制度とは、その名の通りけがや病気の多い子供、高齢者に対して医療費を免除したり安くする制度だ。税金がなかったら同時にこの制度もなくなることになる。そうなれば私は十分な治療を受けられていなかったに違いない。通院や入院のたびに多額のお金がかかってしまう。だから、命にかかわる重症でない限り自宅で症状がおさまるまで何とかしていただろう。想像するだけで苦しさがこみ上げてくる。

こうして私が今、家族と一日中一緒に過ごして、友達とたくさん遊んで笑いあえるのも、幼いころにきちんと病気を治すことができたおかげだ。最近では全く小児ぜんそくの症状が出なくなっている。そして、この治療を受けられたのも、どこかの誰かがルールを守りきちんと納めてくれたおかげだ。

人生は、三つの時期に分けられる。一つ目は、教育を大人の「おかげ」で受ける時期。二つ目は、された「おかげ」とその先される「おかげ」を必死に働いて返す時期。そして生きるために年金を若い人の「おかげ」でもらう最後の時期。私はこのサイクルが人生をよりよいものに行っていると感じる。誰もが、「おかげ」を感じすぎず、感じなさすぎず、幸せに暮らしてゆける。私はあと八年ほどで「おかげ」を返す時期に入る。不安や苦しいことばかりだと思う。しかし、幼いころの自分にされた「おかげ」をよく思い出して、税金をきちんと納める大人になりたい。

これからの税の在り方

学校法人清真学園中学校 3年 宮崎 有

税、という漢字には「禾^{のぎへん}」がついている。お金に関する漢字には「貝^{かいへん}」がつくというイメージがあるが、穀物を表す「禾^{のぎへん}」。

なぜなのだろうか。税、という漢字の語源から考えてみた。昔の税は「租庸調」といい、特に「租」は、穀物の収穫の一部を納めるものだった。「禾^{のぎへん}」はここからきているらしい。

次に右側「兑」の理解の仕方は諸説ある。

まず一つは、よろこぶ、という意味の「悦」が語源となっている説だ。漢字の解釈としては、穀物を収穫できたことに対して喜び合おう、という意味になり、それがつまり「税」を表す。これには支え合う、というニュアンスもあるように感じた。また、同じ「悦」を語源とする解釈でも、税はよろこんでさし出すべきだ、という権力者の思惑を表している、という説もあった。

もう一つは、何かを抜き取る様を表す「脱」が語源となっている説だ。この場合、解釈として、税とは格上の人々が民衆からその穀物、儲けの一部を奪う、というものになる。

私の中ではどちらかという税のイメージとしては後者の方が大きい。実際多くの人がこのようなイメージをもっているのではないだろうか。

しかし、それでは駄目だと思う。そこで解決策を考えてみた。結論として私は、税の使い道をしっかり国民に提示した方がいいと思う。例えば日本の税の多くは介護や年金、医療費などの社会保障費に使われている。これを理解している人がどれだけいるだろうか。

そこで私は朝のニュースなどで税の使い道を少しずつ簡単に説明していくコーナーをつくれればいいと思う。朝テレビをつけた時にいつも税について話していたら、自然と税への興味が湧くのではないか。また、単純に小学校から税についての授業を取り入れるという手もあるだろう。今まで多くの国民が税に興味を示してこなかった。知識も無かった。それにより税の使い道に不満や疑問があっても指摘ができなかった。しかし、そうしてより多くの国民が税の知識を得ることによって、税を使う側もより必要なものに、より有効に税を使うことにつながるだろう。

私には今、税は物を買うとき音も無く盗られる嫌なもの、というイメージがついている。大人になれば支払うべき税金も増え、さらにそのイメージは悪くなるだろう。しかしそのときに税の使い道が分かっていたら、税に対する考え方も大分変わるのではないだろうか。日本人が、税を「脱」奪われるもの、としてではなく「悦」支え合うために喜んで差し出すものとして捉えられるようになれば、日本という国自体もよくなっていくのではないかと思う。

私は伝えたい

下野市立国分寺中学校 3年 檜山 琉那

小学校四年生の秋、私は急性リンパ性白血病になり、一年以上入院生活を送った。退院後も一年以上毎日抗がん剤の薬を取り、今も二ヶ月に一回検査のために病院に通っている。

五年前に治療が始まり、副作用がとても辛かった。けれどそれ以上に心配なことが一つあった。それは、医療費のことだ。入院するということは、とてもお金がかかることだと私は知っていたため、ずっと悩んでいた。私のせいで家族に迷惑がかかるなら私は死んでしまいたいと思った。

ある日、私は勇気を出して母に気持ちを打ち明けた。

「ごめんね。私のせいで、お金がいっぱいかかって。」

と。それに対して母は私の思いを全て聞いてから私にかかっている医療費について話してくれた。

私は、医療費の領収書を見せられた。そこには、一週間で保険点数十一万五千点と書かれていた。

点数言一点は十円として計算するらしい。つまり、私の医療費は百十五万円かかっているということだった。しかし、領収書額は0円だった。それから私は入院費や治療費は全て税金で支払われているということ。また、それは小児慢性特定疾患医療費助成制度というもののおかげだということを知った。

この制度は、十八歳未満の小児が重い病気にかかった際に国と地方公共団体によって医療費の助成が行われるというものだ。

私は、この制度のおかげで家族に迷惑をかけずに済んだ。今まで背負っていた重荷が一気に軽くなり多くのことに悩まず安心して治療を受けることができた。

私は、入院して初めて税金の有り難みを知った。病気にならなければ一生税の大切さを知ることはなかったかもしれない。

しかし、税金で助けられている人がいる中納税することを苦に思っている人もいる。納税する側の気持ちとしては、高い税金を払うことは抵抗があるのだろう。

きっとどのように税金が使われているのかを知れば、納税者も前向きになるはずだ。そのためには、納税者に税をどのように使っているのかを分かってもらおうとする働きかけをする必要がある。

だから、私はこの作文を通して伝えたい。税金は人を助けるために使われていると。税金でたくさんの人々の命が救われているということ。

納税することで、みんなのためになることを国が代わりにやってくれる。そんな日本に生まれて良かったと私は思う。

私は伝えたい。税金によってこの国の人たちは助け合い、繋がっていると言うことを。私も助けられた。だから最後に

「助けてくれてありがとう」

今年の春大学生になった姉の自動車を購入するため、家族で販売店を訪れた。興奮した私と姉は、数多く並んでいる展示車を眺めるだけでは物足りず、乗り込んでハンドルを回してみたり、シートの座り心地や装備品などを比べたりして、はしゃいでいた。その車と車の中で母と営業マンが、フロントガラスに貼られたプレートの大きな数字を指さしながら何やら真剣な話をしている。

「この値段で乗り出しは、いくらですか？」

母が聞いた。スマートフォンを片手に営業マンが金額を提示した。プレートの額面と随分違う値段だ。この金額が購入値段ではないのかと疑問に思っていると、姉が教えてくれた。これは、税金などを除いた値段らしい。何の税金だろうと家に帰り調べてみた。「自動車の税金」と検索するとたくさんヒットした。まず、車の重さによって異なる自動車重量税がある。環境に優しいハイブリッド車の場合は、減税の制度もあるようだ。さらに、自動車を動かすガソリンや高速道路の料金にも税金がかかっている。

では、どのように使われているのか。以前に「この道路の建設には、税金が使われています。」と書かれた看板を見かけたことがある。道路の建設や整備などの管理費として、税金が使われているのだ。

私の父は、道路建設の仕事に携わっている。大きな幹線道路の建設に関わっている時は、その建設の進み具合や完成した規模の大きさ、山間部の道路建設に関わっている時には地元の人達の生活がいかに便利になるかや実際に楽しみにしている人達の声などを聞かせてくれた。事故が多発していた、あるカーブの多い山の傾斜地の道路が、直線のバイパスになった工事の時には、完成後、わずか数百メートルの走行距離の道路になって、事故が全く発生しなくなったと教えてくれた。母も仕事で長距離を車で移動する時など、幹線道路が完成する前とあとでは、所要時間が全く異なり、随分と楽になったと話をしていた。頭の中で、姉の車の税金と両親の道路交通に関する話が合致した。税金のおかげだったのか。税金を納めるという入り口と税金が使われるという出口を結び付けることが出来、トンネルを抜け出せた気がした。

この社会は、税金がまさに今、生きているのだ。税金は、私達の生活に寄り添いより便利に、より暮らしやすくしてくれるものなのだ。税金がなかったら、快適に生活するための資金は、どこからやって来るのか。考えても、答えは出ない。全ての税金は、必ず自分達に返ってくるのだ。

姉の自動車購入について行くことで、税金に対する興味と知識が増した。私は、今回、税金が適材適所に使ってもらえると知り、安心するとともに、納税出来る大人になるのが楽しみになった。

愛する故郷を守るために

学校法人星野学園 星野学園中学校1年 潮田 真子

私が生まれ育った埼玉県日高市の高麗の里は、千三百年の歴史と自然が豊かな美しい山里です。春は桜と菜の花、夏は川のせせらぎ、秋は五百万本の曼珠沙華、冬は雪景色の巾着田を五感で味わいながら、この町を散策して歩くのが好きです。しかし、毎年夏休みの期間のこの時期になると、ある心配が頭をもたげます。それは、川遊びやバーベキュー、ハイキングや登山、史跡巡り等に遊びに来る観光客によって町が汚されるのではないかと、という懸念です。実際、私は巾着田の河原にコンビニの袋に入ったゴミが放置されていたり、お菓子のゴミが大量に捨てられているのを見たことがあります。自分の故郷を気に入って遊びに来てくれるのは嬉しいけれど、汚されるのはとても悲しいです。

この町と税金について考えている時、自分が住んでいる市町村に納める「住民税」という税があると父が教えてくれました。納められた住民税は、道路の建設やゴミの収集費用、警察や消防、公共施設の整備等に使われているそうです。私の住む日高市について調べてみると、例えば平成二十九年度は、高麗郷魅力アップ作戦に三千六百万円、子どもたちの心に残る図書購入に八百九十万円、ボランティア活動費に百三十一万円、ふるさと自慢のまちづくりに二百七十一万円の住民税が役立てられていることが分かりました。

そう言えば、高麗神社や巾着田周辺を流れる高麗川の護岸工事が行われ、遊歩道ができました。巾着田のあいあい橋とログトイレの改修工事も行われ、いつでも安心して利用できるようになりました。時には日和田山での滑落事故に救護のヘリや救急車が駆けつけることもあります。河原でゴミ拾いをしてくれたり、通学路の安全を見守ってくれたりする地元ボランティアの方々にはいつも頭が下がります。なるほど、私が日頃目にしている当たり前の景色や暮らしは、税金と地元を愛する人々の思いによって成り立っているのだと知り、目からうろこが落ちるようでした。

私は今まで税金について何も知りませんでした。自分の住む地域の住民税の使われ方を知っただけでも、地域の見え方がまるで違います。税金が私達の身近なものに使われ、つまりは今現在納税してくれている両親や大人が、私達の生活を守ってくれていることに感謝したいです。高麗神社をはじめとする歴史建造物、日和田山や巾着田や高麗川の自然、あたたかな地元の人々、私の愛する高麗の地域を、他の地域の人にももっと知ってほしいです。そして、後生まで誇れる故郷となるように、私も今後税金のことをしっかり学び、納税し、地域の一員として貢献できる素敵な大人になりたいと思いました。

夏休み、テレビを見ていたら、僕の大好きな富士山の特集をしていた。しかし、そこに映されていたのは、満足な登山をする人ではなく、ワンピースにサンダルで登ろうとする女性、ランニングシャツに短パンの男性など、「山をなめとんか！」と、画面に向かって叫ばずにはいられないほど、十分な準備をしていない人たちだった。当然、安全誘導員に呼び止められて下山を促されてはいたが、それなりの準備をしていても怪我や高山病で救護所へ運び込まれる人たちがいた。その、言葉の通じない外国人に新聞紙を広げて背中をさすりながら吐かせたり、自分より重そうなおばさんを背負って雨の山道を下ったりしている若いスタッフを見て、僕は涙が出そうになった。自分にはできないなと思った。あとで、このスタッフさんたちが皆ボランティアだとわかったときは、感動するというよりは、憤りを覚えた。

二〇一四年に導入された「富士山保全協力金」という名の入山料は、山小屋のトイレの改修などの環境保全、登山道整備、安全誘導員の人件費にあてられている。救護所の医師やスタッフはすべて、地元の病院や大学からのボランティアで、二十四時間無料で診察をしていたのだった。さらに、驚いたことは、入山料の千円は強制でないため、実際に払っている人は、五割にも満たないということだった。

僕が小さい頃、外国で登山をしたときは、一人あたり十二ドルの入山料を強制的に徴収されたということを家族から聞いた。

富士山に登る人は皆富士山の恩恵を受けているのに、なぜ払わないでいられるのだろうか？

税金は、受益者負担であるべきだと思う。もしかしたら一生登らないかもしれない地元の人たちが払った地方税を、全国からやって来る払わない人たちが享受するのは、おかしいのではないだろうか？

消費税以外で、これまで僕が払った税金に入湯税と空港税がある。大人でも子供でも例外なく徴収される。

富士山の年間登頂者は二十万人を超す。入山料を入山税として、一人あたり千円を強制的に徴収すれば、一年間に二億円以上の税収になる。一万円なら二十億円だ。それで登山客が減ったとしても、登頂に行列待ちをしている現在の状況は緩和されるはずだ。山の生態系が壊されるリスクは少なく、環境への負荷も軽減されるだろう。

富士山は日本人の心の尊い象徴である。その宝の山をゴミの山にしてはならない。富士山の価値を認めている人が、率先して入山税を払えるように、国や自治体で議論を進めてほしいと願っている。

税という名の“黒子”に感謝

燕市立分水中学校3年 矢部 彩香

八月一日。今日は広報発行日。机の上に置いてあった広報を手にとると、ふるさと納税特集であった。ふるさと納税の使い道などが書かれていた。

その中に、初めて知ることがあった。燕市内を日常的に循環するバスがあるのだが、その運行事業費の一部にふるさと納税が活用されているというものだ。運賃はどこで乗り降りしても百円で、小学生以下は無料である。このような安価で運行できるのには何らかの税金によって賄われているのだろうとは思っていたが追究はしていなかった。その“黒子”がふるさと納税だと広報に教えてもらった。

この夏休み、塾へ通うために循環バスを利用した。いつもは送ってくれる親も仕事でいず、頼れるバスであった。しかし、このバスは元はといえば、公共施設、医療機関、商店街を循環するバスであり、交通手段をもたない高齢者のためのバスだ。このバスがなかったら、病院や買い物でさえ一人では行けなくなり、生活に困り、命に関わる問題にまでに発展するだろう。車がなかったり、運転することができなかつたりと、不自由なことなく簡単に外出できる。実際、バスの中にはたくさん的高齢者の方がいる。私は、このバスの真の利用のされ方に気づいた。

ふるさと納税はこのバスの他、あらゆる事業に使われ、私たちの暮らしに役立てられている。例えば、市内の小学校、幼稚園、保育園のエアコン設置。学校の授業にデジタル教材の導入。図書の充実。妊産婦さんの医療費無料などがある。このように、子どもから高齢者までの生活の裏には税金によって支えられている。つまり、日本の税金は、歌舞伎でいう黒子なのだ。黒子は、普段、観客からは見えないながら役者や人形遣いを助けるなどする大切な裏方だ。黒子がいなければ歌舞伎は成り立たない。ゆえに、私たちの生活に、税は必要不可欠なのだ。この税の存在を今、気づけて良かったと思う。

燕市のふるさと納税受入額は年々増加しており県内で一位である。五年で十五億円、人数でいうと、六万人も増加している。寄附をしてくださっている人たちのおかげで、不自由のない暮らしができていの中で、忘れてはならないのは感謝である。つい、普通、当たり前前に思ってしまい、税の存在を忘れてしまいがちだ。この作文を書くにあたって、日常の一つ一つにある税の存在をかみしめながら生活するようになった。その一つ一つにこれからも感謝していくつもりだ。私は、税を通してたくさんの人のおかげで生きている。少しでも人の役に立てるのであれば、私も将来納税していきたい。もちろん、「ありがとう」を忘れずに。

長野の自然を守る税金

茅野市立北部中学校3年 朝倉 ちひろ

「税」と聞いて私がパッと思いつくのは、消費税だ。でも、消費税の他にもいくつかあるんだろうなと思い、調べてみると、想像以上の複雑さと種類の多さに戸惑った。県税、市町村税、国税がありそのそれぞれに普通税、目的税がある。そこから直接税、間接税などにつながり、細かな消費税、酒税、たばこ税、都市計画税などに分かれていくのだ。私は、税についてほんの少ししか理解できていなかったのだと分かり、税の事を知りたくなった。

調べていくと、ふと「森林づくり県民税」という言葉が目につき、私は興味をもった。「森林税」とも呼ばれるこの制度は平成二十年度から開始された。納税義務者は県内に住所や家屋敷を有する者だそうだ。長野県は八割を森林が占め、清らかな水や空気を生みだしている。また、土砂災害や地球温暖化の防止、林産物の供給など、私たちにたくさんの恩恵を与えている。

木材がどれほど私たちの生活に必要なものか知っているだろうか。私は改めて考えてみてその大切さがよく分かった。例えば、鉛筆、学習机、本棚。さらに家の枠組み。防風林、防砂林もそうだ。挙げ切れないほどたくさんの木材を、私たちは必要とする。

「森林税なんて必要あるのかな。家の負担が大きくなるだけ。」と最初に見た時は思っていた。でも、森林税があることでいろいろと助かることがあるのだ。まず、里山整備という使い道がある。森林は間伐など整備をしないと見通しが悪くなり、猪や鹿など動物の絶好の隠れ場所となる。人里においていきやすくなり農作物への被害が出るので、整備をすることが重要だ。それから、近年林業に携わる人が減少してきている。森林の整備や多くの関係者を育成するためにも使われている。この森林税によって長野県の自然が守られているんだと分かり、すごいなあと思った。

長野県は教育費、土木費、民生費、公債費を主に使っている。長野県歳出予算の中で農林水産業の振興のために使われるのは5%、四百四十五億円だ。私はこの数は丁度いいと思った。長野県にはまだたくさん、整備が十分にされていない所がある。全部の整備を税で行うことは難しいが、森林税というものがあるということを知ってもらうことで、その森林の所有者に整備しようと思わせることはできるのではないか。自主的に森林の環境を守っていくことは森林税の目的を果たす。

なくてもいいと思った税などはなくて、森林税は長野の自然を守るために必要だなと感じた。いつか私も納めることになる森林税が長野の自然をつくり、守り、育てていくことを改めて考えさせられた。

祖母の笑顔から学んだこと

松戸市立第一中学校3年 小椋 菜々絵

「菜々絵、おばあちゃんの写真が送られてきたよ」と言って、母に見せられたのは、伯母家族と同居している九十歳になる祖母の写真だった。祖母は、認知症を患い、日中のほとんどを地域のデイケアセンターで過ごしている。写真の中の祖母は、デイケアセンターの料理教室で、おやつの団子を嬉しそうに丸めていた。その写真を見た私は、「おばあちゃん、元気そうでよかった」と思うと同時に、大きな疑問がわいてきた。祖母は、わずかな年金で暮らしているはずである。母から聞いた話では、祖母は週に五日、朝から夕方までをデイケアセンターで過ごしている。送迎もされ、一日おきにお風呂まで入れてもらうそう。そんなに手厚い待遇をしてもらっていて、祖母は一体いくらお金を払っているのだろうか。祖母がそんな大金を払えるとは到底思えない。それなら、伯母家族が大きな負担をしているのだろうか。私は、気になって母に尋ねてみた。すると母は、

「デイケアセンターにいる時間や地域にもよるけれど、一日いても、千円かからない程度の金額で面倒をみてくれるそうだよ。消費税が上がるのは嬉しいことではないけれど、おばあちゃんが楽しく暮らしていくためには仕方がないね。」と私に言った。

日本は今、少子高齢化が大きな問題となっている。現在、人口の約三人に一人が六十五歳以上となり、一人の高齢者を二人の現役世代が支える状態であるそう。そして、私が六十歳になる頃には、一人の高齢者を一人の現役世代が支えることになるかと予想されている。税金の三割以上が、年金、医療、介護や子育てに使われていることも、この現状を見ると頷ける。祖母の写真をきっかけに、高齢者が生き生きと暮らすことができ、その家族を経済的、肉体的、そして精神的にも支えているのは、税金なのだと知った。

どんな人でも、年をとる。そして、誰もが、自分が高齢者になった時の不安を抱えている。だからこそ、消費税増税により、子供から高齢者まで皆が暮らしやすい社会にするために使われるという保証があれば、きっと増税も仕方がないと思うであろう。増税により自分の今の生活が苦しくなると分かっているとしても、将来の生活が豊かになるためだと知っていればやむをえないと感ずるのではないだろうか。そのためには、自分たちが一生懸命に働いて払った税金が、本当に自分たちのために使われているのに関心を持ち、しっかりと見守っていくことが何よりも大切だと感ずる。自分の将来のためと、安心して納税することができる日本になれば、きっと経済的にも精神的にも豊かな日本になるだろう。祖母のように、自分が豊かな老後を迎えることができるよう、これからも税について関心を持ち続けていきたい。祖母の笑顔を守るためにも、そして自分自身の将来のためにも。

身近な支え

松戸市立小金中学校3年 國崎 沙和子

私は今まで「税」という言葉を聞くと、どこか他人事で身近なものだとは少しも感じていなかった。一番近くにあるはずの消費税でさえ、端数が出て面倒だなと思うばかりで、どこでどんな風に使われているのか気にしてこなかった。しかし、この機会を通して税について調べていくうちに税がぐっと身近になり、ありがたいものだと思うようになった。

中学生である私も納めている消費税は、国の収入の約二割を占めている。また、消費税以外にも所得税や法人税など、およそ五十種類ほどの税があることを知った。消費税と共に納められたそれらの税の七割強が「基礎的財政収支対象経費」として、社会全体のため、私たちのために使われていることが分かった。例えば、年金や医療、毎日通っている学校、そこで使う教科書はもちろんのこと、図書館や浄水場までもが税金で動かされている。正直、消費税がこんな使われ方をされているなんて思ってもみなかった。普段の買い物のときに払うあの小銭がこんなにも社会の支えになっていると思うと、嬉しい気持ちになった。今年の十月に消費税率が十パーセントに引き上げられるが、上がった分社会の支えになるのなら喜んで払えるとも思った。

実はこんな私でも直接税金を使うことを実感することがあった。昨年、市の事業で「平和大使」として長崎へ派遣され、原爆や平和について学び、その学んだことを身近な人や、地域の人に伝える活動を行なったのだ。このとき、千葉から長崎までの移動費、宿泊費、食事代は全て市の税金でまかなわれているので、それに見合った行動を心掛けるようにと説明があった。そのときも、税金を使って活動することの責任の重さを感じたが、税金について少し詳しくなった今、より一層その重みを感じた。

思えば、学校のことのほとんどが税金でまかなわれているのも、子どもに関わる事業に税金が使われているのも全て未来を担う子どもたちへのみえない投資ではないだろうか。自分とあまり関わりがないと思っていた税金も、実は私たちの将来に大きく関わっているのだ。そう思うとますます税金は必要不可欠なありがたいものだと感じた。

今までなんとなく身近なものとは感じておらず、気にも留めていなかった税金だが、この機会に身近な所で助けられ、支えられていることを学び、税金を納めるといことはとても意味のあることであり、大切なことだと思った。将来、私たちが大人になる頃には働き手が少なくなり社会保障にかかる負担が大きくなると言われていて不安を感じる。しかし、今私がこれほど支えられているのだから、支えてくれた大人に恩返しをすれば当然のことだと思う。だから、将来私たちの負担が増えたとしても地域、あるいは日本の未来の為にもしっかりと働き、税金を納め、税金の使い方について考えていこうと思う。

「苦しみ」から「希望」へ

足立区立第四中学校3年 菅原 深菜美

「つらい」「悲しい」「苦しい」。そんな私達の生活を支えてくれたのは、税金でした。

昨年十一月末、突然、私の父が脳出血で倒れました。緊急手術により、父は助かりましたが、右半身麻痺、失語症といった後遺症が残ってしまいました。

父が倒れた当時は、母も「これからどうしたらよいのだろう」と悩んでいました。しかし、地域包括センターと病院が連携をとってくれたおかげで、退院時に介護保険が使えるようになりケアマネージャーの方がついてくれて退院後のプランを母と一緒に考えてくれました。相談する先ができたことで、どれだけ母の気持ちは救われただろうと思いました。父が退院するにあたり、家の中をバリアフリー化する手すりの工事や、お風呂の椅子、杖などの福祉用具の準備も必要となりました。また、退院後もリハビリ病院からの「訪問リハビリ」を受けられています。これらのサービスは、全て介護保険が利くサービスで、その料金は本来かかる価格の一割の支払いで利用できており、大部分が税金でまかなわれています。これまで家計の大部分を支えていた父が働けなくなってしまい、今後の生活の不安がある中で父のリハビリを続けられているのは、税金によるサービスがあるからです。私達家族の「今」は税金があるからこそ成り立っているのです。

先日、父が会社への復帰にむけて区の福祉施設に入所しました。今まで縁のなかった場所でしたが、どのような場所なのか知りたくなって施設に足を運びました。そこは、父のような病気でリハビリが必要になった人だけでなく、生まれつき障害を持っている人が自立するために生活訓練を受けたり、未就学児で発達障害だと見受けられる子が保育を受けたりすることができる場所でもあります。そこには一生懸命自分の足で歩こうとしている人、自分の言葉で話そうとしている人の姿がありました。その姿を見て「頑張ればきっと社会復帰ができる」そう言って希望を捨てずにいる父の姿が思い浮かびました。父と同じように、リハビリで希望を持てた人がこんなにたくさんいます。そのような人々がリハビリを受けることができる環境が整っているのは、税金による支援があるからなのです。父のことがなかったら私はこのことを知らずに生きてしまっていたと思います。

今年の十月から、消費税が十パーセントに引き上がります。私はこれまで、多くの「増税反対」という声をきいてきました。確かに我家も二パーセントの増税は負担になります。しかし、その二パーセントで救われる人、生活が変わる人がたくさんいることを考えてほしいのです。私達の税金が誰かを助け、支え、希望を与えているということ。近い将来、私も納税をする日が来ます。その時、苦しみを希望に変えられる税金を納めることに誇りを持てる自分でありたいです。

税金で世界平和を

板橋区立赤塚第二中学校 3年 水野 晴花

「平和」この言葉は私の中で今、一番重みのある言葉です。

私は今年七月に修学旅行として広島・京都に行きました。テーマは「平和について学び、考える」というものでした。私はこの修学旅行にむけて二年生の頃から事前学習をしていました。特に印象に残っているのは「夕風の街桜の国」という本です。広島で被爆した人の物語です。私はこの本にある「だんだん平気で死体をまたぐようになっていった」という言葉が今でも忘れられません。戦争は多くの人々の命そして幸せを奪い、人々の当たり前を簡単に壊してしまうのだと思いました。

そして今年七月。私は原爆ドームを自分の目で見ました。私は言葉で表すことのできない感情に襲われました。「信じられない。」ただそれだけでした。原爆の破壊力そして七十五年前にこの場所で多くの人が苦しんだこと、すべてが信じられませんでした。平和を願うだけでなく平和のために行動できる人になりたいと強く思いました。

そして修学旅行後、私は原爆ドーム保存のために活動をした女子高生がいることを知りました。同じ年代の人が平和を目指して活動をしていたと知り私は感銘を受けました。今、原爆ドームの維持には税金が使われています。つまり彼女の活動は国を動かしたのです。私は原爆ドームは世界平和の原点だと思います。原爆ドームを見た人、それが例え外国の人だったとしても原爆の悲惨さに驚くという点は変わらないと思うからです。だから私は、彼女の活動は素晴らしいものだったと思います。また、原爆ドームのために世界平和のために私達の税金が使われていることを唯一の被爆国である日本の国民として誇りに思います。

では、私にできることは何なのでしょう。そんなことを考えている時に私は教科書に書かれている「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」という言葉思い出しました。つまり私が今日本のために、世界平和のためにできることは教科書からより多くのことを学ぶことなのです。税金に託された期待に応えることなのです。平和と税金はあまり関係していなかったと思っていましたが、税金は世界平和にかかせないものとなっていました。

世界ではまだ様々な紛争が起きていて、尊い命が毎日、毎日、奪われています。日本国内でも沖縄の基地のニュースなどを見ると複雑な気持ちになります。税金は世界平和のために使われるべきです。だから、そんな世界を変える可能性が秘められた私の世代が税金に託された期待に応え、日本をそして世界を知り、変えていく必要があるのです。日本が平和を世界に広めていける国になるように、税金が人の命や幸せを奪うものでなく守るものとして存在する日本を目指していきたいです。

消費税増税を前に、この夏休み、税金について考えてみた。物を買うたびに税金がかかる。さらに10月から消費税が10%になり、全てのものが値上がりするのは正直嫌だなと思う。しかし税金は社会のために必要なものだ。私たちが利用している公共施設や道路、社会保障など、普段の生活の様々な場面が、税金によって支えられている。

私は小学校や中学校で、税金がいかにより良い社会を作るために使われてきたのかを学んできた。例えば警察・消防費、ゴミ処理費用。これらは私達の生活をより良くし、日本を快適で、安全な場所に発展させてくれている。

それだけではなく、実は私はもっと直接的に税金に助けられたことがある。それは私が一歳の時のことだ。私は生死の境を彷徨う大病をした。幼かったので、私にその時の記憶は残念ながら無いのだが、身体に手術の傷跡が複数ある。両肺にドレーンを入れた跡や、両肺を手術した跡が、背中からお腹にかけて残っている。医師は必死で私を助けようとしてくれた。当時、同じような病例が世界中探しても数例しか見つからなかったため、治療は手探りだったらしい。その時、一月だけで数百万円を超える多額の医療費が必要だったのだが、入院してしばらくしたある日、医師は両親に、こんな時にこんな話もアレなのですが…と、聞きにくそうに私が乳幼児医療助成制度の対象であるかと確認したそうので、対象であるとわかると、ホッとした顔で、それは良かった。実はもうすでに1本40万円の薬を7本投与したんです。これで安心して治療できます。と笑っていたらしい。

国によっては、治療費が出せないために、治療を諦めることがあるときいたが、乳幼児医療助成制度があったおかげで、私は世界でも例が無いために治療法がよくわからないと医師に言われた病気を、費用の心配なく全力で治療して頂き、克服することができた。闘病は数ヶ月に及び、その間集中治療室での高額な治療を続けられ、病状では家族には大変な心配をかけたらしいが、経済的な心配がいらなかったことが、闘病生活の精神的な負担を大きく減らしてくれて、治療に専念できたという。後遺症なく生存できる確率は数%と考えられていたにもかかわらず、今こうして元気に暮らせているのは本当にありがたいことだと思ってしまう。

日本に生まれて、日本の制度に守られてきた私。一番は命を助けてもらったことだが、それ以外にも様々な場面で支えられてきている。これからもそうだと思う。いつか、今度は私がみんなを支えることができるように、みんなに助けられた命を大事に、きちんと自立して納税していけるような人になりたいと思う。そのために今は、私ができることを精一杯頑張っ、生かされている命に感謝し、生きていきたいと思う。

「復興特別所得税。」これは八年前に発生した東日本大震災の被災地復興を支援するための税金である。私が調べたきっかけは、聞いたことがない税金の種類に興味をもち、深く知りたいと思ったからだ。

私の祖父母の家は、福島県いわき市にあり、地震によって津波の被害が大きかった。他にも、福島原子力発電所が爆発し、放射能もれでより多くの被災者が出る事態となった。自分の家に帰宅することができなくなった人々。そして祖母は、目が見えないので、不安と恐怖でいっぱいだったと思う。被災者の人々を思うと心が痛ましくなる。八年がたった今も前を向き、苦しい思いを堪えながら少しずつ復興に励んでいる。

私は復興特別所得税があることで、復興作業を日本全体で支援できると思う。それは、遠く離れている場所においても、税金を納めることによって助けることができる命があると思うからだ。そして、互いに助け合っていくことの大切さに気づかされた。

誰だって、被災地の人々が一刻も早く今までの生活に戻れるように願っていると思う。それならば、国民の義務である、納税を自らが果たすべきだと考える。しかし多く人は「税金ばかりとられる」「納税して何が変わる」と思っているはずだ。実際は、税金がないと生活はどうなるだろうか。火災が起きても、急病人がいても、多額のお金が必要になると思う。税金は、生活するなかで必要不可欠な医療、子育て、学校教育、警察、消防などに大きく関わっている。私は税金があることの重要性に改めて気づいた。

税金を納めるということ、人の命を助けることができる、人を笑顔にすることにできるのは「税金」だということを私は気づいてほしい。もし、納税する人が一人だとしても、少しずつ集まると大きな力となる。そして笑顔が増えていってほしいと思う。

復興特別所得税に使われている目的は、地震によって崩れてしまった道路の整備、水や食料を被災地に届けるため、仮設住宅の設置などに役立てられている。

税金で繋がる支援。税金がなければ、人の命を救うこと、人を笑顔にすることはできないと思う。困っている人を日本中で支援しあうことができるのは税金だと私は思う。

支援が繋がっていくことによって、よりよい未来を築いていけると思う。そして、将来は自立し、気持ちよく納税できる人となり、未来へと繋いでいきたい。

税金のイメージが良いものへと変わり、困っている人を一人でも多く助けられるような永遠と繋がる支援の輪にしたい。一人でも多くの笑顔が広がってほしい。

so that as many person as possible can smile, even if it is one person.
たとえ一人だとしても、できるだけ多くの方が笑顔になれるように。

プラスチック税の導入案

横浜市立緑が丘中学校3年 落合 里咲

最近衝撃を受けたニュースがあります。それは、打ち上げられたクジラの死体の胃から約40kgのプラスチックごみが回収されたこと、これまでに奈良公園で死んだ複数の鹿の胃から大量のポリ袋が出てきたこと、中には4kgを超える塊もあったそうです。私はこのニュースに驚き、ショックを受けました。毎日当たり前の様にプラスチックごみを捨てている私自身がこの問題の一部でもあるからです。調べたところ、日本は世界で2番目にプラスチック消費量が多く、なんと年間一人当たりの廃棄量は約400kgもあります。プラスチックごみの中でも約47%は様々なパッケージによるもので、その7割近くは過剰包装が原因だそうです。また日本近海には世界の平均の約27倍のマイクロプラスチックが漂っていることも知りました。それらは、海の生態系にも影響し、食を通じて人体にも取り込まれている可能性があるという記事も目にしました。

今回税について考える機会を得た中で、真っ先に思い浮かんだのが「プラスチック税の導入」という案でした。具体的には、食品や日用品のパッケージ（紙以外）に一定額の税を設定し、シャンプーや洗剤等の容器本体にはより高い税率を、また個別包装された菓子類をそうではないものに比べ高い税率にするなどが挙げられます。そして商品として売られているビニール袋も購入時に税金がかかるようにすれば良いと考えました。これらは販売店での個々の対応は難しいため、最初に製造側の企業に課すことによって割高になった税一体商品を私たち消費者が納得して購入する方法が良いと考えます。その税金は企業が無害で土に還るプラスチック製品に切り替えていく設備投資の補助金に充て、日本全体で取りくんでいき、それが世界に広がればこの問題解決の糸口になるのではないかと考えました。このサイクルが広がるとプラスチックごみを燃焼する際に排出される二酸化炭素も減少させることができ、地球温暖化の歯止めにも繋がるのではないのでしょうか。

現在使われているプラスチック系レジ袋を土に埋めた場合、それが無くなるまでには千年以上かかると言われています。既に土にかえるプラスチックの研究は進んでいて、一部商品化されていますが、まだ私たちの生活に馴染んでいません。

エコバックの推進がかなり進み、買い物の際にエコバックを持参する光景は珍しくなくなりました。しかし、もはやその程度では追いつかないほどプラスチックごみの問題は深刻な状況です。リサイクルも重要ですが、今の時代はごみそのものを出さないこと、そのための費用が必要になっています。そしてその資金調達のための「プラスチック税」は、きっと誰もが納得する税金になることと思います。何よりも、私を含め一人一人がプラスチックごみの減量を強く意識することが、一番の課題だと感じています。

レガシーを残すために

富士吉田市立吉田中学校 3年 堀内 結衣

「三兆円」一二〇二〇年の東京オリンピックに使用される税金だ。そして、それを負担しているのは、東京都民だけでなく、日本国民だ。三兆円というと、国の税収の約五パーセントにあたる。少子高齢化に伴う、所得税の税収などの減少や年金負担の増加によって消費税増税がされている中での国税利用には批判的な意見がある。また、当初四一〇〇億円と想定されていた予算のかさみによる、情報の不透明さも国民にとっては、不安の種だろう。

しかし、オリンピックの税金利用は、必ずしも悪いことばかりではないと思う。前回の高度経済成長期中に開かれた東京オリンピックでは、新幹線や高速道路などのインフラ整備が進んだ。そして、それによる経済効果は非常に高く、今の私たちの生活に欠かせないものとなった。

それでは、今回はどうなのだろうか。驚きの事実がある。それは、とある新設する施設の運営がオリンピック後に赤字になるということだった。しかし、それだけではない。その施設は、オリンピック利用後、取り壊すことが、既に決まっているとのことだ。多額の税金を使用し、国際的にも環境の整った施設が、わずか数ヶ月の利用で終わってしまうというのは、とても、もったいないことではないか。オリンピックの目的にも、「国際国と国際都市がオリンピックのレガシーを残すよう奨励する」とあり、これからの日本に残るオリンピックであるべきだ。

その改善のためのヒントが長野オリンピックにあると思う。そこで利用されたスケートリンクは、長い間、赤字が続いていたようだが、夏場、コンサートなどの活用によって、黒字になったそうだ。発想の転換で、有効な税金の利用ができるだろう。

そして、オリンピックに伴い、ヒートアイランドを防ぐ遮熱性舗装をするなどの街づくりが進められている。大きな変化に見えないかもしれないが、地球温暖化が進んでいる今だからこそ、大切なレガシーになると思う。

二〇二五年には、大阪で国際博覧会が行われる。そして、ここでも、一二五〇億円という多額の税金が使われるようだ。その分、経済効果は、二兆円にもなるらしい。

税金は、正しい判断をして利用することで、私たちの生活をより良いものにしてくれる。だからこそ、これからも国民の義務である納税をしっかりと行っていきたい。また、社会保障などの保障が行き届き、住みやすい世の中になって欲しいと思う。

税を知ること

越前市万葉中学校3年 野村 祐一郎

中学校へと続く道路の上を、四年後に開通する北陸新幹線が横切ることになっており、僕は毎日、その高架橋の工事を見て通学している。以前はそれぞれ独立して立っているだけだった橋脚もかなりつながってきており、ここを新幹線が走るのだということがはっきりイメージできるようになってきた。開通することで、自分たちの生活がどのように変化するか、今からとても楽しみである。

しかし、感じるのは楽しみばかりではない。金沢から敦賀までの建設費は現段階で一兆四千八億円余りである。これほどまでに莫大な建設費が国や沿線自治体の税金でまかなわれるとは驚きである。そしてもちろん、その税金は、国民・住民が納めるものである。

しかし、ただ「税金を払え」と言われても、あまりいい気はしないだろう。僕が税金を払う機会は、せいぜい買い物をする際に消費税を払う程度であるが、働いて得た給料から何パーセントかが徴収されるとなると、おそらく残念な気持ちになるのではないだろうか。

先日僕は、集落で行われる「地蔵まつり」の協力金を集落の方々からいただいて回るという経験をした。この祭りは、中学生と小学生の男子だけで行うのが伝統なのであるが、協力金は男子がいない家も含め、ほとんどの家の方が五百円、千円と出してくださる。僕は協力金をいただくたびに、この行事のためにこんなにもお金をを出してくださってありがたいことだと思った。なぜなら、自分が直接参加するわけでもない行事にお金を出すのは、自分なら嫌だろうと思ったからだ。しかし、多くの家を回り、集落の方の話を聞く中で、その疑問は次第に解消していった。集落の方々は、地域を守る「お地蔵さん」に感謝し、この地域のこれからの安全を祈って、お金をを出してくださっているのだ。

僕はここに、税金を気持ちよく納める秘訣があるのではないかと思った。つまり、自分が納めるお金の使い道や必要性について、しっかりと理解することだ。小さい集落では、協力金を集める人も、それを使う人も、また、「お地蔵さん」の御利益を受ける人もそれが誰であるかはっきりしており、その必要性も「伝統」として肌で感じている。だから喜んで協力してくださる。それに対して、国や地方自治体といった大きな組織が集め運営する税金は、その用途や必要性について、見ようとしなければ見えなくなってしまうのだ。

だとすれば、僕たちは、それを知る努力をしなければならない。新幹線建設のようにわかりやすいものだけではない。目に見えない細かいところにも、税は使われている。納得して気持ちよく納税するために、僕はこれからももっと税を知る努力をしようと思う。

次世代へとつながる税金に

瑞浪市立瑞浪中学校3年 稲葉 信乃

今年の三月、高二の兄が母に教科書代をもらっていた。二万七千円。教科書ってそんなに高いんだと思った。「無料じゃないの？」何も知らない私は、今思うと恥ずかしい質問をした。高校は私立・公立関係なく、義務教育ではないから自分で買うのだと兄から聞いた。そして兄から教科書の扱い方や思いが変わる一つの話を知ってもらった。

それは兄が小三の時の話。四月に進級した始業式の学活で、担任の先生が教科書を配ってくれた。全て配り終えた時、一人の子の教科書を手に取り、「この教科書の裏面を見て何と書いてあるか読んでみて下さい。」

『この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう』と書いてあった。まだ小三の兄には言葉が難しく理解が出来なかった。「ぼくたちの為にタダでくれてる」と思ったそうだ。先生はその時、小三の子供達に分かりやすいように説明してくれた。「みんなのお父さんやお母さん、他にもお仕事をしている人達がお給料から税金を納めている事。色々な税金からこのきれいで新しい教科書が一人一人に配られている事。そしてそれがあたり前ではないこと。私達の将来のために期待を込め、税金で作成し、国が中学校までの九年間、支給してくれている事。」を話して下さったそうだ。それから兄は、教科書には丁寧に名前を書き、大切に使うよう心がけたそうです。あの時、先生の話がなければ知らずに九年間を過ぎていたのだ。教科書の裏面を気にすることもなく。

私は、自分がどれだけ無知であったかと思った。この話を聞かなければ義務教育の間、誰に感謝することもなく教科書が支給されるのがあたり前だと思っていたからだ。現在中三の私は、今使っている教科書が最後の支給となる。九年間、ありがとうございましたという思いを込めて、裏面を声に出して読んでみた。これはただの活字ではない。私達への期待の重みを感じた。

「税金」と聞くと消費税は身近に感じるが、正直今まで「税金とは何か」「何に使われているか」など考えたこともなかったし、知ろうとしなかった。「税金」は消費税以外は大人が社会と関わる中で支払われるもので、自分たちには何も関係がないと思っていた。けれど、三年前から十八歳以上が有権者となった。私達も三年後に社会の一員になるのだ。若い私達に託された一票を無だにしてはいけない。もう、知らない、関係ないではない。人口減少が更に加速し超高齢化社会に突入していく。「税金」の使い方を私達が決めていく番だ。母国が住みやすい国になる為に多方面に活用し、次の世代、その次の世代へとつながる「税金」であってほしいと願う。

そして、私には小四の弟と小一の妹がいる。教科書の裏面の意味を今度は私が伝える番だ。

昔から変わらない街づくりの会費としての税

豊明市立栄中学校1年 浦 史佳

「税とは、何のためにあるのでしょうか。」塾の先生からそんな質問を受けて、私はすぐに答えられませんでした。中学生として、税について詳しく知りたい、と思った私は税理士である祖父へ訪ね、税について、また税と世の中のつながりについて調べてみました。

まず、税金とは何かを調べました。年金や医療、水道、教育や警察といった公共サービスは、私達の暮らしに欠かせないものですが、その提供には費用がかかります。税はこのような公共サービスの費用を賄うもので、暮らしを支えるための「会費」といえます。

そのことを祖父に言ったら、

「そうだね。その会費を正しく計算するのが税理士の仕事だよ。でも、昔はその大変な税の計算をもっと単純に行っていたんだよ。」

と教えてくれました。例えば海外では建物の窓の数で税を決めていたそうです。日本でもその名残りが残っています。日本では昔、間口の広さで税を決めていた所もあったようです。なので京都の昔の家は間口が狭く、奥行きがあるものが多いです。昔の人々はできるだけ税を少なくできるように工夫をしてきたのです。六年の時に修学旅行で見た京都の街並みは、税を少なくする工夫だったんだ、と思い「税と街並みが関係してたんだ」と祖父につぶやきました。すると祖父は「税の名残りでいえば、租調庸の名残りが町名に隠されているよ。調べてごらん。」と言いました。調べてみたら、私の住んでいる愛知県豊明市にもつながりのある地名を見つけることができました。豊明市には、五十年近く前まで「沓掛新田」という地名がありました。この「新田」とつく地名は全国にいくつもあり、これが税に由来するものだったのです。飛鳥時代には米を納める「租」という税があり、人々は米を納めるための田んぼが必要でした。そこで、山を切り開き、「新」しい「田」んぼを作ったのです。これがそのまま町名「新田」になりました。

新しい田んぼを作り、米を育てる。大変だったと思います。でも考えてみるとそれは昔も今も同じでした。私が通う学校も通学に使う歩道も税金で整備されています。それは農業や漁業、工業、サービス業など色々な仕事を通じて大人の人たちが納めてくれている税金でつくられています。私は、昔から変わらない税の役割と納税の重要さに気づきました。

そして、税を正しく計算する大切さも。間口の狭い家を作り税を少なくしたい。皆がそんなことを思っているのは住みよく街づくりができない。そうしないために、適切な税金を計算する祖父の仕事があることを知りました。

今回調べて分かったのは、税は昔から街づくりに欠かせない「会費」であること。私も、自分の夢を叶えて、税を払うことで、街のためにもなるんだと気づくことが出来ました。

弟が産まれて

阿久比町立阿久比中学校 1 年 大西 慶侍

税の作文を書くとなったとき、弟が生まれた時のことがすぐに頭にうかびました。我が家にとって税金は「感謝」の一言でしかありません。もしなかったら、双子の弟は今も病院で治療を受けていたかもしれません。

僕の双子の弟は、予定日より 2 ヶ月ほど早く生まれました。僕とは 10 才はなれていて、生まれたあとも、最初のほうは、弟に直接ふれることはできず、ガラス越しに見ることしかできませんでした。ぼくはとてもうれしかったことを思いました。

母が妊娠中毒症になり、これ以上お腹の中に赤ちゃんをおいておくのは、赤ちゃん、母親ともに危険な状態だったのでやむをえず取り出されたのです。生まれたときの体重は、ふつうの赤ちゃんの半分にも満たない状態だったので、すぐにNICUに入れられ、24 時間看護の中で 2 ヶ月過ごしました。ミルクも鼻から通したチューブで胃へ流し込んで栄養をとって、母は毎日母乳を運んでいました。

目、耳、脳などの様々な検査を受け、「異常なし」の検査結果を聞いたとき両親がよろこぶ様子だったことが忘れられません。

今弟は、二才になり保育園に通っていて、少しずつ言葉も発して元気になっています。

今の元気な弟があるのは先進の医療設備の中での病院の先生看護師の方々の懸命な治療のおかげは、いうまでもありませんが、もう一つ忘れてはいけないことがあります。それは「税金」の存在です。NICUには高額な医療機器が設置されており、多くの医師、看護師の方々が二十四時間体制で勤務しており、そのため、設備や先生方への給料などに莫大な費用がかかります。当然、その費用は患者が負担しなければなりません。

弟の場合、シナジスという予防接種だけでも二人合わせて、10 万円近くするのだと聞き、驚きました。しかし、未熟児医療助成制度のおかげで一定の体重に満たない赤ちゃんの場合、大部分の援助があり、両親は、予防接種だけでなく、入院費などの負担も減り、大変助かったと母に教えてもらいました。この、医療費助成制度の財源こそ私たちが納めた税金なのです。

僕たちが安心して暮らせるのは税があってこそです。そしてその税を自分もみんなも同じように負担するからこそ意味があるのです。社会のため、そして自分や自分の家族のためにも税金をしっかりと払いたいです。国民みんながそうであってほしいと思います。税金のお世話になっていない人はいないと思います。なので税金のありがたさを実感し、正しく、大切に使いたいです。

税の恩返しと社会の支え合い

高島市立今津中学校3年 宮内 杏実

ある日のこと。鼻が詰まって頭が痛い。黄色い鼻水も出て、変な臭いがする。私はその症状を母に伝え、耳鼻咽喉科の病院に行った。私は小学生の頃からアレルギー性鼻炎で、蓄膿などに悩まされてきた。病院に入り、母は保険証などを出していく。その時、私は「副」の字に丸で囲ってある印のものを見つけた。後で母にそれについて聞いたところ、「まるふく」というらしい。まるふくとは福祉医療費助成制度のことで、市が私の医療費を税金で払ってくれているとのこと。この市の特有のものらしく、私は素晴らしい制度だと思った。と同時に、「そもそも税金とは何だろう」と疑問が湧き、それがきっかけで、初めて税という存在に気付いた。

数年後、私は中学三年生になり、租税教室を受けて税について深く学んだ。学校などの公共施設や、福祉などの公共サービスを行うために必要な費用は、全て国民が納めている税金だったことを知った。税金があるから学校に通える。税金があるから病院で治療してもらえるのだ。ではなぜ、それを理解している大人達は税金を納めるのを嫌がるのだろうか。「一方的にお金が取られる」というような考え方をすることが疑問になった。そう思っていた頃、あるドラマを見た。ドラマの中の主人公は「生きていだけでお金が取られる」と発言していた。それは一体どうゆうことかと気になり、調べてみたところ、「住民税」だったことを知った。働かなくても、生きていだけでお金が取られるのは、誰でも嫌になる。しかし私は、見方を変えれば、税金は決して悪いものではないと思う。なぜなら、私達が税を納めれば、その分、何らかの形で返ってくるからだ。例えば、私達の道路は税によって誰かがつくってくれている。だから外を出歩けるようになる。つまり、私達が税を納めれば道路をつくるお金がたまり、誰かが働くことによって返ってくるという、「鶴の恩返し」になるのである。ここで私は、大切なことに気付いた。それは、税が何らかの形で返ってくるとき、そこには必ず「働く人」がいる。そして、様々な人が社会を支え合っているということだ。私はまだ中学生だから、恩をもらってばかりだ。だからこそ、将来はその恩を誰かに返すことが約束だと思う。また、税を納めるだけではないとも思った。

現代の社会は、税金は払うが働かない、いわゆる「ニート」がいる。お金を払うだけ払って恩を返さない、社会貢献ができていない人がいる。そんな人達は、最終的にお金が底をついて生きていけなくなると思う。だから私は、社会貢献をするために、そして、恩返しをして未来に繋げていくためにも、しっかり勉強をし、働いて、税金を納めたい。

人々の幸せのために

京都市立京都御池中学校 3年 山名 奈月

私は税について学校で学習したり周囲で耳にしたことの中でよく話にできた疑問が、「収入が多い人は税金も多く納めるべきか。」という疑問です。私はこの疑問について考えました。収入が少ない人も多い人も平等に税金を納めると、収入が少ない人の生活は苦しくなります。また、それぞれの支払い能力に応じて税金を納める方法もあります。この方法の場合、納める税が高すぎると人々の仕事をする意欲がなくなる可能性があります。人々の仕事に対する意欲がなくなると労働者が少なくなり、国の活気を失ってしまいます。収入が多い人も少ない人も平等に税金をはらうことができる方法はあるのでしょうか。私はそれぞれの支払い能力に応じて税金を納める方法が一番平等な方法だと思います。それぞれの状況に合った税金にすることでどんな人でも納めることができるので、平等だと思います。しかし、納める税が高すぎて人々の仕事への意欲がなくなることには気をつける必要があります。もう一つよく耳にする問題があります。それは社会保障の費用を負担する働き手が現在減っているということです。日本では少子高齢化が進んでいて、二〇〇〇年は一人の高齢者を三、六人で支えていましたが、二〇二五年には一、八人、二〇五〇年には一、三人で高齢者を支えなければならないと予想されています。少子化が進む理由は働く女性が多くなったことなどがあげられます。少子化の問題を改善するためには育児と仕事が両立できるような環境をつくるのが大切だと考えました。例えば最近、仕事場に子どもを連れて来ることができる会社が増えています。そうした職場を増やすことで、女性が安心して子どもを出産することができると思います。そうすることで少子化を少しでも改善することができ、高齢者を支える働き手が増え、高齢者の年金を負担し、よりよい未来をつくることができると思います。このように少子高齢化と税金は深く関係しています。こうした問題は先進国を中心に進んでいます。日本は世界に先がけて少子高齢化になったため、これから少子高齢化となると予想されている国々は日本がこのような問題をどう改善し、どのような未来をつくっていくのかを世界は期待しています。私は約五年後、二十歳になり年金を払い高齢者を支えることとなります。社会を支える一員となるのです。今は正直、税金についてあまりよく知りませんがこれから社会人となるうえで、税についてもっと学び、知識を増やし、日本の社会問題についても深く考え、社会へ出る準備しておかなければいけません。「よりよい未来をつくるためにはどうすればいいのか。」「だれもが豊かな生活をおくるためには何が必要なのか。」を考えていきたいと思っています。

「消費税が10%なんて高すぎる」「消費税なんてなぜ払わないといけないんだ」などの言葉を周りの人やネット上でよく耳にしたりします。実際私もそのように思った時がありました。しかし、今私は消費税には感謝や素晴らしいといった良いイメージしかないです。

まだ私が消費税に対して良いイメージを持っていなかった時、ふと読んだ新聞のコラム欄で今までのイメージを吹き飛ばしてくれるものがありました。そこには、消費税に対して私と同じように思う女の子が、お母さんに「消費税がなければもっと沢山買い物が出来たのに。しかも次は10%に上げるなんて嫌だね。」と言いました。するとお母さんは「そんなこと言いません。あなたが唯一払える税金でしょ。少く社会に貢献したっていいじゃない。」と言いました。私はそこで、たしかに私はまだこれくらいしか社会に対して出来ていないのに何を言ってるんだ、ネットや周りの意見に流されてはならないぞ、と思いました。そしてさらに感謝のイメージをつける出来事があったのです。

私は自分の母にこの新聞のコラム欄の事と自分の気持ちの変化について話しました。すると母は「その通りよ。そして、このウチも税金に助けてもらったのよ。ちゃんと感謝しないとね。」と言われました。一体どういうことか聞くと、私には弟がいます。その弟は生まれながらに体が弱く、心臓にも穴が空いていました。何度も手術をしなければならない状況におちっていました。その度に何十万もかかります。もちろんそんなお金なんてありません。しかし、今、弟はとても元気に学校に通っています。それはこの国には治療費を負担してくれる制度があり、それを私達は利用しました。その負担するお金は皆が一生懸命働いて納めた税金によってまかなわれていました。母は未だにその話を大事そうに聞かせてくれます。私は新聞のコラム欄の事とこの弟の出来事の話を知り、消費税に限らず税に対しては感謝の思いが強いです。

今の私に何が出来るだろうか。そう自分に問いかけたりしました。しかし、今はコラム欄お母さんが言っていたように消費税を払うことしか出来ません。しかし、きっと多くの方が税金を納めることに対して余計な支出など、良くないイメージを持っていると思います。そこで私達のような税金の素晴らしい恩恵を受けた人が世の中のイメージを積極的に変えていく必要があると考えます。すぐには、無理だと思いますが、根気強くそのような意識を持ちながら頑張っていく、そして私が消費税以外にも納めることが出来る年齢になった日には弟の分の感謝を込めて払いたいと思います。

祖母の一週間

高槻市立五領中学校 3年 柳 心月

「行ってらっしゃい。」

私の祖母は月曜日から土曜日まで山手老人福祉センターに、日曜日は図書館に通っています。毎日休みなく大忙しです。

センターは、六十歳以上の市民が健康で明るい生活を送るために作られた交流の場です。センターでは、利用者さん同士の親睦を深められるクラブがあり、将棋、カラオケ、大正琴など好きなものに参加でき、祖母は週に四回、卓球クラブでの活動を楽しんでいます。運動した後は、大きなお風呂で汗を流して身体をきれいにできます。お風呂の後には、マッサージチェアが身体のコリをほぐしてくれます。また、人気歌手のDVDや映画の鑑賞、健康体操も人気です。そして、通いやすいように送迎バスも運行されていて、本当に至れり尽くせりです。これらの充実したサービスは、税金でまかなわれているため、祖母は全て無料で利用できます。このセンターがあることで、お年寄り皆が交流を深め、楽しく健康的に生活することができていると思います。

また祖母が特に喜んでいるのは、無料で利用できる市バスです。七十歳以上になると、市バス全路線に無料で乗れるICカード乗車券がもらえるのです。あるお年寄りの方がこう言ったそうです。

「市長さん、乗車券をもらいました。ありがとうございます。でも、無料だなんて申し訳なくて…。」

そこで市長さんはこう仰ったそうです。

「いいえ、家でじっとしておられるのではなく、バスでどンドン出かけてください。出かけるだけで体を動かすことになって健康に良いし、気も晴れます。外でお食事したりすることでもあれば、市の経済も回っていきます。もし、家でじっとしていたら、病気がちになるかもしれません。同じ使うなら、市は医療費の補助として使うよりも、無料の市バスの運営に使って、皆さんに健康でいて頂く方が嬉しいんです。」

祖母からその話を聞いた時に、市長さんの考え方と税金の使い方に感心し、家族皆で賛同しました。

その市バスで祖母は日曜日ごとに図書館に通っています。無料で本の貸し出しがあり、椅子に座って快適に本を読むことができます。この図書館も税金で作られ、運営されています。

これらの公共施設やサービスを利用できる環境が作られたことで、祖母の一週間はとても豊かになりました。税金は限られており貴重なものなので、その使い方はとても重要です。これからも税金の無駄使いをなくすことは勿論のこと、皆のために有意義に使ってほしいと思います。

「行ってきます。」

今日もセンターへ行く祖母の元気な声が響きました。

受け継がなければならないバトン

神戸市立御影中学校 3年 田代 佳菜

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

これは私が普段学校で何気なく使っている教科書に書かれていた言葉だ。私が使う教科書全てにこの文章が書かれていた。もし税金がなかったら。私たちは学校で勉強することさえできないのだろうか。

今から五年前、パキスタン出身の女性、マララ・ユスフザイさんがノーベル平和賞を受賞した。私が印象に残っている彼女の言葉を紹介したい。

「本とペンを手に取り、全世界の無学、貧困、テロに立ち向かいましょう。それこそ私たちにとって最も強力な武器だからです。一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変えられるのです。教育以外に解決策はありません。教育こそ最優先です。」

これは二〇一三年にマララさんが国連本部で話したスピーチの一部だ。彼女は激しい銃撃に耐えながらも、自由に学校に通うことができない日常を訴えてきた。同じ境遇にある子ども、特に女の子が教育を受ける権利と教育の大切さについて今も世界に訴え続けているという。そんな中、日本では中学校までを義務教育とされている。国民の三大義務の一つに「教育を受けさせる義務」があることから小中学校の教育に税金が使われているようだ。学校では教科書の他にも机や椅子、黒板や時計やロッカーまで、全てと言っても過言ではないほど身の回りのものが税金で賄われている。では教育に使われている税金の額は一体どのくらいになるのだろうか。今年度の予算を見てみるとなんと全体の約六パーセントを「文教及び科学振興」が占めており、総額は五兆六〇二五億円にもなる。これだけの期待や未来の希望を税金という形で私たちに託されていたと思うと感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。私たちからすると当たり前である日常生活は税金の上に成り立っているのだ。そしてそんな小さな幸せは、人によっては簡単には手にすることのできない大きな幸せだと分かった。

つい最近、今年の十月から消費税を十パーセントに引き上げることが決定した。正直最初は嫌だな、と少し不安に思ったが、税金が身近なところで私たちの日常を支えてくれていると知った今私の考えは真逆になった。まだ中学生である私たちが貢献できる税金は消費税くらいしかないが、これからは恩返しの気持ちで支払いたいと思う。そして、私が大人になれば様々な種類の税金を支払う場面があるだろう。その時には将来の日本を担う子どもたちに期待をこめて未来を託し、そのバトンを受け継いでいきたい。

安全な街づくりのために

川西市立清和台中学校 3年 杉田 莉映

先日、兵庫県が阪神地域での高潮被害を想定したハザードマップを公表した。そのマップを見て私は驚いた。私がよく映画を観に行く尼崎駅前が6mの高さまで浸水してしまうと予想されていたからだ。海も見えない街中なので、全くイメージできなかった。なじみのある場所が浸水してしまうかと思うと、とてもショックだった。今年の台風で神戸の街が浸水している映像を見ていたので、もし私が遊びに行っている時に高潮がきたらどうしようかと怖くなった。やはり災害は他人事ではないのだと強く実感した。調べてみると、神戸には遠隔操作・制御システムを搭載した水門が造られているということが分かった。また、尼崎にも各所に水門が設置されているということだった。水門や防波堤があるだけで被害は大きく減少する。しかし、これをもってしても大きな被害が想定されているのだ。

近年、台風や豪雨などの威力が拡大し、それによる被害も大きくなっている。その災害に伴って、様々な対策が計画されている。より強化された水門や防波堤などを造って、町を守ろうとしてくれている人がいるということに気づかされた。私が今、安心して毎日の生活を送ることができるのは、様々な危険から守られているからだ分かった。そして、それらは税金を使って行われているということも分かった。日頃、私たちが納めている税金は、人々が安全に暮らせるように使われている。正直、私は今まで税金を払わなければいけないことにあまり良い印象をもっていなかった。お小遣いからお菓子を買うにも、税金を払わないといけなくて嫌だなと思ったこともあった。そして、集められた税金が何に使われているのか意識したこともなかった。しかし、このことを知って、税金をきちんと払うことの大切さを知った。税を納めていくことは、自分達の生活を便利で安心できるものにするのにつながっていくのだと思う。

また、自分達だけでなく助けの必要な人にも税金は使われている。例えば、東北で起こった東日本大震災では、全国で通常の税にプラスする形で復興特別税を支払う制度ができた。このお金は、被災地で仮設住宅の設置や瓦礫の撤去、道路の整備などに使われた。直接現地に行かなくても税金で被災者を支えることができる。このおかげで、東北は今とてもきれいな姿に変わろうとしている。しかし、未だ仮設住宅に住む人がいて、完全に復興したとはいえない。税金を納めることで、被災地のためにもなると考えたいと思う。

最近消費税が8%から10%になるというニュースをよく見る。今まではどんどん高くなって嫌だなとばかり思っていた。でも今回で税金に対しての見方を少し変えることができた。税金があるからこそ、できていることがたくさんあったのだと感じた。これから先も、安心できる生活を送るために税金はちゃんと払っていききたい。

安心して暮らせる町

平群町立平群中学校3年 川上 紗和

この日は珍しく夕立が降った。部活の帰り、いつものように慣れた道を歩いていた。雨は上がり、アスファルトには水溜まりができていた。

「あっ。」

と思った瞬間、軽トラックが水溜まりを踏み、勢いよく跳ねてきた。白い靴下と、制服のスカートも汚れて切なくなった。もう少しで家に着くからと自分に言い聞かせ、泥のついたスニーカーを見ながら小走りで帰った。

いつからか、この道はアスファルトが剥がれて、ポコポコになっていた。自転車が通る度、ポコポコと音がる。夏の暑さで溶けたのか、バイクのスタンドでめり込んだ跡も数箇所あった。なんとかならないのかなあ。と思っていたけれど、見慣れた道なので、私は自然と避けて歩くようになっていた。

ある日、回覧板に道路の舗装工事の場所が記されていた。あの道だ。もう雨の日も、水溜まりを気にしないで歩けるようになる。そう思ったら嬉しくなった。きれいに舗装された道路は、車や自転車が側を通っても、とても静かになった。こんなにも違うものなんだと感心した。毎日歩いている道路が、税金によって造られている。

地方自治体に納められている住民税は、ゴミ収集や教育、福祉、道路や環境整備などの公共事業や施設などの行政サービスを行うために、徴収されている。私たちの安全を守る、警察や消防。快適な暮らしを守るための、ゴミ収集や処理も生活に欠かせないものだ。もし税金がなかったらどうなるのか。救急車が有料になり、医療費が自己負担になる。ゴミ収集も有料になる。公共サービスを受けるのに、全て費用を負担しなければならず、困ってしまうだろう。そうならないためにも、納められた税金は生活の様々なところで生かされている。

中学校までの通学路には公園や橋、図書館がある。来春には、図書館を統合した複合施設が、駅前にできる予定だ。さらに魅力ある町になるだろう。学校で使う机や椅子、黒板などの備品や教科書もそうだ。私たち中学生の一人あたり、年間百万円以上の税金が使われていることに驚いた。そして、この夏休みの間に、私の中学校の教室にも、いよいよエアコンが設置される。もう暑さに耐えることなく、快適な教室で授業を受けることができる。国民一人一人の大切な税金に支えられ、恵まれた環境にいることをとても感謝している。

税金は豊かで、安心して生活をするためには必要なものだ。私はまだ、税を納める立場ではないが、近い将来には納税するときがくるだろう。今は支えられている私から、誰かの支えになれるような、立派な国民の一人になりたい。

あっちゃんのピアノ

白浜町立富田中学校3年 榎本 菜々子

我が家には五年前から「あっちゃんのピアノ」と呼ばれる一台のピアノがある。あっちゃんとは私の母の兄にあたる。十五歳の時国が指定する難病にかかってしまった。そんな叔父がプレゼントしてくれたピアノ、だから「あっちゃんのピアノ」と呼んでいる。

叔父は病気のため働くことが出来ない。すなわち収入のない人生を送っている。それでも高価なピアノをなぜ私たちに贈ってくれたのか。祖母に話を聞いてみると、昔から貯めてきたお年玉やお小遣いを使ってくれたという。そしてさらに「障害年金」という国の税金制度が叔父の貯金では補えない分を援助した。この制度は、国に指定されている障害等級の一級、二級に値する難病を抱えている人達の収入を国が補償する、というものだ。障害年金を受けるには二十歳からの年金にきちんと加入していないといけない。この障害年金は叔父の生活費や通院代に使われるほか、本人の楽しみに使ってもいいらしい。

私は今も時折ピアノを弾く。ゆっくりとしたい時、気分を変えたいとき。そのあとは必ずピアノを磨く。叔父のことを考えながら磨く。「十五歳で難病にかかって、ずっと痛みや苦しみと戦って今では寝たきりとなってしまって、あっちゃんは幸せなのかなあ」私の心の中では答えは出ないけど、磨かれて輝くピアノを見た瞬間、「だけであっちゃん。あっちゃんにこんなにも素敵なピアノを買ってもらった私はとても幸せものだよ。健康である限り私はあっちゃんの分も何事も一生懸命頑張るよ」と思う。

「障害年金」は国民が払う税金から支払われている。私の父母も毎月支払っている「所得税」、買い物をした際に支払っている「消費税」、そのほか国民みんなが集めたお金の一部が叔父のような難病と戦っている人々に支払われ、ピアノへと形を変えたのだ。そう思うと税金のありがたさがよく分かる。

今は税金の恩恵を受ける機会が多い私だが、将来は税金を支払い、そしてその使い方が妥当なものなのかを考えられる自立した大人になりたいと思っている。今までは消費税が上がるという情報を耳にすると税金がどのようなものか、どのように使われるのかを知らずに不満を漏らしていた。しかし、今回この作文を書く機会を通して、身内が税にも助けてもらっていることを知ることが出来てよかった。そして税が誰かの力になるのならとても素敵だな、と思うようになった。

公的な支払いを拒否する人が増えてきている今、私が税への考えを深めることが出来たような機会が増えていけば、社会もなにかが変わってくるのではないだろうか。

これからは健康なからだであることに感謝しつつ、あっちゃんの分も頑張っていて、全力で今を生きていきたい。ありがとう、税金。ありがとう、あっちゃん。

命を救った感謝の税金

広島大学附属三原中学校 2年 高原 夕城斗

「えー!?!」

夏休みに入ってすぐの暑い日だった。母の携帯が鳴り、話をしている母の表情に明らかに異変を感じた。四国の母の実家からの連絡で、母の叔父さんが、小豆島の病院で危篤の状態、島では手術ができる医者がない為ドクターヘリで搬送されるとの事。大事だと感じた。以前、ドクターヘリについて調べた事がある。ヘリで運ばれるなんて、よほどの事態だ。待っている時間は長く感じ、数時間して連絡が来た。

「良かったー。助かったねー。」

母と祖母が喜び合っている様子が分かり、僕も安堵した。やがて嬉しさが沸いてきて、県は違えど、以前取材したドクターヘリが全国で活躍しているという事を身近に体験し、改めて感動を覚えた。

広島県のドクターヘリは、県内どこでも、三十分以内に到着、ヘリポートに医師が待機しているので、いち早く治療が受けられる。緊急時に出動するドクターヘリは、国から最大九割の補助で運用されており、通常は一度出動すると約五十万から百万円かかるところを救急車と同じで、特別なお金は払わなくて良い。年間三百件以上の出動件数で、今回の母の叔父さんのように多くの人の命が救われているのだ。僕は、ドクターヘリの医師、スタッフの方々に感謝すると共に、こうした素晴らしい医療サービスを誰でも受けられる日本のしくみにとてもありがたいと実感した。

今回の体験を通して、税を考えた時、とても身近で自分の周りで多くの税金の恩恵を受けている事に改めて気づいた。義務教育の教科書無償配布や通学で通る道路や公園、手を洗う水やトイレの上下水道の整備、ゴミの回収や処理、生活に欠かせないものが沢山だ。税金には様々な種類があるが、大人にならなくても納めているのが「消費税」だ。十月からは十パーセント引き上げられ、反対の声をニュースや新聞でも見聞きするが、僕は社会保障に全て使われるなら賛成だ。ドクターヘリだけ見ても国の負担は大きい。近年災害が発生する回数も増え、少子高齢化に歯止めをかけるためにも福祉への増税は、将来僕たちが安心して暮らすことのできる為に、しっかり使ってほしい。消費税は、医療・介護・子育て支援・年金の四つの社会保障費に使われる。又、食料や新聞代は「軽減税率制度」によって、八パーセントに据え置きだ。母が最近始めて喜んでいるスマホ決済もサービス満載で、盛り上がりを見せている。

将来、安心して暮らせる国づくりの為に、一人一人が税金の使い道を理解し、みんなで支え合っているという誇りを持って僕自身も税金を納めていきたい。政治にもきちんと関心を持ち、今後もより良く税金が使われることを望む。日本の税金に感謝、ますますの税金の活躍を見守っていききたいと思う。

「ええ、また税率上がるの。」

「10%なんてめっちゃ値段かわるよ。」

これは先日の家での会話です。私は税金を、取られる、という感覚で払っていました。自分で服を買ったり、家族と食材を買ったりする度に、もとの値段だったら、もっと安くすむのに、と思っていたのです。

新学期、真新しい教科書が配られました。裏側には、税金によって無償で支給されています、と書かれていました。当たり前だと慣れていて、本当はお金が必要なんだということを忘れていました。税金が使われているのは知っていたけど、いつもの自分の生活を考えると、登校している道路や信号、学校があること、勉強できること、部活のコンクールができること。休日によく行く図書館や公園も税金で運営されています。これらは税が無ければ気軽に、無料で、使えないものばかりです。私の母は、

「病院で小学校まででも無料で受診できるのは、とても助かるよ。だから薬ももらえてすぐ直せるんでしょ。いい制度だわ。」

と言っていました。つまり、税金の力がなければ、私達の生活は成り立つのが難しくなります。それが普通と感じてしまっているけど、そう思えるのは幸せだと思います。税金は日本の生活を守ってくれていると気づいたのです。

「みんなが納めている税金が世界のどこかで誰かの命を救っていることを知ってほしい」

ある日の新聞にこんな言葉がありました。そう言っていたのは、ギタリストで有名な、MIYAVI さんです。MIYAVI さんは、国連難民高等弁務官事務所の日本人初の親善大使として、平和の大切さを訴えています。私は、税金って日本国民のためだけに使われるのではなく、世界でも役立っているということを知り初めて聞き、気になったので調べてみました。日本は国の歳出の約 0.5% である、五〇八九億円を経済協力費としているそうです。世界で貧困や飢餓に苦しみ、国際社会が見過ごせないほどの深刻な状況の国や地域があります。その生活環境を改善するために、日本をはじめたくさんの国が経済援助を行い、自立を支援して、発展途上国の開発や福祉の向上に貢献しているそうです。税金は日本だけでなく世界をも支えている、縁の下の力持ちだと思いました。

私は今まで、税金をマイナスのイメージとしてしかとらえていませんでした。でも普段なくてはならないほど助けられていると気づきました。税金がなければ今無料で助かっている物もすべて有料になってしまいます。

私が今払える税金は消費税しかありません。それに日本や世界で自分で直接支援することは難しいです。だから、税金という形で、今自分が助けられているように、たくさんの人の力になれるなら、とても嬉しいです。

去年、税金について学んだ。税金は私たちの暮らしのさまざまなところで使われていることを知った。日本の社会全体を支える大切なお金だ。だから、この国に住む以上、税金を納めるということは当然の義務だということがわかった。

もうすぐ、消費税が十パーセントになる。増税に反対する声も当然あったが、もう決まったことだ。

私は増税される二パーセントが何に使われるのか調べてみた。少子高齢化という言葉は何年も前から耳にしている。高齢者の人口増加にともない、年金、医療、介護などの社会保障費にあてられる。少子化対策には、幼児・高等教育の無償化、保育士の増員に使われるらしい。そして、赤字国債の発行抑制に使われる。

赤字国債とはなんだろう。調べてみると、日本は一千兆円以上の借金を抱えた世界一の借金大国であるということがわかった。国民一人当たり八百万円以上の借金があるということになる。その借金を返済するために消費税が使われるというのだ。私たちの日々の生活は借金の上に成り立っているということを知って、とても驚いた。

借りたものは返さなくてはならない。それはわかるが、一千兆円という金額が余りにもばく大すぎて、どうすれば返せるのか想像がつかない。一般家庭では、収入に対して支出が上回らないように節約をする。しかし、国においてはそうはいかない。税収だけでは、とても今のような安心した暮らしはできないからだ。そう考えると、消費税が十パーセントになることはしかたがない。

よく、子供も消費税をはらっていると言うが、そのお金は親や大人にもらったお金で、自分で働いて得たお金ではない。だから、私は自分のことを納税者とは思っていない。

では、私たち中学生には何ができるだろうか。今は教育を受けることしかないと思う。勉強はもちろん、さまざまな知識や技術を身につけなければならない。そして、日本が抱えるさまざまな問題を解決するために、努力できる人間に成長しなければならない。

いずれ、私たちも大人になる。守られる側から守る側の人間にならないといけないのだ。そのために私たちは、税金を使ってもらっていることを忘れてはいけない。

二〇〇五年二月四日、私はこの世に生を受けた。体重は通常約半分の一四九八グラムの極低体重出生だった。しかも、重度の心臓疾患を抱えていた。さすがに0歳の頃の記憶は私にはない。しかし、当時周りにいた大人達の必死な想いや奮闘は、体に残る手術の痕がこれまでの大変さを今でも伝えている。

いつものように入院し、手術を受けた小学六年生の夏、母から、

「見てみなさい。」

と何気なく数枚の紙を手渡された。記された数字に私は言葉を失い、ただただ見つめていた。それは医療費の明細書だった。

生後四ヶ月の心臓手術に始まりこれまで私は何度も高度な治療にお世話になった。生命に直接関わるものもあれば、生活の質の向上を目的としたものもあった。今までにかかってきたであろう医療費が大きいことは、その明細書からでも容易に想像できたのだ。

そして、母は、しみじみとした口調でこう続けた。

「見て驚くでしょう。赤ちゃんの頃の方が今回よりすごかったよ。でも、あの時はどうしたら命を助けられるかで頭がいっぱいだった。随分といろいろな医療制度に助けられたの。おかげで今まで治療の選択肢を狭めることなくこれで、本当に良かった。」

母の言葉は、素直にすんと私の腹に落ちていった。お金がなければ失われる命。その事実はこの世界に確かにあるからだ。私は本当に恵まれていると思った。医療制度のありがたさに気づけた言葉だった。

私がこれまで受けてきた医療は、社会保障の公的サービスの一つである。そして、医療費を含む社会保障の財源は、国民が納めた大事な税金だ。明細書を手渡されたあの日、私は数による心強さを感じた。中学生となった今、私には、税金という社会の仕組みを、身を粉にして地道に皆で作りにあげている大人達の姿が浮かんでくる。どれほど多くの方々が私を支えていてくれたのかという事実、驚きと感謝の気持ちでいっぱいだ。

社会保障費は我が国の歳出トップである。私達が安心して生活していくために必要な公的サービスであるが故に増え続けている。一方で、少子高齢化によりその費用を負担する働き手は減っている。私が今あるのは、医療制度を維持してくれた納税者のおかげといっても過言ではない。これからも医療を必要とする人がサービスを受けられるように、今度は私が誰かのために恩返しをする番だ。

十四年間経っても規則正しく刻み続ける私の鼓動。今私が健康でここにいる確かな証拠だ。まだ見ぬ誰かに元気を与え、その人生に生き続けるような税金を、この先私も納めていきたい。

「税」という字は、「ぜい」だけでなく、「ちから」とも読みます。諸説は多々あるようですが、その中で、私が一番しっくりきたものは、「民の力によって生み出されるもの」という説です。そして、税は民（国民）の力によって生み出され、国や都市に集まり、そこからまた、国民全員の元へ、様々な物やサービスへと形を変えて、還元されてくるのです。

税を納めた金額は、給与明細や、レシート、納税通知書など、目にする機会が多いため、「支払ってばかりだ。」と、感じてしまうのかもしれないですが、日々、歩いている道も、通っている学校も、夜道を照らす街灯も、図書館も、生活にとっても役立つ様々なものやサービスとなって、私たちの元に届いているのです。

それだけでも、「税のちから」はすごいものだと思いますが、私の家族にとっては、さらにもっと、「税のちから」を体感する事になりました。

今年になり、小六の妹が二度も病気で入院し、小三の妹は骨折で長期通院になりました。本当であれば、高額な医療費が請求されるどころでしたが、「福岡市子ども医療費助成制度」のおかげで、負担が軽くなりました。税のちから、すなわち「民の力」に、私たち家族は助けられたのです。それ以前にも、妹は、生まれてすぐに、先天性の心臓病のために、たくさんの検査と、長い入院と、高度な技術の必要な手術をうけています。その時の医療費明細書を、母は今でも大切に保管しているというので見せてもらいました。なんと、約三百五十万円の医療費でした。この費用に関しては、育成医療制度を利用することができたそうです。

母の話によると、妹の病状は日ごとに悪くなり、体の成長を待つ猶予もなく、生後三ヶ月であわただしく手術が行われたそうです。手術後もなかなか容態が落ちつかず、とても不安な日々だった分、育成医療制度のおかげで、費用面の不安はかなり軽減されて、本当に税金のありがたさが身に染みたそうです。それまでは、「税金は取られるもの」と感じていたけれど、その時から、「税金は納めるべきもの」へと気持ちが変わったそうです。

税金で助けられたという感謝の気持ちを一生忘れない様に、今でも大切に、その医療明細書を保管しているとのことでした。そして私たち子供にも、納税の大切さを知ってもらい、大人になってしっかり働き、納税することで社会貢献して欲しいと願っていると聴かされました。

「税のちから」を知った私は、消費税10%も潔く受け入れようと思います。

「光優の席は、いつもクラスにあるからね。」この言葉に私は、生きる希望を持ち、前に進む事ができた。この言葉掛けをしてくれた先生は、地方公務員。税金からお給料が支払われている。小学二年に発病した「小児急性リンパ性白血病」医療保険と税金でまかなわれている「小児慢性特定疾病医療制度」を使い、小学二年から三年間治療をした。

しかし、小学六年の夏に再発。骨髄移植をした。当時の担任の先生は、院内学級に転校した私の席を、そのまま残し、戻ってくるのをずっと待っていてくれた。入院してすぐ、「卒業アルバムの写真を撮ろう。」と提案してくれた。「抗がん剤で髪の毛が抜ける前に」と、先生の心遣いが、とても嬉しかった。「卒業式に出たい」と夢を持たせてくれ、辛い治療に耐える力をくれた。卒業式の三日前に退院。夢を叶える事ができた。その喜びは、前に進む力になっている。しかし、中学一年の十月に再発。病院から「残された時間を家族と過ごす事も選択肢の一つです。」と言われた。しかし私は「ドナーさんから、つないでもらった命を無駄にしない」と心に誓った。

二度目の移植をするために入院、中学の担任の先生もまた、院内学級に転校した私の席を、そのまま残してくれ「光優の席はいつもクラスにあるからね。」と言ってくれた。

去年の八月、二度目の移植後で、体調が優れず、生死をさまよっていた。意識を失い、気がついたら酸素マスクなど、いろんな装置をつけられ、五分おきに血圧が測られていた。そんな中、小学六年の担任の先生から「光優の体調はどうですか。」と連絡があった。両親は卒業式に出たいと夢を持たせてくれた先生と面会したら何か変わるような気がしたようだ。病院に面会の許可を取り、久しぶりに先生と会った瞬間、涙があふれてきた。心も体も疲れきっていた私を、笑顔にしてくれた。元気になって退院した姿を見せたいと思った。私はまた、生きる希望をもらったのだ。

入院中、クラス替えがあっていたが、中学校の配慮で三階だった教室を一階に移動してくれ、各階に車椅子を置いてくれた。いつ戻ってきてもすぐ馴染めるようクラスメイトの顔写真つきの名簿を作ってくれた。担任の先生の熱い思いが、早く退院したい、中学校に戻りたいと私に生きる希望をくれた。体力のない私が、中学生活を送りやすいよう、先生方が、たくさん考え、実行してくれた。

「小児慢性特定疾病医療制度」もしこの医療費助成制度がなければ私は、治療を受ける事ができなかつただろう。医療保険と税金でまかなわれているこの制度のおかげで最善の治療ができ、今私は、生きている。今回、この作文を書くにあたり、気づかされた。私は、納税している人達に支えられて生きているのだ。闘病している子供達が、最善の治療を受けられるように、将来働いて納税する、そして私が受けた恩恵もしっかり返していきたい。

税の理解は知ることから始まる

福岡教育大学附属福岡中学校1年 宇野 誠洋

先日、福岡県の小川知事と福岡市の高島市長に直接お会いしてお話を伺う機会があった。お二人とも熱く語ってくださり、詳しい解説だった。私も質問をして、疑問を解消し、とても内容が濃い時間となった。

水の話になり、小川知事は建設中の小石原川ダムや、九州北部豪雨で活躍した寺内ダムについて話された。寺内ダムは当時稀にみる渇水状態だったが、九時間の間に降った二ヶ月分の量を溜め込み、下流に流れようとする流木も必死に食い止めたそうだ。小石原川ダムには、市民を守る防災機能や、安定した水供給機能に期待しているとのことだった。

高島市長は、政令指定都市の中で唯一一級河川を持たず、市外の筑後川に頼る福岡市の水行政について教えて下さった。福岡市は戦後渇水の経験があるため、節水教育を徹底して水の使用量を全体的に抑えたり、公共のトイレや公園の噴水などでは「再生水」を用いたり、配水管の水圧を調整して漏水を防いだり、たくさんの工夫と最新の技術を駆使しているらしい。そこで、海水の淡水化をもっと取り入れたらどうか、と私は提案してみた。すると、海水を淡水に変える日本最大の施設である「まみずピア」では、ろ過膜の交換費や電気代がとても高額で、川の水の倍以上のコストがかかるということだった。おまけにミネラルなどが含まれずあまり美味しくないため、川の水からの水道水と混ぜて味を調べて美味しくしていることなど、行政も悩みながらよく考えた上で舵取りをしている様子がよく分かった。本当にいろいろと大変だ。

市長や知事の話をお伺い、交通手段も、ダムも水道も、すべてのインフラは税によって作られたもので、私たちはそれがないと生きていけないと実感した。特に水は命に直結する。つまり税によって命をつなぐことができていると言っても過言ではないのだ。

私は今まで消費者側において、インフラが整っていることが当たり前だと思っていた。買い物をするたびに計算する消費税を、

「できれば払いたくないなあ。損だなあ。」

と思っていた。しかし、今回首長が目の前で熱く話して下さる姿を見て、自分も首長の立場に立って県や市を見渡したような気分になった。一市民の利用者側の立場からではなく、皆が汗水流して得たお金を「税」として皆のために大事に使う行政側の立場で感じる事ができた。すると自然と感謝の気持ちが芽生えてきた。税とは人間を支えてくれるものであり、守ってくれるものだ実感した。

会場から外に出ると、なんだか清々しい気分だった。今歩いている道路も、すべて税のおかげ。世界が変わって見えた。

まずは正しい知識を知り、それを実感することで、自分のものの見方や感じ方が変わる。それが社会の一員としての第一歩だ。これからは「社会のためになるんだ！」と清々しい気持ちで税を納めよう、そう心に決めた。

税金の精神

大分市立植田南中学校3年 倉光 杏奈

先日、猫を飼いたいという弟の希望で、今年の二月に開所したばかりの「おおいた動物愛護センター」に出かけた。「動物は可愛いけれど、家で飼えるかは、また別の問題。」いつもそう言っている父が、ペットショップではなく動物愛護センターに私達を連れて来た訳は、なんとなく想像がたった。

飼い主の事情で飼いきれなくなったり迷子になったペット、野良だった犬や猫達が、保健所や動物愛護センターに連れて来られるのは、獣医師として保健所で働いている友達のお母さんに、以前聞いたことがあった。そして、新たな飼い主が見つからない場合は殺処分されてしまうことも。

おおいた動物愛護センターは設備も新しく、清潔で開かれた施設だった。犬や猫を飼ったことのない私達でも立ち寄りやすい雰囲気、職員の方もわかりやすく丁寧に説明をしてくれ、私が最初に思い描いていた暗いイメージとは全く違っていた。弟は、動物を飼うことの責任の重さを感じたようだった。私は、ここがボランティアの助けを借りながら、大分県と大分市の共同運営＝税金でまかなわれている施設ということを知り、税金の立派な使い道の一つだと思った。しかし、一方で動物の殺処分に関わる費用にも税金が使われていると思うと、何とも言えない複雑な気持ちになった。命を助けることでなく、奪うことに税金を使うことに納得がいかなかった。

その後、私なりに調べてみたところ、広島県の神石高原町では、「ふるさと納税」の制度を殺処分ゼロに生かす全国初の取り組みがされていることが分かった。ふるさと納税は、「生まれ育ったふるさとに貢献できる制度」「自分の意思で応援したい自治体を選ぶことができる制度」で、自分の生まれ故郷に限らず、どの自治体にでもふるさと納税を行うことができる。

神石高原町では、保護された犬を譲渡するだけでなく、ボランティア団体と協力して災害救助犬やセラピー犬としての育成も行っているそうだ。実際、五年前の広島土砂災害では、育成された災害救助犬が出動し、行方不明者一名を発見することができた。

私の祖父母も広島に住んでおり、土砂災害の時は本当に心配したのを覚えている。その時、レスキュー隊と共に活躍した災害救助犬が、元保護犬だったことも大きなニュースになった。

動物に興味のない人は、大切な税金が犬猫に使われることを快く思わないかもしれない。けれど、その考えもまた、人間都合の勝手のようにも思える。人と動物がより良く共存できる社会をつくるために使われる税金があってもいいと思う。正しく使われた税金なら、巡り巡って必ず自分が救われることがあるはずだ。「情けは人のためならず」。それが税金の精神なのだと私は思う。

伝統を支える税金

学校法人都築教育学園 鹿児島第一中学校1年 南 結衣

エメラルドグリーンの海、白い砂浜。そんな美しい奄美大島で私の祖父母は「伝統工芸士」をしている。世界三大織物の一つである大島紬は近年製造数が激減しているために、祖父母は奄美が誇る伝統文化にぜひ触れて欲しいという思いをこめて多くの方々が工場見学、制作工程の一部を体験することができる『夢織りの郷』を開設した。今年も帰省した私はいつものように手伝いをした。

県内外から訪れる方々に一番人気があるのは『泥染め体験』だ。奄美の強い日差しの下何家族もの方が泥まみれになり体験される姿があった。泥に手を入れていた子供にそっと後ろから手を添えているお父さんの光景に微笑ましさを感じた。実際には輪ゴムで模様を付けた白い布をテーチ木（車輪梅）のしると鉄分を多く含んだ泥に、交互に一〇〇回浸ける作業を繰り返すと黒褐色に染まっていくこと。三十から四十ある製造過程は完成まで半年以上かかり、この間も職人の手から手へ渡り最後の織る工程まですべてが手作業であることを観光客の方に説明すると驚いていた。体験された方は素朴な島人の人柄に触れ口々に「また来ますね」と言って帰られた。

夕飯時、黒糖焼酎を飲みながら祖父が話してくれた。大島紬に携わる職人が高齢化し年金をもらいながら続けている人が多いこと。製造数が最盛期には二十八万反あったものが現在では七十分の一までに減っていて、年々右肩下がりになっていることなど。本当に厳しいから何とかしたいと話した。祖父が本音を漏らした。「伝統工芸品を受け継ぐ担い手がない。やってみたいという若者を育成する助成金があるから感謝しているけど、さらに手厚いといいな」と呟いた。

現在、大島紬の作成に携わる指導者及び技術取得希望者に対して『伝統産業支援補助金』があるが、二年間の受給期間内も補助金だけでは生活が厳しい現状だと聞いた。祖父も七十三歳だ。いつまで仕事ができるか心配だが担い手を増やしたいと張り切っている。

さんご礁と白い砂浜や赤と黄色のハイビスカスが咲き誇る奄美に足を運んでほしいと来島者誘致のために様々なプログラム支援を目的とした事業や、島民の暮らす地域が豊かに潤うように『離島航空割引制度』等もある。これらはすべて税金が使われているのである。「本当にありがたいし、島民は感謝しているよ」と祖父が言った。

約六十二兆五千億円もの税金。一万円札で約六二五〇トンの重さになる。大島紬は一五〇〇年の歴史がある織物だ。絶対に後世に残すべき逸級品である。祖父が本音を漏らしたように世界へ誇れる奄美大島紬を、日本独特の文化をいつまでも受け継ぐ担い手を、さらに税金の力によって支えてほしいと思う。

私たち国民全員が税金の恩恵をうけて生活している。税金の役割とありがたさを深く感じた夏だった。

税金で明るい未来への一歩を

豊見城市立豊見城中学校3年 名護 苺奈

近年、消費税の増税により、国民の生活に影響を及ぼしている。その背景には、少子高齢化に伴う年金の不足や福祉の充実がある。今年七月に行われた参議院選挙でも争点の一つとなったが、私の母や姉達が「消費税が上がっても国会議員の給料が上がるだけだ」と不満を漏らしているのをよく耳にする。

そこで、消費税の増税前と増税後で、国の支出の内訳はどのように変わったか調べることにした。すると、消費税が五パーセントから八パーセントに引き上げられる前の二〇一三年と八パーセントに引き上げられた後の二〇一七年を比較して、年金に関する歳出が約十パーセントから約十二パーセントへ、およそ二パーセント上がっていた。また、高齢者の生活支援や社会福祉などその他の社会保障関係費が全体的に上がっていた。変化がなかった点として、沖縄に関する歳出が増税前後どちらも多くあった。

消費税の増税前と増税後では、高齢者に対する生活支援や社会福祉に関する支出が増えたことが分かった。今年十月に消費税が八パーセントから十パーセントに引き上げられても同様の変化が期待できる。今年の歳出予算のうち、年金給付費や少子化対策費などの社会保障関係費が約三十三パーセントと、多くの割合をしめる予定だ。さらに、過去の歳出を調べて、沖縄に係る歳出も多くあることが分かり、国民から集められた税金は正しく使われ、私たちの生活に役立てられているのではないかと思った。

今回、消費税の増税前と増税後の過去のデータを比較し、今後の推測をしてみ、私たちが抱いているような不満は、あくまで憶測にすぎないと感じた。政治家の不祥事が最近多く報じられるため、政府に対し不信感が生まれてしまっているのかもしれない。しかし、我々が思っている以上に、政府は日本を大切に考え、明るい未来をつくるために増税という道をとっているのではないかと私は思う。たとえ今がどんなに楽でも、その先に大きな不幸が待っているのは、後悔しながら暗い未来を歩むことになってしまう。それよりは、今少しの苦勞をして明るい未来を掴んだほうが、日本のためになるのではないか。私は今中学三年生なので、約三年後には選挙権が与えられる。それまでに日本の現状に対し理解を深め、正しい選択をする力を身につけたい。また、税金のおかげで生活が豊かになっていることに感謝したい。

地元が好きだと言えるとき

東川町立東川中学校3年 榊原 菫

私は、自分の住む町が好きだ。私が東川町に引越してきて一年半がたった。引越してきたばかりの頃は、新しい町での生活に少し不安を抱いていた。しかし、東川町はすぐに、毎日安心して暮らせて魅力的な、私の大切な場所となった。

東川町の良いところはたくさんあるが、個人的に魅力を感じる場所を三つ紹介する。

一つ目は、水がおいしいところだ。東川町は上水道がない町で、地下水を生活用水として使っている。地下水は、大雪山に蓄えられた雪解け水が長い年月をかけて東川町に運ばれてきたものだ。そのおいしい水でつくった野菜やお米・豆腐ももちろんおいしい。

二つ目は、「せんとぴゅあⅠ・Ⅱ」という複合交流施設があるところだ。せんとぴゅあⅡは昨年七月にオープンし、図書スペースを中心とした、東川の文化と情報を発信する施設である。冷房が効いていて夏でも涼しく、フリーWiFiもあるのでお気に入りの場所だ。また、学習室があり、そこでは他の利用者の人が黙々と勉強しているため、嫌でも勉強しようという気になる。受験生にはとてもありがたい環境で、私もこれから利用する機会が多くなると思う。

三つ目は、国際交流が盛んなところだ。「東川町立東川日本語学校」が公立の日本語学校としては全国で初めて設置されている。そのため日本語学校に通う多くの留学生が東川町に住んでいる。帰宅している時に見かけたり、コンビニやスーパーのアルバイトで接客してもらったりすることが多い。また、中学校の授業で交流する機会もある。外国人の方々と同じ町に暮らすことによって、外国の方と接する抵抗感がなくなったり、文化交流は興味深く、おもしろい。

改めて考えると、私が東川町に感じる三つの魅力は、税金によって支えられていることがわかる。おいしい水は「生活飲用水管理事業」、せんとぴゅあⅠ・Ⅱは「せんとぴゅあ文化振興事業」、日本語学校など国際交流には「国際観光誘致事業」・「外国人留学生支援事業」として税金が使われている。また、私が毎日安心して暮らせるのは、キレイな街並みが維持されていたり、子どもの医療費が全額助成されていたりしているからである。

このように、税金は、私達が安心してより豊かな生活を送ることができるよう、ありとあらゆる場所で使われている。

「自分の住む町が好きだ」

そう言える人の輪が広がっていった時、税金は人々にとってかけがえのないものになっているはずだ。

みんなをつなげる税

藤里町立藤里中学校3年 菊池 愛奈

どうやら、「税」は大人だけが考えるものではないようです。学校で、無償の教科書について、自動車や住宅、お酒やたばこなど、生活の隅々まで税が浸透していることを学びました。それでも、「まだ働いていないし、税の話はまだまだ先」と他人事のように思っていた私でした。

私の父は消防士です。火災、救急搬送の出動は勿論ですが、火災防止の呼びかけ、消火栓の点検、日々の訓練など、顔にも口にも出ませんが、とても重く大変そうな仕事です。私の学校の避難訓練で指導してくれた時は、格好良くも誇らしくも思いました。

ある日、ふと父のお給料はどこから出ているのだろうと疑問に思いました。一つでも多くの命を救うために、生活を守るために一秒一秒に命をかける消防士。緊急時に駆けつけた家の人々が代価を支払う光景なんて見たことも聞いたこともない……。私は直接父に尋ねました。「税金の中から支払われているんだよ」という、その答えに私はとても驚きました。税は、「みんな」の生活を守るものであり、個人を守るものではないはず。そこからお給料が出ていたとは……。

でも、父が「国民みんなの生活」「一つでも多くの命」のために働いていることを考えると不思議なくらい納得できたのです。急な事態が起きた時、誰が財布の心配などするのでしょうか。どこの消防士さんが、助ける命を選ぶのでしょうか——。何をすることもお金はかかります。失いかけた命や生活を守るとなれば、そこには計り知れない額のお金が動くでしょう。でも、どんなに大きな額でも、みんなで協力したら賄うことができるのです。

今までは、私が稼いでいるわけでもないのに、それでも限られたお小遣いの中から商品価格「+α」が出ていくのが嫌でした。でも、教科書、学校、舗装路、ゴミ収集、医療費など、快適な私の生活の全ては税に守られているのだと知りました。言い換えれば、「みんな」に守ってもらっているということです。

今の私は、守る側というよりも、守られている側です。ですから、守ってもらってきた分、やがては守る側として貢献できる大人になりたいです。それまでに私ができることは、もっと税について知ること。日々の生活で、「税」を見て、触れ、心で感じること。そして、それを、「税の話はまだまだ先」と思っている、「以前の私」のようなたくさんの人に伝えていくことだと思いました。

「税」は大人だけが考えるものではないのです。産声をあげた日、いや、お母さんのおなかに命を受けた時から私を守ってくれている「税」。だからこそ、私はこれからの日本を担う者の一人なのだという意識が芽生えた今、真剣に「みんな」とのつながりを見つめながら、税に向き合っていきたいと思いました。

「皆さん東京オリンピック・パラリンピック楽しみですよ。」私もとても楽しみです。特に水泳競技の日本選手の活躍を期待しています。先日行われたチケットの抽選では、開会式と閉会式、水泳の決勝を申し込みましたが、残念ながら落選してしまいました。

オリンピックの開催には、多額の費用が掛かります。その費用の総額は、一兆三千五百億円と言われており、東京都と国の税金から支払われるそうです。オリンピックが多額の税金を使って開催されることには、一部で税金の無駄使いと言われていますが、私には、意味があることだと思います。

東京オリンピックの開催が決まり、日本には様々な変化が起こりました。最も分かりやすい変化は、外国人観光客の増加です。二〇一三年に初めて一千万人を超えましたが、二〇一六年には二千四百万人となりました。この様に、世界中から日本が注目されたことで、観光産業の発展につながりました。

建設業界では、オリンピック関連施設やホテル、道路や鉄道などの整備により、景気の回復や私たちの生活が便利になりました。

そして、家庭で眠っている使わなくなった携帯電話などから金属を取り出し、メダルを作成する取り組みも行われております。オリンピックによって、リサイクルシステムが定着することで、日本は資源大国となる可能性も出てくるそうです。

福祉でも良い影響が考えられます。高齢化社会になってもみんなが活力を失わずに健康に生きていくためには、スポーツをもっと生活に浸透させる必要があります。オリンピックを通して、多くの人々がスポーツに興味を持ち実践することで、健康寿命を延ばすことができ、病気や介護への社会保障の軽減につながります。また、自国でパラリンピックを開催することにより、障がい者への理解が進むことも期待されています。

オリンピックの開催は、人々の意識を変え日本の未来をより良い方向へ導く可能性を秘めていると思います。大会の開催に必要な税金は日本の未来への投資と考えるべきだと思います。そう考えると、とても素晴らしい投資ではないでしょうか。誰もが安心して暮らせる社会、私たちの未来を作るために必要なのが税金だと思います。

今年の十月から、消費税が十パーセントに引き上げられ、社会保障制度の安定化のために使われるそうです。税金は医療や教育、道路などの整備、オリンピックのような大イベントなどにも使われます。税金は私たちの生活に必要なお金です。無駄使いせず必要な事に使ってもらいたいと思います。そのためにも、私たち一人ひとりが税金の使い道やその効果などに注目し、もっと関心を持つ必要があるのではないのでしょうか。

祖母の願い

世田谷区立緑丘中学校3年 塩見 悠也

僕は、税金といえば消費税ぐらいしか思い浮かばないように、税金について深く考えた事はありませんでした。その考えが変わったきっかけが、税金によって祖母の願いが叶えられた事でした。三年前の春に、祖父が事故にあい、大ケガをして生死をさまよいました。少しずつ回復し、高次脳機能障害の診断を受けましたが、ゆっくり生活が出来る様にまで回復しました。自宅に戻って、毎日散歩でゆっくり歩きながら、リハビリをしています。ところが、祖父の家から公園までの間に、イスが一つしかなく、祖父は時折、冷たく固い石に腰かけながら、散歩をしているのでした。真冬に冷たい石に腰かけている姿を見た祖母が、イスがあればいいのにねっといつも話していました。

ある日祖母が、勇気を出して市役所をお願いしてみようと思う。と紙に図を書き出しました。見取図を書き、ここにイスが出来ればどれだけの人が助かるかを、切実に文章にしていきました。ついに祖母は市役所へ提出しました。祖母の小さな願いは叶うことはないのではないかと僕は思っていました。

ところがある日、祖母から電話があり「市役所がイスを設置してくれる事になったよ。私の夢が叶ったんだよ。ありがたいありがたい」と、泣いていました。僕もじんわりと涙が出て来ました。そのイスは、皆様から集められた税金で設置して下さったという事を聞いて、税金はこんな優しい事に使われるのだと感動を覚えました。信じられない気持ちでした。

祖母と祖父は、その日から毎日イスに座りながら、散歩をしています。そのイスは、次々と人が座り、まるでずっと前からそこにあっただかの様にさえ感じる程、便利に使われています。税金は、いつか自分を助けてくれるし、僕も誰かを助けているのですね。僕たちの授業料や学校、体育館なども、全て税金で作られている事にも、感謝しなければと思いました。世の中の困っている人々を救い、僕達が当り前に使っている施設も、税金を納めている皆の財産です。これからも、税金をきちんと納めて、誰かの力になればとても幸せな事です。僕の祖母のような願いを持つ人が救われていける様に、そして対応して考えてくれた行政の方々に感謝して、忘れずに生きていこうと思いました。

お正月には、祖父と孫五人で、そのイスに座って写真を何枚も撮りました。その写真はみんな笑顔でした。何故なら、そのイスが幸せのイスだからです。この事を忘れずに、生きていきたいと思いました。

祖父、祖母、高齢者の方々、若い人、子供みんながそのイスを使って、一息つけますように、心からの感謝を忘れずに生きていきたいと思いました。そのイスに座って、ほほえむ祖父の顔が、僕は大好きです。

税の重要性とは

大野市陽明中学校1年 芦原 万里奈

「あなたは税の重要性をよく理解し……。」私は昨年、税についての書道の部で知事賞に選ばれ、その表彰式でこの言葉をかけられながら賞状を受け取りました。正直、私は税の重要性を考えながら字を書いてはいませんでした。なので、その言葉は私の心をドキッとさせました。

税について何も知らないのは恥ずかしい。そこで私は、税について調べてみようと思いました。私を知っている税といえば消費税くらいで、母に聞くと、平成元年から始まり、その当時は三パーセントだったこと、そして今年からは十パーセントに上がることが分かりました。私は、物を買う時に値段が高くなるので、消費税に対して良いイメージを持っていませんでした。このように、私たち中学生でも納める消費税や大人になったら納めるいろいろな税金は、いったい何のために納め何に使われているのか知りたくなりました。調べてみると、税の使われ方は私が想像していたよりも身近なことに使われていました。

例えば、学校で使っている教科書やパソコン、体育の用具なども税金が使われています。また、家で当たり前のように使っている水も上下水道の整備が税金を使って行われています。そして、風邪をひいたり、怪我をして病院で手当てをしてもらう時にかかる医療費もまた税金が使われています。当たり前のように生活ができるのは税金のおかげだと分かりました。

更に調べてみると、震災が起こった時の国からの支援にも税金が使われていることが分かりました。地震や豪雨などで大変な思いをしている被災地や被災者の方々に、少しでも早く元の生活が送れるように、道路の整備や生活支援が行われ、自衛隊や警察の復旧活動の費用も税金から出されていました。税金は自分たちの生活に加え、復興支援にも使われている。そう考えると、税金は私たちにとってなくてはならないものに思えてきました。

税金、そのほとんどは私たちのために使われているもの。私は調べていくうちに税金へのイメージが変わっていっただけでなく、今ある日常に感謝しようと思えてきました。税を納めているからこそできている生活があるということ。ただ値段が高くなるからという理由だけで悪いイメージを持つてはいけない。まずは税を知ることが大切だと分かりました。

税の重要性とは、私や地域の人々の生活を過ごしやすくすること、災害で苦しんでいる人々への復興支援になること、そして税を納める人間として、きちんと税について考え、税について理解することだと私は思います。

税とは、今ある当たり前の日常を守ってくれているもの。そのことを私はたくさんの人に伝えていきたいです。

循環する支え合いの精神

豊橋市立中部中学校3年 山本 みどり

「税」。この言葉を耳にすると、いつも思い出す出来事がある。

始まりは授業中に一人の子が発した、「税金さえなければなあ。」というつぶやきだった。目当てのゲームソフトを買うために貯金をしてきたが、あと数十円足りないのだという。似たような経験は私にもある。初めてもらったお小遣いで買い物をしようとしたとき、消費税分の金額が払えずに悔しい思いをした。周りからも同情する声が多く聞かれ、「税金なんて払うだけ無駄。」と言い出す子まで現れた。私は心の中で深くうなずいていた。すると、先生がクラスの皆に問いかけた。

「あなたたちがこんなに嫌がっている税金を支払う目的は、どこにあるのかな。」誰も答えることができなかった。私も同じだったので、支払うときの憂鬱さばかりに目を向けてきた自分に、少し恥ずかしくなった。私の他にも、一方的な見方しかしないまま税に対して不満を抱いている人は少なくないように感じる。

私たちは様々な公共サービスを受けている。教育、医療、介護、公衆衛生、公共交通。全て暮らしの上で必要不可欠なものだ。そんな公共サービスを利用できるのは、税のはたらきがあるからこそだ。

しかし、社会では租税回避や脱税など、税を支払わないという問題が後を絶たない。二〇一六年に公開されたパナマ文書も、その一例だ。人々の根底にある「税金なんて払うだけ無駄。」という意識が、原因の一つではないだろうか。気持ちよく納税するため、税が自分に役立っていると実感できる工夫が重要だ。世の中には子供をもたない人も、裕福で医療費の補助が必要ない人もいる。教育や医療へ税金を充てても、直接の利益はないかもしれない。どんな人にとっても不利益が出ないよう、今すぐ税制を変更することは難しいが、それぞれの考え方を考えることはいつでも可能だ。納税の目的を、異なる視点から捉えるのだ。「今」の自分のためではなく、「未来」の自分のために納税する。人間の身体は、年を重ねるにつれ衰えていく。病院に通い、介護を受ける日は必ず来る。いくら裕福でも、医師や介護者など支えとなる人がいなければ生きられなくなる。納税を通して若い世代の教育を支えることは、自分自身の将来の支援者を増やすことにもつながっているのだ。払った税金は、形を変えて私たちの元へ戻ってくる。捉え方の転換一つで、「税金なんて払うだけ無駄。」という気持ちも消えていくだろう。

あの出来事から五年。私が税に関心をもつきっかけを与えてくれた。先生や仲間と学校で学んでいたからこそできた体験だ。もし当時の自分に会えるのなら、こう伝えたい。「税を支払う目的は、支え合いの精神を循環させること。顔を知らないたくさんの方が、学びを支えてくれているんだよ。」と。

大切な教科書

大阪市立阪南中学校3年 庄司 有杜

僕の母は小学校の教師をしています。母は毎年子どもたちに必ず話す出来事があるそうです。それは昔、室戸台風という大変な被害をもたらした大型台風にまつわる話です。

まさに台風が接近してきた朝、子どもたちの登校時でした。何十人かが校舎にいました。避難警報が出て、校舎からいったんは逃げたのですが、何人かの子どもが教科書を取りに戻ったそうです。その時校舎が木造だったこともあり、台風で倒壊し、逃げ遅れた子どもたちの尊い命が奪われました。

僕は、なぜ教科書を取りに戻ったのか、その話を聞いた時とても不思議に思いました。教科書より、命の方が大事だろう、と。母にこの疑問を尋ねました。この話をするとどの子どもたちも同じような質問をしてくるそうです。「昔、教科書は無償じゃなかったから、高くても買われへんお家もあつてん。だから、近所の子や兄弟でお互いに譲り合って使って大事にしていたらしいわ。今の子どもたちが教科書を大事にしてくれるように毎年、この話をしてるねん。」と母が話してくれました。

僕は先日学校で、税金について学びました。僕たちが学校で使っている教科書だけでなく、机・イス・光熱費等は、公費負担教育費として、税金が使われています。机もイスもきちんと人数分用意されたり、エアコンが設置されたりして、真夏の暑い時、真冬の寒い時も僕らは快適に学習する事ができています。もし、税金がなければどうなるのだろうか。学校で勉強するにも、一人ひとり高額な費用がかかってくるに違いありません。また、学校だけでなく、町では安全に歩けなかったり、健康が脅かされていたりしているのではないのでしょうか。今、僕たちには、住みやすい環境が整っています。先人たちが税金を納めてくれていたおかげで、住みよい社会が作られてきたのだと思いました。

そして、僕の家ではどのような税金を納めているのか気になり、父に聞いてみました。すると住民税・所得税・固定資産税等、様々な税金が納められている事を知りました。僕は父に「大人になったら、税金を払うねんなあ。」と言うと、「普段買い物で払ってる消費税も税金やけどな。」と教わりました。十月から消費税は十パーセントになると聞いて、あまり買い物ができなくなるな、とっていました。しかし、僕は税と暮らしの関わりを学び、財源の大切さを知りました。税金によって、みんなが安全に健康に過ごし、日々の生活が困る人がいなくなるような社会になって欲しいと思います。また僕自身も社会の一員として、税金について考えていきたいです。

優しいお金

広島市立城南中学校3年 三井 絵梨奈

税金とは、優しいお金であると思う。みんなの優しい気持ちが詰まっているお金、感謝のお金、人々を救うお金とも言えるだろう。

私が税金のありがたさ、すごさを実感したのは災害の時だった。去年の西日本豪雨では広島市のホームページによると、豪雨災害関連分の広島市の補正予算は、二百九十二億千四百八十七万円であった。びっくりするほど莫大な金額だ。主な使途として、道路や橋りょうの復旧があった。私の家は被害が無かったが、道が寸断されたため、近所のスーパーやコンビニエンスストアに食料が届かなくなり、不安な日々を過ごした。皆さんの税金が私の住む広島の多くの人々の暮らしを助けてくれた。心から感謝している。

私自身が身近に感じた災害もある。幼稚園の年長の時に、私は神奈川県に住んでいて、東日本大震災を経験した。何度も大きく揺れて恐怖だった。一生に一度の幼稚園の卒園式も、安全のために大幅に時間を縮小し、あっけなく終わった。私が住んでいた相模原市は、岩手県大船渡市の交流都市だったので、相模原市は大船渡市に届ける物資を募っていた。私は母と、家にあったティッシュペーパーなどを届けに行った記憶がある。母は、相模原市が私たちの代わりにトラックで物資を届けてくれるのはありがたいと言っていた。

その後、私は小学校三年生の時に、父の転勤で広島市に引っ越してきた。その翌年の八月二十日に、広島市に土砂災害が起こり、私が住む緑井は被災地となった。私の家は運良く被害が無かったが、うちから小学校への通学路は泥だらけで、いつもとは全く違う光景になってしまった。私が通っていた緑井小学校は避難所になった。母は週に数回、ボランティアで泥のかきだしに行っていたが、近くで自衛隊の方々が、行方不明の方を探していたと言っていた。猛暑の中、自衛隊の方々は熱心に丁寧に泥をよけて探していたそうだ。本当に頭が下がると母は言っていた。もちろん自衛隊の方々の給料は税金から出ている。もし自衛隊や消防、警察の方々がいなかったら一体どうなっていたか、想像がつかない。私たちは、いつ「弱者」になるかもしれない。そもそも人間は、一人では生きていけない。みんなでお金を出しあい、困っている人を助ける、または、私たちのために働いてくれている方々にお金を支払うという仕組みは素晴らしいと思う。私が店で物を買うときには消費税を支払うが、この消費税も、必要とする誰かに届けばいいなと思いながら支払っている。

私は現在、広島市立の中学校に通っていて、皆さんの税金で教育をしてもらっている。私も将来、しっかりと税金を納め、困っている人たちの役に立ちたい。

税金は、みんなの優しさであふれている。税金を支払ってくれている全員の方に、心からありがとうと伝えたい。

介護で知った税金

松山市立雄新中学校3年 久井 響介

それは一本の電話から始まった。祖母が急に倒れ意識がないという救急隊員からの電話だった。休日でゆっくりと過ごしていた僕たちは、突然の知らせに動揺するばかりだった。母は混乱しながらも急いで祖母がいる病院へと向かった。後に母からの電話で、祖母は脳梗塞で倒れたが幸い処置が早かったため命に別条はなかった。しかしここから我が家の祖母の介護生活が始まることとなる。

今まで祖母はとても元気で、いつも僕たち家族の方が世話されていた。しかし、祖母が倒れたことで急に立場が逆転した。倒れてから一週間、ねたきりで点滴だけだった祖母は、やわらかいごはんから食事再開となった。しかし、身体の左半分がまひしている祖母はごはんをまともに口に運べない。母が中心になって病院の食事時間に食事の介助に行ったり洗濯物を交換したりと僕たちの生活に介護の文字が見えかくれしてきた。約二週間後、リハビリ中心の病院に転院し、今五か月がたとうとしている。今度は祖母が自宅に一人で生活するための準備をしなくてはならない。祖母の家に手すり、段差をなくすステップ、介護用ベッドや車いすなどをそろえていく。母一人では、祖母を迎える準備も大変で僕たち家族みんなが祖母の家の中を片づけていった。退院後、一人で暮らす祖母を近くにすむ僕たち家族で助けていくつもりだ。

祖母が倒れてからこの五か月間、僕たちがどれだけ多くの公的サービスに助けてもらったかを考えた。祖母が倒れた時に連絡をくれた救急隊員や救急車、病院の医師、看護師、介護士、リハビリの療法士、社会福祉士、介護支援専門員、福祉用具の専門員。デイケアサービス。そのすべてのサービスが無料だったり、たった1割の負担で受けることが出来た。家族みんなが健康なときには気づかないしかしどんな人にも必要な社会保障、それを支えるのは、国民一人一人が払っている税金だ。今回、祖母を含む僕たち家族はその税金に助けてもらった。いや、今回のことを通して、学校、図書館、病院、と税金で支えられている物の地図が一気に見えてきた。

日本では少子高齢化がどんどん加速してきている。このままだと二千五十年には一人の高齢者をほぼ一人の働き手が支えなくてはならない。もし一人っ子の母が一人で祖母を介護しなければならないとしたら、母はすぐに倒れてしまうだろう。身近な出来事で単純にそう考えると、どれだけ税金を納めること、使い道を考えることが大切かを実感する。祖母が僕たちを支えてくれ、今度は僕たちが祖母を支える。そのまま社会に置き換えると、僕が税金を払い次の日本を支えるのも当然だ。この税金を通した支え合いのサイクルを守るため、しっかりと税金を払い、日本の税金について真剣に考え、行動していくことがこれから僕たち若者の義務だ。

「えーっ。盲腸で百五十万円。風邪で四万円!。」

今夏、私は家族旅行でシンガポールへ行った。旅行が決まった瞬間から心が躍っていた。その時、両親が「絶対に海外旅行保険には入っておかないとね。」と話していた。何でも海外で万が一の怪我、病気、事故では前に書いたような日本では考えられないほど高額な費用がかかるらしい。

そこで私は世界における医療保険について調べてみた。まず、日本は国民皆保険制度といい、すべての国民は何らかの健康保険に加入しなければならないことになっている。どの保険に加入するかは自営業なのか、会社員なのか等職業によって決まっている。この制度は税金と個人や会社が納める社会保険料を財源としている。この制度のおかげで私たちは医療費の自己負担が少なく、しかもいつでも自由に好きな医療機関で受診することができる。

一方、海外に目を向けると各国で様々な制度がある。その中で極端な例がアメリカだ。先進国であるが、全ての国民を対象とした公的な医療保険制度がない。このため、高額な医療保険料や医療費を払うことができず、必要な医療も受けられない人が多くいる。極端な話、お金がなければ命や健康をあきらめるしかないのだ。命や健康がお金で決まるなんて理不尽だ。今の私は少しでも体調が悪くなるといつでも病院に行き必要な医療を安心して受けることができる。そして、それが当然のこのように思っていた。しかし、これは当たり前なことではなかったのだ。

私は、毎日の生活が税金で支えられていることは分かっているつもりであったが、今回の旅行でそれを再認識した。これは医療費だけではない。旅行前に父が言った。「シンガポールの水道水はそのまま飲めるけど、他の国で『この水は飲めません』とホテルの洗面台に書いてあるのを見たことがあるよ。だから、外国では飲み水は買うのが当たり前なんだよ。」。蛇口からいつでも安全な水が出ること、そのことにより安心して衛生的な生活ができることが特別なことであることに衝撃を受けた。熊本地震の時の不自由だった日々を経験して、インフラの整備をはじめ、何気ない日常は税金で支えられていることに気付いたことを思い出した。

高齢化や医療の発達により、年々医療費は増加している。それを支える税金と保険料には限りがある。そこでまず私は健康に気を付けて生活をしたい。健康でいるだけで働いていない自分でも国の財政に貢献することができるなんてすごいことだ。そしてこれからの日本の社会を担う一人として、しっかりと勉強し、社会に貢献できる大人になりたい。更に社会人になったら税金をきちんと納め、それが日本だけでなく世界中の人が安心して暮らせるように使われたらとても嬉しいと思う。

税が教えてくれた感謝の心

那覇市立上山中学校3年 石嶺 瑠那

「ありがとうございます。」

この言葉は、私がいつも病院を出るときに必ず言う言葉です。

私の家庭は、父、母、兄、私、双子の妹、弟という、いわゆる大家族です。五人兄弟なのですが、五人とも、ぜんそくや鼻炎持ちなので、いつも病院にお世話になっています。

私達家族が税によって救われた事は、大きく分けて、二つあります。

一つめは、私が生まれて半年経った頃でした。私にはもう一人の兄がいました。その兄はよく笑い、私の側によく来る人だったと母は言っていました。

兄はお腹にガンを患っていました。両親が兄の異変に気付いたときには、もう手遅れでした。末期です。少しでも長く一緒に過ごしたいと思った両親は、多額なお金を掛け抗ガン剤を兄に打たせました。しかし、両親の願いは叶わず、兄は永遠の眠りにつきました。あまりにも早過ぎる死と、助けられなかった無念で、母は泣き崩れ、何カ月、何年もの間ノイローゼ状態でした。更に追い打ちをかけるように多額の借金まで残りました。

そんなある時、父が病院の方に借金の相談をすると、「保険が適用する。」と助言され、借金が減り、三万円程度で済んだそうです。

二つめは、私が小学二年生の頃の事。息苦しくて倒れてしまったのです。ぜんそく持ちなのですが、こんなに息苦しいのは初めてでした。病院に着き、そのまま入院することになりました。一ヵ月で退院できたけれど、残ったのは多額の入院費でした。私達は大家族で、そんな大金は持っていません。また、この時弟は幼く、双子の妹も小学一年生に上がる前だったので尚更です。そんな時、またしても税が私達を救ってくれたのです。

私と私の家族は、税によって救われここまで生きることができた、と言っても過言ではありません。この恩は一生忘れることはできません。税金とは私達にとって恩人であり、誰にでも必要な存在です。

税金は国民一人一人からしたら大きな負担なのかもしれません。しかし、その税金が誰かの笑顔に繋がると思ったら、自然と笑みがこぼれてきませんか。

税は自己負担額免除の他に、道路の整備や子ども達のより良い将来のための教育費も、負担しています。

私は大人になったら、子どもの時に助けてもらった恩を忘れず、国や人のために税を納めたいです。

そして、税の良さを周りの皆に知らせていき、皆が率先して税を納める、幸せが溢れ、皆で助け合っていけるような、素敵に日本を築いていきたいです。

今日も税に感謝して

「ありがとうございます。」

経験した税のありがたみ

札幌市立稲陵中学校 2年 畠山 悠

今年七月、私は救急車で病院へ運ばれた。激しい腹痛。手の震え。体に力が入らず、自力で立てなくなった。救急相談センターから救急車の要請を勧められ、連絡してから二、三分で救急隊員の方々が到着した。家族やご近所さんの心配そうな顔を覚えている。私を乗せたストレッチャーは救急車の中へ入っていき、程なくして病院に着いた。点滴を打って、一人で歩けるまでに体調も回復した。

数週間後、すっかり体調も良くなり、いつも通りの生活を送っていた私は、とある記事を目にした。もし日本から税金の仕組みがなくなったらどうなるのか、というものだ。以前から税金については興味があり、記事を読んだが、その内容に驚いた。

まず、税金がなくなると、公的サービスが有料になるという。例えば、病院の診察料が金額負担になったり、警察や救急車を呼ぶのに一万円から五万円かかったりするのだ。さらに、学校の机や椅子、教科書等は保護者の自費になり、学費が百万円を超えることも考えられる、と記されていた。

衝撃だった。税金がなければ、私たちが普段通っている学校も裕福な家庭でないと通えなくなる。また、警察、救急を呼ぶのにも高額な費用がかかるとすると、犯罪が起きても通報、逮捕されなくなり、治安は悪化。怪我や病気の治療を受けられずに亡くなってしまいう人々も増えるだろう。

あの日、私が救急車で病院へ運ばれ、すぐに治療を受けることができたのは税金があつてのことだったのだ。学校で授業を受け、教科書や問題集を持ち帰って勉強できるのも決して当たり前のことではない。正直、今までは他人事に思っていたが、そうではないと実感した。私は税金の重要さ、大切さを知り、同時にありがたみを感じた。

今年十月、消費税の引き上げが予定されている。それについての賛否の声が上がり、議論されている今こそ、私たちはもっと身近に税を感じ、深く知る必要があるのではないだろうか。中学生の負担する税は消費税しかなく、税についての関心も薄いと思う。しかし、直接的ではないものの、私たちも立派な納税者である。その自覚と責任を持って、ほんの少しではあるが、国に貢献しよう。もっと税についての理解を深めよう。そう強く心に決めた夏だった。

税金の使われ方を知って

山形大学附属中学校 3年 本間 光

数年前、私の祖父は外出先で急に倒れた。意識もなく命が危い状態になった祖父。しかし、祖父はたまたまそばにあった「自動体外式除細動器（AED）」による電気ショックで蘇生され、周りの優しい方々にも恵まれ、一命を取り留めた。今は、そのようなAEDを使った応急処置と医師の献身的な治療により、明るく元気に以前と全く変わらない生活が出来ている。私はそんな祖父の命を救ってくれたAEDについて詳しく知りたいと思いインターネットで調べてみた。すると、全国各地にたくさんのAEDが設置されており、その多くは私たちが普段支払っている税金によって置かれていることがわかった。例えば私たちが通っている学校や様々な方が利用する公共福祉施設などである。また、私の祖父のようにAEDによって助けられた命は年々増加していた。AEDを使って一般市民が救った命は、年間約二百人以上。使わない場合に比べて救命率は約二倍に上昇するという。応急処置をしなければならぬ場合は一分一秒を争う、時間の経過とともに救命の可能性が大きく変わってくる。一人でも多くの人の命が救われるようにAEDは税金によって設置されていると知った。そのようなことを知ったら、以前まであまり良い気持ちで払っていなかった税金をもっと大切に払わなければならないと思った。私の払う税金はほんの一部にしかすぎないが、多くの人のお金が集まって、始めて自分の周りの生活、人が守られているのだと思った。

今の日本は、世界で一番の高齢化率で「超高齢社会」となっている。一九五〇年には一人の高齢者を十二・一人の現役世代（十五～六十四歳）で支えることができたのに対し、二〇一五年には、わずか二・三人で、さらに二〇六五年には、一・三人で支えていかなくてはならない状況である。私は消費税くらいしか税金を納めているという感覚はないが、二十歳になると納税の義務があり、社会のために納めなくてはならなくなる。多くの高齢者の方が安心して生活を送ることができるようにきちんと私たちが税金を納める必要がある。

税金を納める上で、話したこともない、会ったこともない誰かの役に立っているという事実はなんだか不思議な感じがする。しかしその自分の納めた税金が一人でも多くの人を笑顔に、一つでもよりよい社会のために貢献することができたら、私は嬉しい。税金は命を救うAEDのように役に立つ素敵な使われ方をしている。これからは、何のために税金があるのかを考えて、私は間接的ではあるが社会の幸せのためのツールとして納税を行っていきたい。

楽しくなるために

松伏町立松伏第二中学校 2年 澤田 裕翔

僕の母は助産師です。お母さんの病院に行くと、かわいい赤ちゃんがたくさんいます。母からは「生まれて間もない赤ちゃんは、周りできちんと守ってあげないと、生命の危険すらある。一方で、牛や馬は生まれて数時間で立てるようになる。それは、他の動物に襲われても、逃げられるようにするためだ」と教わりました。

人間の赤ちゃんは、みんなで支えていかないと、生きていけない弱い存在で、それは自然界では当たり前ではないのです。

弱いのは、赤ちゃんだけではなくありません。お年寄りも、体力的には弱い存在ですし、重い病気や怪我の人もいます。「自分は弱くない」と思っている人も、いつ病気を患い、怪我を負うか分かりません。

つまり、人間は誰しものが、そもそも弱い存在なのです。逆に言えば、弱い存在であっても、お互いに助け合うことによって、生きていくことができるのです。人間が社会的動物と言われるゆえんだと思います。

そして、助け合う仕組みのひとつとして、税があります。

だから、税の多くは、日々の生活の多くのことに関係しています。医療費や介護費を支えていますし、道路や公園の維持管理にも使われます。ゴミの回収や学校の運営も、税に支えられています。今年の10月からは、保育園や幼稚園の費用も支えてくれます。

松伏町では今年の7月に、新しくバスケットコートができました。

生まれたての赤ちゃんが哺育器のなかですこやかに育っていくように、僕たちもまた、税によって支えられた様々な仕組みのなかで、すこやかに生活していきます。そのような仕組みから、無縁で生きていくことは非常に困難に思えます。

また、税は、目に見えやすいところばかりに使われているものではありません。大雨のときに備え、堤防を強化したり、国際的な文化交流や防衛のために、使ったりします。

これらも、長期的な視点に立って、日々の生活を支えるために使っています。

今年の10月からは、消費税が8%から10%になります。一生懸命働いて得た財産から出るお金が多くなることには、誰だって少なからず抵抗感があると思います。

でも、そのお金の使い道が、巡り巡って、自分のためになるのなら、どうでしょうか。例えば、「子育て支援のために新しい税を使うなんて、子どものいない自分には関係ない」と言えるのでしょうか。その子どもが大人になって払う税で、その時の自分の生活を支えられる側面もあるのです。そもそも、今この社会に生きる僕たちは皆、子どもの頃、税に支えられて生きてきたのです。

何より、子どもの多い社会は、にぎやかで楽しそうです。楽しくなるためには、皆で支え合うことが大切だと思います。

税金を納めるということ

藤沢市立湘洋中学校 3年 飯田 奈緒子

小学生の時、新学期の始めに教科書を買ってもらって家に帰ると、私の親は「この教科書は税金で買ってもらった物だから、大切にしないといけないんだよ。」と言いました。その時私にはまだその意味が分からず、「税金って何?」ときくと「誰でも勉強できるように、みんなで出し合ったお金だよ。」と言われました。その後中学生になり「納税は国民の義務」だと習い、税金により私達の生活が様々な面で支えられている事が分かってきました。

けれど世の中ではしばしば税金は「取られる」と言われています。ではなぜ「税金を取られる」という考え方がされるのでしょうか。

日本史で租税の歴史というと、いつの時代にどんな税がどれだけ徴収されたかを習います。しかしその税を払った結果農民が何を得たのかはあまり習いません。もちろん農地や家屋や生命が守られたのかもしれませんが、税の見返りとして支配者が特に農民の為に何かをした、ということは無いように思われます。つまり日本の歴史上の税とは、人々がその土地の支配者から、その地に生きる代償として取りあげられる金品や労働だ、という印象を受けます。こうした税への印象が「税金を取られる」という言葉につながっているのかもしれませんが。

けれどこれに対して現在の日本の税金は、歴史上の租税とは性質が異なっていると思います。ある土地の住人達がお金を出し合って、そのお金で自分達の生活に必要な仕事をしてくれる人を雇い、住人達が皆快適に生きられるように、そのお金を適切に使おうというのが、現在の税金の根本的な考え方だと思います。皆で出し合うお金が「税金」であり、必要な仕事をしてもらうために雇った人が「公務員」で、またその「税金」をどのように使うと一番住民のためになるのかを決める場が、市や県や国の「議会」だといえます。そして住民がどんな事に「税金」を使いたいのかを「議会」に伝える代表を決めるのが「選挙」であり、「選挙」で選ばれるのが「議員」ということになります。

このように考えてみると、「税金を取られる」と言うのは、独裁的支配を受けている人々が言う言葉ということになり、「税金は納めるもの」「納税」という言葉の意味がはっきりと分かってきます。また自分は税金を払っているのだからと言って理由もなく公務員に横柄な態度をとる人は、自分が給料を払っているのだといって訳もなく社員を馬鹿にする社長のようなものだという事になります。

私達は学校の教科書を始め、様々な場面で税金による支援を受けていますが、「税金とは何か」を考えてみると、「選挙」や「議会」等国民主権の根本にまで考えがおよびます。このことから、税金を納めることは単に「お金を払う」ことではなく、「国民主権の基盤となる行為」であったのだと改めて気付きました。

今年の五月、社会保障のうち特に医療について考える大きな出来事がありました。

五月の末、母の実家が火事により全焼しました。逃げることで精一杯だった曾祖母は、持病の薬を持ち出すことが出来ませんでした。母が、掛かり付けの病院に連絡し、事情を説明し、薬を出し直してもらえないか相談し、出してもらえることになり受け取りに行くと、紛失という事で全額自己負担だと病院から、説明がありました。受診直後だったことから、薬の量の多さと、再診日までの期間も長かったため、請求された金額は約数万円でした。こういう事情の時は、免除されるのではと疑問を抱いた母は、市役所等色々な機関に問い合わせ、経緯を説明し、今回のような場合は、自己負担無く再処方可能であることを確認し、病院に説明し、病院側も再度確認を行い、結果、自己負担無く薬を処方してもらう事が出来ました。私はなぜ母が、そこまで薬代にこだわったのか、初めは分かりませんでした。けれど、そのあと曾祖母が、火事でたくさんお金がこれからかかるのに、自分のためにお金をかけなくていいと話していたと母から聞き、曾祖母のそういう声に対し、安心して薬を飲んで欲しいと考えての母の行動だったのだと、後からその思いを知りました。

この時に私は、この薬代はどうなるのかと考え調べました。そこで、こういう場合の法律が日本にはあり、その法律のもと税金で助けられていることを初めて知りました。

今まで、税金は、道路や教科書、警察に消防、研究や海外の支援に使われている位の、漠然としたイメージしかありませんでした。ですが、今回の事で、介護や福祉、医療の面で具体的に知ることができ、私の中で税金に対するイメージががらりと変わりました。

今後、私が税金を納める頃には、更に少子高齢化が進み、消費税も上がり、今よりも収入に対して税金が占める割合はきっと大きくなると思います。今の、子供心で考える以上に、実際大人になれば不安や不満を抱くと思います。けれど、社会を維持し、より多くの人々が幸せに生活するには、税金制度は絶対に必要だと、私は、今回の曾祖母の出来事を通し思いました。

火事により、今は亡き曾祖父と苦勞して建てた大切な家と思いの品を失い、泣いていた曾祖母が、薬のことだけでも、解決してよかったと、安心して飲んでいた姿が、私は大変印象深く、忘れることが出来ません。この事がきっかけで、母と一緒に選挙の投票会場にも行きました。税金について、私達の声を代弁し政策に関係する議員という仕事が、大切に感じたからです。

これからは、税のニュースや新聞記事等積極的に読もうと思います。また、曾祖母に安堵を与えたような、人々が幸せになる使われ方がされる事を願い、将来自分は、税金を納めたいと思います。

「見えない」税金に感謝

浜松市立富塚中学校3年 大橋 茉侑

私は今まで、ずいぶん、医療のお世話になっています。自分では払わないので医療費のことを今まで気にしたことはありませんでしたが、母から、私の医療費は、今まで実はかなりの金額がかかっていると聞きました。私は生まれたとき、双子で未熟児だったため、二週間未熟児センターというところに入院したそうです。そこは二十四時間体制で高度な医療管理なので、一日約十万円もの医療費がかかります。また、小さい頃は中耳炎になりやすく、耳鼻科通いが多かったそうです。小学生になってからは、扁桃腺、気胸の手術を受けて、入院もしました。

そして中学生の今は、白斑という皮膚病で、毎週皮膚科に通って治療を受けています。母から受診したときの明細書を見せてもらい、医療費とは、全部自分で負担するのではなく、自分が負担するのはほんのわずかで、ほとんど保険や税金で負担してくれているということを、初めて知りました。

両親は、医療費の三割を払うそうですが、私は、今まで多くの医療を受けていながら、浜松市のこども医療費助成制度のおかげで、一日五百円だけで済んでいます。今の自分があるのは、税金の支えがあってこそだということに、感謝しなければいけないと思いました。

この制度は、浜松市では今まで中学三年まででしたが、これから高校生までに期間が延びるそうです。来年から高校生なので、とてもありがたいことですが、同時に税金がさらに使われることにもなると思います。少子高齢化の影響で医療費が年々増えている一方、税金を納める若い人が減ってきているので、財政は苦しくなるかもしれません。

薬剤師の母から、医師から処方された薬を「ジェネリック薬品」にすれば、医療費の削減に役立てると聞きました。ジェネリック薬品は研究費用がかからないので、新薬に比べて、五割以上安くなるものもあるそうです。こどもは、ジェネリック薬品を使っても使わなくても、負担するのは五百円だけですが、使えば全体の医療費は安く済みます。

また、日本は、たいした病気でないのにすぐ病院にかかる人が多いそうです。税金が無駄に使われるだけでなく、重い病気で病院にかかった人の治療が遅れてしまうことにもなりかねません。

医療費は自分が払う分しか気にしていない人が多いと思いますが、本当は全部でいくらかかっている、どれだけ税金が使われているのかを、もっと一人一人が考えてみるべきだと思います。今の私には、消費税ぐらいしか税金を自分で払う機会がありませんが、これから一〇%に上がっても、自分たちのために必要なことだと理解して納めたいです。

税金は人のためならず

朝来市立和田山中学校 3年 今石 花歩

この国には、多くの美しいことわざがあります。その中の一つに「情けは人のためならず」というものがあることはみなさんご存じでしょう。では、このことわざが「人に情をかけることはその人のためにならない」という意味ではなく、「人に情をかけると、いつか自分にも返ってくる」という意味だということをご存じでしょうか。私はこれを知った時、税金も同じようなものだと感じました。

私は正直に言うと、税金を払うことに抵抗がありました。本を買うにしてもおかしを買うにしても必ず払わなければならない消費税。子どもなのになぜ払わなければならないのか、何に使われているのかがわからず、あまり良いイメージをもっていませんでした。でも、その消費税のおかげで今、私は生きていられるのだと母が教えてくれました。私は生まれたばかりの頃に腸が重なっていたため、その部分が壊死しそうになっていたそうです。そこで、手術をする必要がありました。その時の手術代がもちろん全てではありませんが国からの支援、つまり税金によって支払われていたのだと、教えてくれたのです。その時、私が消費税を払う意味が、意義がわかった気がしました。税金のおかげで今の生活を送ることができているのだと思うと、これまで消費税を払ってきて良かったなと思います。

また、昨年に関東豪雨の時に、小学校近くの道路に直径約五十センチほどの穴があいてしまいました。そのため片道しか使えないことになりました。いつも車が大渋滞していて通勤・通学に多くの時間がかかり大変でした。また、安全面においても不安だったことを覚えています。しかし、その穴は二週間も経たないうちに、いつのまにかふさがれていました。この時の私は、まだ税金が道路の保全などに使われているとは知らなかったのです。なぜ道路がいつのまにかふさがれていたのか、疑問に思いました。町民が工事代を出したわけでも、ましてや工事をする人がタダ働きするわけでもないのに直っていたことが不思議で不思議でならなかったのです。それも、母が税金によって直されたのだと教えてくれました。また道路だけでなく、信号や横断歩道の白線も税金によってまかなわれているのだと知りました。つまりは、私たち国民が払う税金によって、私たち国民は安全を手に入れているのです。

私は生まれてから今まで、そしてこれからも税金を払い続け、支え続けられるのだと思います。小・中学生時の教科書代など、私たちが学習に専念できる、多くの教育費や、お年寄りの生活を支えている年金。それ以外にもたくさんあるでしょう。つまり一生を通じて、税金に支えられているのです。それは私たち自身が税金を払っているからこそ。そう思ったので、私は「税金は人のためならず」。この言葉がぴったりだと思うのです。

税金は心のバトン

津山市立中道中学校 3年 瀧口 真琉

日本には、たった一つの温かい色をしたバトンがある。そのバトンはとても重いから、皆で協力して持って走る。税金のバトンだ。成人して大人としてのスタートを切ったばかりの若者達が、今まで一生懸命走ってきたおじいちゃんやおばあちゃん達から受け取る。そしてまた一生懸命走って新たな若い世代に受け渡す。絶対に途中で止まってはいけないが、一緒に走っている仲間に支えてもらうことはできる。

例えば、病気になって入院したら、バトンを持っている人達が税金を通して支えてくれる。七〇歳未満の人は七割、義務教育就学前の六歳未満の人と七〇歳から七四歳までの人は八割、七五歳以上の人は九割の医療費を国が負担してくれるという制度があり、これには税金が使われている。私が住んでいる岡山県津山市では、小・中学生の医療費自己負担が入院、外来共に無料となっていて、私が骨折し長い間病院に通った時は全く費用がかからなかったため、税金のバトンに支えてもらったと感じた。

私のような未成年である学生や、既にバトンパスを終えたおじいちゃん・おばあちゃんでも、バトンに支えてもらってばかりではない。バトンに触れて一緒に走れる道がある。それは、消費税という道だ。消費税とは、財貨・サービスの取引によって生じる付加価値に着目した税で、現在は八パーセント、数か月後の十月からは十パーセントを納めるようになっている。この税を買い物する時に商品代金と共に納めている私達は、触れているバトンで誰かを支えているということがいえるだろう。

今もどこかで、誰かがこの税金のバトンに支えてもらっている。そして時を経て、その人はバトンを持って別の誰かを支えていく。私は三年後成人し、一人の大人としてそのバトンを受け取る。誰かを支えるものなのだから、決して冷たくて形だけのようなものにしたくない。今のように温かい色を保つために、心と心で繋いでいきたい。

税と助け合い

石井町石井中学校 3年 高橋 心葉

私の父は役場の職員として23年間勤めてきました。家で仕事の愚痴を一切言わない父が決まって悲しそうな顔をしている時期があります。それは納税の時期です。納税は国民の義務であり、私達子供も消費税という身近な税を払っています。「生活をするのに精一杯な人でも、一生懸命支払ってくれている。本当に大切なお金だ」と父は言います。色々な事情の家庭があることを父の表情が物語っていました。

地域住民から頂いた税金を有効利用出来るようにと、常に町の発展を考えていた父が、突然病に倒れたのが3年前の夏。皮肉にも、父が大切にしていた税金に私達家族は助けられることになりました。父の病気は重く、様々な検査、入院、抗癌剤治療、放射線治療と莫大なお金がかかりました。当時小学六年生だった私でも、子供ながらに家計を心配したことを鮮明に覚えています。病院にかかった医療費の明細書を見てみると、ひと月に100万円200万円といった目を疑うような桁の数字が並んでいました。自己負担額の3割でも毎月となると支払える金額ではありません。そこで利用したのが、高額療養費制度というものでした。この制度は、医療機関や薬局でかかった自己負担額が、ひと月で一定額を超えた場合に、その超えた金額が支給される制度です。この制度のおかげで、父は治療を諦めることなく最善の治療を受け続けることが出来ました。2年半の闘病生活の末、父は天国へ旅立ってしまいました。皆が一生懸命働いて納めてくれた税金がなければ、もっと早く父との別れがきていたのではないかと思うと感謝の言葉しかありません。税金によって救われたものは、お金だけでなく、私達家族と一緒に過ごすかけがえのない時間も与えてくれました。

父が亡くなり、我が家は母子家庭になりました。心配した先生が、就学支援金制度の話をもにしてくださったそうです。この制度は学用品や給食費といった学校へ支払った費用を税金によって援助してもらえる制度です。しかし、母はその援助を受けませんでした。「条件に当てはまるからといって甘えて多用してはいけない。税金は本当に必要な場所に使う物」と、その理由を教えてくださいました。確かに、身近な人にお金を渡されたら遠慮するのに、出所が直接見えない税金は無駄遣いされやすいものだと思います。天から降ってきたお金ではないことを、両親が身をもって証明してくれました。意識してみると、私達の生活の多くは税金で支えられています。国民一人ひとりの大切なお金が国を支える資金となり手と手を取り合って繋がっています。今年度には消費税が10%に上がります。国を支える一員として「誰かに届きますように」と祈りを込めて支払っていきたいと思います。そして税金が正しい用途で使われるように、使い道に関心を持つことが大切だと思います。

税金のありがたみを感じて

日出町立日出中学校 3年 四井 陽菜

私の家庭は母子家庭です。私たちは人よりも生活費や学級費などが楽に払えない環境で暮らしています。そのうえ、母の仕事は小学校の支援員さんで、一日に四、五千円ほどの給料です。このままでは、家族四人が万全に生きていくというのは難しいのではないかと考えた事がありました。

母に話を聞くと、そういった家庭は、国から税金をもらって生活を援助してもらっている事が分かりました。その中でもいくつか種類があり、私の家は、「児童扶養手当」、「就学援助費」その他にもいろいろな税金によって助けられているそうです。

児童扶養手当では、生活費を援助してもらっています。その家庭の収入や支給対象児童数によって、金額は変わってくるそうです。

また、就学援助費では、学用品費や、給食費、さらに修学旅行費まで援助してくださっているとのことでした。こちらは、年齢などによって金額が変わります。

私は、普段何気なく納めている税金が、自分の生活の支えになっていると知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。税金の役目がこんなにも重要な事だとは知らずに、増税する度に、「また値段が高くなるの?」と文句を言っていたと思うと、本当に無責任だったと思います。改めて、税金のおかげで安定した生活を送ることのできるありがたみを、絶対に忘れてはいけないなど、強く実感しました。

私たちの暮らしを支えている税金がどんなものなのかを話し終わったあと、母は言いました。「こんな状況ではあるけれど、やっぱり、国や、国の税金に頼らず、自分たちの力で生きていきたい」と。自分の母はこんなにも強い人なのだ、本当に感動して、必死に涙をこらえていました。それと同時に、こういう考えの人もいれば、母子家庭を悪用する、残念な考えの人もいるのだなど、怒りをこらえる自分もいました。立場を利用し、悪事を働かせる。最近はそのような問題が多く起こっているような気がします。本当にやめてほしいです。苦労人になりすまし、世間をだまし、利益を得る。本当に苦労している人から見れば、そのような事は許せない。いや、許してはいけない。

私は、これから先、このような問題が減っていくことを、強く望んでいます。また、税金の大切さを忘れずに、苦労をしているからこそ、自分は正直に生きていきたいと思います。

震災復興の公助「復興特別税」

石垣市立石垣第二中学校 3年 岡部 壮良

私が小学校に入学する一ヶ月前の二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起きました。入学した石垣市立八島小学校は海のすぐそばで、石垣島は過去に大きな津波が来たこともあることから、在学中は地震や津波を想定した避難訓練が何度も行われました。また、岩手県の被災地である野田村の小学生との交流で、被災体験の話しを聞いたことで防災意識を持つことの大切さを痛感しました。そこで中学三年生になった今年の夏休みに防災士の資格を取ろうと宮城県仙台市を訪れました。石垣島から那覇空港を経由し仙台空港へ降り立ちました。仙台空港はとてもきれいな空港でした。八年前の東日本大震災では、海岸から一キロメートルほどしか離れていない仙台空港に津波が押し寄せました。滑走路のほとんどが冠水し、駐機場の飛行機は空港の外に流され土砂にまみれました。しかし私の目に映った仙台空港は、大きな被害を受けたその面影はどこにも見当たりませんでした。

このことがとても印象的だったので、石垣島に戻ってから震災復興に関していろいろと調べてみました。そして復興特別税というものがあることがわかりました。

復興特別税とは「東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法」に基づいて作られたものです。二〇一三年一月一日から二十五年間、所得税の税額に 2.1%を上乗せするという形で徴収されます。この復興特別税が被災地の復興や今後の防災のために活用されており、今回訪れた仙台空港や道路、ライフラインの復旧、防波堤などの防災設備の整備、被災者の避難施設などにも使われています。

東日本大震災の被害のニュースを見たとき、六歳の私は本当に以前と同じ状態に戻れるのかと思いましたが、こうやって復興特別税が活用されることで、被災地は世界中が驚くほど迅速にもとの姿に戻ってきています。

私が仙台で取得した防災士は「自助」・「共助」・「協働」を原則として、防災意識と知識・技能を持って、社会の様々な場で防災力を高める活動を行います。防災には「自分の命は自分で守る自助」・「被災者同士で助け合う共助」・「行政の支援を受ける公助」という三つの柱があります。自分という小さな単位から、家族や近隣の人々という中くらいの単位、そして行政という大きな単位、この3つが連携し協力することが防災活動で非常に重要になります。

大きな災害が起き、自助や共助で助かったあと、私達が生活していくためには個人や地域の力だけでは無理です。公助が必要となります。国民が納税の義務を果たすことで、自然災害の多い日本で共助していくことができ、そして、復興税という公助につながるのだと実感しました。私はこれから防災士の活動を行っていきますが、それと同時に納税の大切さも伝えていこうと思います。

税金でつながる私達

岩見沢市立上幌向中学校2年 有原 海音

「税金」と言われて、真っ先に思い浮かんだのは「消費税」だ。私にとって一番身近にあり、直接関わってくるものだからです。十月より消費税率アップという事で、今百八円で買えるものが百十円になり、自分で買い物をする際にダイレクトにダメージを受ける為「嫌だなー」と思うくらいで、税金の事を今まで考えたことがありませんでした。

この度、税金について調べていくうちに、住民税、所得税、法人税、自動車税等、税金にも本当にたくさんの種類があり、身近な使い道としては、医療や年金、公共事業や教育等様々なところに使われていて、私達の何気ない日々の生活がスムーズに行えているのもこの税金のおかげなのだと思えさせられました。

もし税金がなくなったら、今ある当たり前の生活が当たり前でなくなる社会になる事を想像しゾッとしました。そして、私自身もこの税金によって助けられていたことを知りました。

私は、中一の冬に「特発性側弯症」と診断を受け、春休みに入院し椎骨に金属を固定して矯正するという五時間にも及ぶ手術を受けました。その時の手術代は、約三百万円という高額で、入院費・通院費を含めると相当な金額になりました。その費用の大部分を市の乳幼児等医療費の助成と自立支援医療によってまかなわれました。その出所は税金と知り驚きました。もしそれが全て自費だとしたら両親はととても大変な思いをしたでしょう。私の知らないたくさんの人達が働いて納めた税金によって助けられたのだと思うと、たくさんの人達に感謝するとともに不思議なつながりみたいなものを感じうれしく温かい気持ちになりました。

今回の病気をきっかけに税金に対する考えが変わりました。今までは納めた税金がどのように使われているのか考えたこともありませんでしたが、税金は国民生活を良くする為のもので直接的な見返りが個人にあるものではないことを理解しました。

私もこの先社会人になった時、自分の為、人の為、自分が生きるこの社会のために「国民の義務」である納税をしっかりと社会貢献していきたいと改めて思いました。

私を含め、周りの人達も税金について知らない事が多いと思います。税金の意義と役割、使い道等をもう少し学校で学ぶ機会があってもよいのではないのでしょうか。税金はどこにどのように使われているのかを知り、税金は私達の暮らしを支えている大切なものだ本当に理解できたなら、脱税などせず、目の前の事だけを考え文句ばかり言わずに気持ちよく納税ができる気がします。

みなさんも税金の事をよく知り、しっかりと納税をし、みんなでよりよい国をつくっていきましょう。そして、将来、どの国からもすばらしいと言われる日本にしたいです。

「空気も水もただではないんだよ。」

これは、私が小さい頃からよく父に言われてきた言葉だ。父は森林を守る仕事をしている。父は山好きだったこともあり、よく私を山に連れて行ってくれた。軽やかで澄んだ空気に包まれながら、父は道に迷った時の対処法や山菜、キノコの種類などを教えてくれた。父の話は全てが新鮮で、幼い私はいつもワクワクしながら聞いていたのを覚えている。

ある日、私が新聞で「環境税」についての記事を読んでいる時、普段は寡黙な父がめずらしく真剣な顔で語り始めた。

「私たちが吸っている酸素は森の木々によって作られているんだよ。そして私たちが排出している二酸化炭素は木によって酸素に変えられている。人間がこの地球上で生きていく上で最も大切な水は、雨として地上に降り、その雨水はすぐには川に流されず、少しずつ川に流すダムのような働きをしている。その上、土砂災害を防いでいる。その山を管理するために税金が使われているんだよ。」

世界では、二十億人が安全な水を自宅で入手できず、四十五億人が安全に管理されたトイレを使うことができない。ということは、世界の人口の約九十パーセントが衛生的な水を入手できないことになる。残りの十パーセントでさえ、飲み水をペットボトルで買っている国が多いということだ。

一方、日本は国土の七十パーセントが森林で、きれいな空気や水が豊富にある。父の話を書くまでは、空気も水も、誰でも当たり前に入ることができるものだと思っていた。しかし、その考えは間違っていた。

私たちは、恵まれた国に奇跡的に生まれた。そして、その山や森を守るために税金が使われていることが分かった。小さい頃から親しんできた山や森は、「税金」を通して人の手によって守られてきたのだ。

「私も大好きな山や森を守りたい。」

それまでは何かを与えてもらう存在だった山が、今は自分が何かをしなければならないと思うようになった。しかし、今の私には父のように働くこともできないし、もちろん税金を納めることもできない。

「清掃登山に行ってみないか。」

自分にできることは何か考えていたある日、父が言った。あれから三年、私は毎年栗駒山の清掃登山に参加している。山には、ゴミ袋がいっぱいになるほどのビニールやビンなどが捨てられている。そこには父の職場の人だけでなく、登山が好きな人や環境問題に関心のある人など、毎年何十人も参加している。そういう人達と話ながら登山するのは、かつて父と二人で登った山とは違った楽しみがある。

これからも私は清掃登山を続けようと思う。でも、きっといつの日か社会人として税金を納め、山や森を守ることに役立ちたいと思う。

限りある税金

下野市立南河内第二中学校 2年 小林 真也

この作文を書くにあたり、私は親から税についての話を聞いた。私は幼い頃、二年間家族とアメリカで暮らしていた。言葉も文化も全く違う異国の地に急に住むことになったので、ひどく混乱したことを覚えている。

英語も少しずつだが理解し、弟と友達と放課後に学校の校庭で遊んでいた時である。弟が急に遊具から落ちた。かなり高さのある遊具で、落ちた弟は大泣きしていた。すぐに病院に連れて行き、肘の骨折と診断された。手術が必要となり二日程入院し、弟は退院した。今になって初めて知ったが、あの時の入院・手術費は合計百万円以上だったそうだ。幸い日本で保険に入っていたため、自己負担はなかったが、もし保険に入っていなかったらアメリカで生活を続けるのは難しかったかもしれない。このように事故や病気は突然にやってくる。そのため、アメリカのように国民皆保険ではない国では自己破産の一番大きな原因は医療費が払えないことだと後で知った。

日本ではどうだろうか。私の住む市では最近、医療費が高校生まで無料となった。そのおかげで、急な怪我や事故、病気の時も安心して過ごすことができている。もしアメリカのように医療費が高額だったら、体のどこかが痛くても病院に行くことをためらい病気の発見が遅れてしまうかもしれない。その点で、私は市の制度に大変助けられている。

一方、近年問題になっているのが、高額医療費の財源をどうするかということである。最近ノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑さんが発明に関わったオプシーボという抗がん剤は一人あたり一年間で何千万円もかかる。この医療費のほとんどは国の税金によって賄われている。また、様々な薬や器具が発明され医療が発展するにつれて、日本の平均寿命は延び超高齢社会となっている。高齢者の医療費も多くが国の税金により賄われている。ただでさえ多額の借金を抱えている日本だが、国民の医療費のほとんどを負担する余裕はあるのだろうか。私達が、大人になった時は一体どうなるのだろうかと不安に感じる。財源はあくまでも有限であり、医療費が一方的に増え続けているのは深刻な問題である。では、医療費を支払うために税金と自己負担のバランスをどのようにしたらよいだろうか。

一つ目は税金を増やすこと、二つ目は患者の自己負担を増やすこと、であるがいずれも国民や患者の負担を増やすことになってしまう。そこで三つ目の方法としては、医療費自体を減らすことを目的に、病気の予防を徹底したり、保険加入を呼びかけたり、人工知能を導入して人件費を削減するなど可能ではないかと思う。

税金には限りがあり、国民一人一人が税金の使い道だけでなく、税金の支出を減らすために何ができるかを考えていくことが大切だと強く思う。

明るい未来のために

山梨市立山梨南中学校3年 一瀬 涼夏

七月の参議院選挙は増税の是非をとう選挙でもあった。それだけ税金は国にとって重要な問題なのだ。私達中学生にだって関わりは強いはずだ。税金は私達の生活にどう関わっているのだろうか。

私はほぼ毎日学校に行く。通学路は整備されている。また、たまに「青パト」を見かけることもある。どちらも私達が安全に登下校できるよう行われていることだ。学校では授業をうけ、給食を食べ、部活をする。私達がよりよい環境で学ぶことができるようになっているのだ。道路の整備、警察の人によるパトロール、授業代、給食代、教科書代、学校の設備。少し考えただけでも私の生活の中でいたるところに税金はつかわれているとわかる。そしてより暮らしやすい生活をつくってくれているのだ。また税金は困っている人を助けてくれるものでもある。祖母が介護が必要となったとき、介護保険によって、家にスロープをつけてもらえたり、車椅子を貸してもらえたりした。父も母も「本当に助かった。」とよく言っていた。これだけではない。災害が起こったときテレビで自衛隊の人が救助をしたり、支援物資を運ぶ姿をよくみる。またもし自分や家族が大きな病気にかかったときには「高額療養費支給制度」などで支援してもらえるそうだ。

このように税金は私達の生活に広く関わっている。そして私達を支えてくれている、非常に大切な存在なのだ。私は税金は必要なものだと考える。ただその一方で私の頭には税金にマイナスのイメージもある。なぜだろう。税金は正しい使われ方がされているのか。政治家などによって、一部の人達だけが得をする使われ方は全くないのか。こういった不信感がマイナスのイメージにつながっていると感じる。国民一人一人にとって有効な使われ方がされていてこそ、税金はよいものだと言えるのだ。この間の選挙では増税への反対意見もあった。みんなが納得する正しい使われ方がされるためにはどうすればいいのか。

私は中学生だ。中学生である私の生活にも税金は大きく関わっている。今の私に出来ることは何か。それは正しい目を見る力をつけることだと思う。税金によって、今私達は平等に勉強することができる。だからこそ、その環境を大切にしていかなければと思う。日々の生活の中で、校舎をきれいにしたり、給食を残さずに食べたり、健康管理をしっかりとすることで、税金の無駄を防ぐことができる。今の私にできることは、わずかではあるが、与えられているものをしっかりと受け止め、税金について、これからのことを考え、学んでいこうと思う。

幸福度の高い国を目指して

富山市立堀川中学校3年 奥村 美咲

今年のお正月。私は、祖父母の家で親戚と過ごしていました。みんなで楽しんでいた中、急に祖父が意識をなくし倒れました。父が、すぐに救急車を呼んで、祖父は県立病院に運ばれました。救命救急センターで、いろいろ検査をし、祖父は無事に帰ってきました。

ちょうど、その半年後のことです。私は、「14歳の挑戦」で偶然にも祖父が運ばれた県立病院で実習を受けました。そこで、ドクターヘリを見学しました。ドクターヘリは、医師が乗っている空飛ぶ救急車です。私は、県内どこにいても救急車やドクターヘリがすぐにきてくれることに感激しました。しかし、私が一番驚いたことは救急車やドクターヘリは誰が、どこから呼んでも無料だということです。

では、誰がお金を払ってくれているのでしょうか。ずばり、その答えは「税金」です。もし税金がなかったら、救急車は一回四万五千元、ドクターヘリは一時間飛んで五十万円から百万円という多額の金額を私達が負担しなければなりません。しかし、税金があることにより国や自治体が負担してくれているのです。

では、そもそも税金とは何でしょうか。税金とは、大きく言えば日本社会全体を支えるお金であり、日本に住むために必要な「会費」のようなものです。例えば、年収六百万円の大人は、およそ百万円を税金として納めなければなりません。「すごい大金！」と思う人が多いと思います。しかし、今の日本では国民医療費が四十二兆三千億円かかっています。健康保険料で全額支払うことが難しいため、国や地方から。つまり、私達の税金の一部も医療費となっているのです。これから、高齢者の割合が増え、ますます医療費が必要となると考えられる日本では、多くの人が安心して健康に過ごすために税金は必要不可欠なのです。

しかし、今の日本には課題があります。それは、税金を払わない人がいるということです。税金は、私たちの生活を良くしてくれているはずですが、払った金額に対して見返りが少ないと感じ、不公平感や不満をもっている人が多いからではないでしょうか。私も、祖父が救急車で運ばれるという、滅多にない経験がなければ税金の必要性を実感することはなかったと思います。デンマークでは、税率が二十五%と日本の三倍以上も高いですが、同時に国民の幸福度がとても高いと言われています。それは、医療費や教育費が全て無料など、払った金額よりも受けられるサービスが大きいと感じているからだだと思います。

私は、今の日本の税金の使われ方を多くの人に理解してもらえるよう、もっと情報を発信することが大切だと思います。そして、多くの人に必要性を実感してもらうことで、幸福感をもちつつ、税を負担できるようになるのではないかと思います。

増税のメリット

伊東市立北中学校3年 山田 冨花

今年の10月から消費税が10%に増税されます。学校の授業で税金について学んだとき消防署の活動やごみ処理の費用など普段、私たちが安心して豊かに暮らしていくには必要なものなんだなと思いました。でも増税と聞くと何となく悪いイメージがするなと思ってしまった。しかし、国で決めた事なのだから良い事なんだろうと思い、私は増税のメリットについて調べてみることにしました。税金にはいろいろな種類がありますが、自分たちの身近な税金のメリットはなんだろうと母にたずねると、弟の保育料の話をしてくれました。

私には7歳下の弟がいます。弟が幼稚園に入園した年に子ども・子育て支援新制度という政策がスタートしたそうです。この新制度の実施のために、その当時、前年度に8%の引き上げによる増収分が活用された、とのこと。弟の場合は保育料が市民税額に応じた、応能負担というものになり、私が登園していた頃より安くなって通いやすくなったそうです。さらに、一年後の年中に上がった年には、多子軽減という、第2子は半額、第3子以降は、免除になりました。しかし、国の基準では第1子が小学3年生までを対象にしていたので7歳違いの弟は対象にならない予定で母ががっかりしていたら、私の暮らしている伊東市では、第1子の学年の対象を中学3年生までに上げてくれたので、無事に弟も対象になれたそうです。弟は私立の幼稚園に通っていたので、市立に比べてもともと保育料などが少し高めだったので「半額はとても助かる、その分を習い事にも充てられる。」と当時思ったそうです。

さらに、弟の卒園後の2018年4月からは、5歳児クラスのみ無償化がスタートしました。そして、今年の10月からは3歳から5歳児は全世帯で幼児教育などの無償化がスタートします。無償化全額には幼稚園のひと月の利用料の平均額の上限が設定されていたり含まれない費用などもあります。3年間分と考えると結構な金額になるなと思いました。そしてこの無償化は消費税が10%に増税された時の財源で行うそうです。弟は「自分にも弟が欲しい。」と言ったりするので母は「この無償化がもっと前からあったら3人兄弟を育ててみたかったな。」と言っていました。母は「家族が1人増えるということはその家族一人一人の人生を大きく変えることだよ。」とも言っていました。消費税が10%に増税されるメリットは今回私が調べた幼児教育無償化に伴う家庭の教育費負担の軽減だけではなく、軽減した分を習い事に充てていろいろな経験を積む事も出来るので、本当に一人の人生を変える事になるんだと思うと、何となく悪いイメージだった増税が、とても身近で大切な事なんだと実感する事が出来ました。

税金で「生きる」を支える

大阪市立豊崎中学校3年 布浦 ことの

「北海道に旅行しようや。」

去年の秋、母が突然言い出した。早速明日、旅行会社に申し込みに行くとのこと。あまりの唐突さと、行動の早さに驚いてそのわけを聞いた。その北海道旅行プランは「ふっこう割」が適用されて、旅行代金がとても安く、そのため発売されるとすぐに売り切れになってしまうらしい。

北海道では、昨年大きな地震が起こり、住民の方々の生活はもちろんのこと、観光地も大打撃を受けた。団体旅行のキャンセルが相次いだそうだ。北海道だけでなく、西日本豪雨など各地で天災が相次ぎ、それらの地域への観光客も減ってしまった。そこで国の対策として「ふっこう割」がうちだされた。該当の地域に宿泊を伴う旅行をすると、国から助成金が出る。私たちの今回の旅行プランの場合、一人一万八千円も国から助成金が出た。浮いたお金で美味しいものをたくさん食べられるし、お土産もたくさん買えてラッキーだと浮かれた。

「ふっこう割」の効果だろう、温泉地も都市部の観光地もたくさんの人であふれていた。私が旅行中、特に印象深かったのは、地震の影響がひどかったむかわ町の復興イベントにたまたま参加できたことだった。ししゃもが有名な町だ。現地でしか食べられないという「ししゃも寿司」を食べた。ししゃもを加工して販売しているおじさんは、冷凍庫が地震で壊れて、一時は廃業を考えていたと言う。だが、お客さんが目の前で美味しい美味しいと食べてくれるのを見ると、あきらめずに再興して本当に良かったと、しわくちやの笑顔で話してくれた。おじさんの笑顔で、私も復興に貢献しているのだと実感した。

このように、「ふっこう割」は割引を受けた旅行者と、活性化を求める被災地の双方にメリットがある。被災地に対する義援金や見舞金、税金減免など、直接的な支援もちろん必要ではある。しかし、現地で旅行者に消費を促す間接的な補助金は、国が出す金額よりも数倍の経済効果を生み出す素晴らしい制度だ。

さて、今年十月から消費税の税率が上がる。私たちがお気に入りの雑誌や雑貨を買うにも、わずかな額ではあるが出費が増える。お小遣いの中でのやりくりが難しくなりそうだ。しかし、北海道旅行で感じたように、税金で誰かの「生きる」を支え、笑顔にすることができるのだと思うと気持ちよく納税できそうだ。更には、私もこれまで多くの誰かに「生きる」を支えてきてもらった以上、納税は義務であると思う。

助けを必要としている人の場所へ速やかに手が届く日本の税の制度。その制度が今後も続くためには、私たちが社会人となった時に意義を持って納税し、しっかり土台にならなければならないと強く感じている。

ボランティア活動を通じて

広島市立庚午中学校 3年 河内 祐月

平成三十年七月、地元である広島を集中豪雨が襲った。私の住んでいる地域は被害にあわなかったが祖父母の家は土砂が入り込み、想像を絶する状況だった。

私は災害後ボランティアに参加した。父が警察航空隊に勤務しており、発災直後から救援活動に従事し、被災状況を聞かされていたからだ。県内広範囲に亘って土砂崩れに巻き込まれた家があり、人手が足りていないことを知った。

ボランティアの現場では警察、自衛隊、消防などの組織が活動されていた。私は被災した家の土砂の除去や家財道具の搬送を行った。炎天下の中、一人がシャベルで土砂を掻き出す量には限界があった。自衛隊等は大規模な人数、重機やトラック、給水車で迅速、かつ広範囲に活動しており、その姿に尊敬、感謝するとともに存在意義を強く感じた。

ボランティア後、父と国を守る組織のことその財源について話しをした。父の勤務先で使用するヘリコプターの機体、維持費は高額であるが、国の安全のためには必要不可欠であることを知った。これらはすべて税金で賄われている。税金がなければ今回の様な災害が発生すると救援は有料になるかもしれない。また、道路が寸断しても長期間復旧されることはないだろう。

私は、税金について詳しく知りたいと思い国税庁のホームページを閲覧した。「税の学習コーナー」では税の歳入・歳出についてわかりやすく掲載されており、細かく税金が管理されていることが理解できた。これにより、災害で活躍した自衛隊は「防衛関係費」、警察や消防は「地方交付税交付金等」、道路に関しては「公共事業関係費」として分類されていることを知った。また、「地方交付税交付金等」は地方税の調整として国の予算が使われており格差が生じないように工夫されていた。

今回のボランティア活動を通して、災害は日々の生活を簡単に困難なものとし、救助活動、復旧事業は税金なしでは実行することができないことを感じた。税金を財源として様々な人たちの不断の努力によって私たちの生活が支えられている。

納税は自分たちの安全・安心な暮らしを支えている生活の土台であり、国の土台である。そして税金を厳格・適切に管理し活用している制度は素晴らしいものであり、今回をきっかけに税金の大切さを実感することが出来た。

税が教えてくれる事

いの町立伊野中学校3年 善家 紗弥

「消費税とか、計算するのめんどくさいし、小銭多いし、払う額も多くなるし、嫌い。」

現代の子供たちは、一度は感じた事だと思います。「払った税は何に使われるのかは学習してるけど、あまり税に対していいイメージはない。」これが私たちの声です。

私は、この作文を機にもう一度、税についてを学習し直し、考えてみる事にしました。

まず、税があるから出来る事について。税によって出来る事は多く、私たちの通う中学校をはじめ、小学校・幼稚園・保育園等公共施設の建設、道路や環境の整備。これらは全て私たちの払った税金でまかなわれています。このような大きなものばかりではなく、普段私たちが何気なく使っている教科書だって、税金によって無償になっているんです。

「税金なんて無くした方がマシ。」

税金が嫌・めんどくさいからとなんとなく言ってみたこの一言、もし税金が無かったら、と考えてみれば、いかに税金は私たちにとって欠かせない物だと分かります。

そして、税金に対するイメージを+なものにするためにどうすればいいのか。

税を納める事は国民の三大義務の一つとして私たちに科せられています。なので、多くの人が税金は「払わなければいけないもの」と思うでしょう。何かを「強要される」といった受け身な考え方は、何をするにしてもいずれ嫌気がさして、その物事に対する関心は薄れてしまいます。ならば、私たちから考えを変えていけばいい。受け身から主体的に。私たちは税金は何のためにあるのか、そして何に役立っているのかを知っています。先程、幾つかの税金があるから出来る事を挙げましたが、それらは全て私たちのため、また、誰かのためになるものばかりなのです。

税に対して+なイメージをもつための一つの考えとして、私は「税金は助け合い精神の表れ」だと考えます。

税金はみんな納めるものであって、誰かが独り占めするものではありません。必ず誰かのためになります。そしてもちろん自分自身も税金によって自分以外の誰かに助けられています。税金は「思いやり募金」そういった視点で捉えてみると、案外税金は苦ではないのかもしれない。

しかし、税に対する考え方は人それぞれ。決して誰もが税に対して+なイメージを抱かなければならない、なんて事はないのです。

普段何となく払っている税金一つをとっても、様々な発見や新たな視点・考えが生まれる。私はこの作文を書くにあたって、改めて税金の重要さを知り、税金から発想の転換を学びました。

これからも税金と私たちは深く関わり続けるでしょう。でも税金を払う事の意義を忘れずに、税金を付き合っていこうと思いました。

僕という存在

福岡教育大学附属福岡中学校3年 成田 悠政

二〇一九年七月二十三日、僕は一五歳になった。

労働基準法第五六条によると、僕でも四月一日からアルバイトができるらしい。

アルバイトすると収入を得ることができるが、一定以上の収入を得ると所得税がかかり、また、店で商品を買うと消費税がかかり一〇月から八%から一〇%に上がることになっている。なぜ、こんなに日本は税金を納めなければならないのだろうか。

しかし、先日そう思っていた疑問が一気に吹き飛ぶ衝撃的な事実を親から知らされた。

二〇〇四年七月二十三日、午前二時三一分、僕は出産予定日より一ヶ月早く福岡市内の病院で二五一〇gの体重で生まれた。通常、二五〇〇g以上の体重があれば、とりあえず安心できるらしい。

でも、喜びもつかの間、朝五時頃、病院で寝ていた父親はたたき起こされ、看護師からこう言われたそうだ。「肺の機能が十分に成長していないので呼吸困難な状況です。このままでは危険ですので、今から大学病院へ搬送しますので救急車に乗ってください。」

僕は、ほとんど息をしていない状況で子犬が入るような小さなかごに入れられ、救急車に乗せられて病院に搬送されたらしい。そのままNICU（新生児集中治療室）に運び込まれ、肺の機能が十分に成長するまで一ヶ月以上保育器に入れられていたそうだ。ミルクもほとんど飲めていなかったという。

また、退院するとき、両親は医師からこう告げられたらしい。

「今日で退院になりますが、今後何か障害が残るかもしれませんので、経過を見ていきましょう。」両親は僕の将来が不安になり、かなりショックを受けたようだ。幸いにも、僕は今、不自由なく生活を送っている。

さらに、僕を生む前、母は切迫早産と診断され、一日でも長く母胎にいるよう絶対安静といわれ、出産の一ヶ月以上前から入院生活を送っていたそうだ。

これらの母の入院費、医療費、救急車、僕の医療費など僕の出産にはかなりお金がかかっているが、子ども医療費助成制度というものがあり、莫大な税金が使われていたことを今回、初めて知った。

もし、税金がなければ、日本に生まれていなければ、僕という存在はなかったのかもしれない。税金に助けられた命、授かった命を大切にしていかなければならない。

国民の三大義務として、僕は今、憲法第二六条の教育を受けさせる義務を享授している。今後、憲法第二七条の勤労の義務そして憲法第三〇条の納税の義務を果たすことになる。

税金の使い道として、医療費などの社会保障費として僕を救ってくれた誰かのために、僕は誰かを救って恩返しをしたい。

私たちの安心と税金

大分市立大分西中学校 3年 多谷 咲希

「税金」という言葉を聞くと、お金をとられてしまう、というようなマイナスのイメージを持つ人が多いと思います。私自身も以前はそのようなイメージを持っていました。

「税」という漢字の成り立ちを調べてみると、のぎへんは、穂先が垂れかかる稲の象徴だと知りました。作りの部分は、ふたつの分かれているものの下に、口と人があり、抜け落ちる、という意味から、自分の収穫の中から抜け落ちる穀物を意味し、そこから年貢や税金という言葉がでてきたそうです。

穀物を納めていた昔とは違い、現在は所得税をトップに消費税、法人税、といった現金を納めるかたちの租税が主な国の収入となっています。このように変化しながらも、古代からずっと続いてきた仕組みは、必要不可欠なものとして私たちが捉えてきたことがわかります。私たちが税を納める、ということで様々な恩恵を受けてきたのです。

国の支出の中で一番多く割合をしめるのは社会保障費です。医療や年金、介護、福祉などをまかなう費用です。私は特に年金や介護福祉などは、ずっとまだ先のことで、当分無縁だと思って過ごしてきました。でも祖母が高齢者施設に入所した税金から多くの援助を受けていることを知りました。まずその一番は、介護保険を利用した様々なサービスです。祖母はデイサービスやリハビリに週のうち数日通っていました。納めた金額よりはるかにお金のかかるサービスを一定額受けることができるということを母から聞き、どこからお金はきているのか、と不思議に思ったことを思い出します。さらに症状の重い人の入る施設にうつったときも、費用の多くが補助されていることを聞きました。その手厚さに、母はいつも感謝していました。

祖母が亡くなるまで世話をしていた母からそのような話を毎日のように聞くことになりましたが、そんな機会がなければ、私は税金がどこに使われているか、ということ意識することはなかったのではないかと思います。税金は私たちが生まれてから、年を取って世を去るまで本当によく考えて配分されているようです。

ただ、社会が変化するにつれ、その配分も、ずっと同じというわけにもいかず、変化が必要になってきます。そこには考慮しないといけないことが多いため、意見の対立も生まれます。でもそのために政府があり、選挙があることを忘れてはいけません。私たちはもっと政治に感心をもつべきです。今年の10月には消費税の増税が予定されています。負担ばかりに声を出すのではなく、私たちの安心を支えてくれている仕組みがあることを知り、そのおおもとが税金なのだということを知る必要があります。更なる高齢化・度重なる自然災害。自分の身に起きることだと捉えもっと税金について勉強していきたいと思いません。

税金が支えているもの

沖縄県立開邦中学校3年 田中 智香

母、兄、私の三人で貧しく暮らす。母の収入は生活費に消える。進学先は学費の安さで決めなければならない。大学へ進学したいなんて言えるはずもない…。これは、税金がなかった場合の私の人生です。現在、私の家族は三人で幸せに暮らしています。おいしいご飯を三食頂き、毎日学校で勉学に励み、将来の夢や目標をもって生き生きと日々過ごしています。

私の両親は私が幼い頃に離婚したので、母は女手一つで私たちを育ててくれています。朝から晩まで一生懸命働きながら家事をこなす、とても忙しい母です。しかし、シングルマザー一人の収入では子育てを続けることが難しいのが事実です。ベネッセによれば出産から二二年間の養育費は平均一六四〇万円にも昇るそうです。ましてや私たちは二人兄弟ですから、母の収入だけではどうやっても足りません。しかし、日本には母子家庭の所得税や住民税を免除してくれる「寡婦控除」という税制度があります。子育てをするシングルマザーにとって納税は大きな出費ですから、その制度によって私たちの生活は大変助けられているのです。

私は三年前、中学受験をしました。中学受験は全員が受けるものではないので学校では受験対策をしません。だから、塾に通わなければ合格は難しいといわれています。「私の家庭に塾など通えるほどの余裕はないし、兄の高校受験もあるから私はそんなこと言えない」と思い、私は母に中学受験をしたいことや塾に通いたいことを話せずにいました。さらに、受験をするという周りの友達には両親がいる裕福な子が多く私は自信をなくしてしまいました。しかし、そんな私の思いに気づいた母はこう言ってくれたのです。「お金のことは気にしないでいいから、自分のやりたいことをしなさい」と。その時に母子家庭の免税制度についても教えてくれました。そのお陰で私はお金の心配をすることなく受験勉強に励むことができ、ついには合格することができました。もし税金がなかったら私は受験を諦めていましたし、何より自分の意志ではなく金銭的な面で進路を決めなければならないことに苦しんでいたでしょう。私の家庭を支えてくれる税金があるから、思う存分勉強ができ、現在は気象大学校に入学するという目標に向かって頑張っています。税金が私の将来の道を広げ、明るく照らしてくれたのです。

このように、税金によって私は救われました。税金というと、よくわからないことのために自分のお金が取られるという消極的な認識もあるかもしれませんが、決してそうではありません。税金は、多くの人の生活、そして夢を支えるものなのです。

税金の使い道を決めるのは私たち

札幌市立厚別北中学校 3年 山口 和穂

中学生の私が「税」と言ってまず思い浮かべるのは消費税だ。お店で買い物や食事をすると8%の消費税がかかるので、お小遣いを使って買物をした時は消費税が高いと感じる。国の収入から考えると私が払った消費税は本当にわずかな額だが、たとえ一円でも税金を払っている以上、大切に使用してもらいたいと思う。

ところで、集めた税金の使い道は誰がどうやって決めているのだろう。不思議に思って母に聞いてみた。母から返ってきた答えは、「税金の使い道は、議員さんが議会で決めている」というものだった。意外だったので国税庁のホームページで調べると、「税に関する法律（税の負担方法）と税の使い道（予算）は国民の代表者である議員が国会で決めています。」と書かれていた。

税金の使い道には私たちの教科書やごみ処理の費用のように毎日の生活に欠かせないものもあれば、北海道新幹線のように長い年月をかけて税金を使って整備するものもある。毎日の生活に必要なものにだけ税金を使っているのは、長い年月をかけてたくさんの税金を使うものは整備が進まないだろう。何に優先して税金を使うかについては、人によって意見が異なるだろう。また、これから少子高齢化が進むと集まるであろう税金の額や必要とされる使い方は、時代とともに変化していくだろう。だから、目の前のことだけを考えた偏った使い方ではなく、時間的にも地域的にも色々な角度から使い方を考え、きちんと議論した上で決めるのは、とても大切なことだと思う。

もう一つ母が言っていたことで私が印象的だったのは「国民主権」ということだ。日本では納税の義務がある一方で、主権は国民にあると日本国憲法で定められている。だから、国民から集めた税金の使い方も、主権者である国民が決めることができるというのだ。実際には税金の使い道は議員が決めているが、その議員を選挙で選んでいるのは国民だ。つまり、国民自身が自らの代表者である議員を選ぶことによって、税金の使い方も決めているということなのだ。そう考えると、選挙はとても重要な意味を持つことが分かる。

十八歳から選挙権が与えられるようになったのは、わずか三年前のことだ。その理由は、若者の声を政治に反映させるためだと言われている。三年後には私も十八歳になり、選挙権が与えられる。選挙や政治というと大人が考える難しい問題だと思っていたが、そうではなく自分たちの生活にとっても身近で深い関わりのあることだと分かった。だからこそ、十八歳になったら、選挙を通じて自分たちが払った税金を正しく使ってくれる人を選びたい。そして、自分たちの税金がどのように使われているかについては、今のうちから関心を持っていたいと思う。

税金がつくる「命の道路」

宮古市立重茂中学校3年 梶家 寧皇

私が住んでいる「重茂半島」は、三陸海岸最大の半島で、本州最東端にあります。アワビ・ワカメの生産日本一を誇り、ウニの産地としても有名、海の幸に恵まれた素敵なおところですよ。

しかし、半島のほとんどが森で覆われ、起伏も激しいため、重茂を通る道路は、細く、急なカーブが多い道となります。しかも、宮古市の中心部からは二十キロ以上も離れているため、車で四十分近くかかることとなります。バスだと一時間です。救急車を呼ぶことになると、最寄りの消防署から重茂に来る時間もプラスされるため、病院に到着するまでに一時間半以上かかるのです。それでも、買い物や通学のためには、必要で、重茂が街とつながる大切な唯一の道路です。

だから、その道路が寸断されると、重茂の人たちは孤立し、命の危険にさらされることとなります。記憶に新しいところでは、東日本大震災。宮古市の中心部に続く唯一の道路が、津波の影響で崩壊し、千鶏・石浜地区は四日間孤立することになりました。

そこで、震災の翌年から、重茂半島線の道路整備が始まりました。私たち重茂中学校の生徒は、一昨年、採掘が終わったばかりのトンネルを見学させてもらい、全校生徒で、トンネルの内壁に願いなどを書かせてもらいました。私は「重茂がますます発展しますように…」と書きました。その時の期待感・わくわく感は、いまだに心に残っています。

そして、今年の三月十六日、重茂トンネルが開通しました。トンネルが開通したことで、道路はまっすぐになり、宮古市の中心部への道のりも近くなりました。所要時間は十分程度短縮され、津波の影響がない道だけを通って国道に出られるようにもなりました。崩壊・寸断の危険性が少ない、まさに命をつなぐ、「命の道路」になったのです。

重茂地区の人たちの悲願だった重茂トンネル開通・道路整備完成を通して、私は税金というしくみを身近に感じ、税金の大切さを考えることができました。

今年の十月に消費税が10%に上がることで税金に対する世間の関心も上がっています。お財布から出ていく金額が増えるため、負担感も大きく、不満を持つ人もいますが、集められた税金が、どんなことに使われているかを知ること、その気持ちは変わるのだと思います。

道路を整備するために、税金が使われています。地域の人たちの利便性の向上のため、また、安心・安全な生活のために、税金は使われています。「命の道路」をつくってもらったことに感謝し、この感激と税金の大切さを、大人になったときに、重茂の子どもたちに伝えていけたら…と思います。そして、多くの人の命を守る税金を、しっかり納められるような大人になりたいです。

医療制度に支えられた十五年

つくば市立竹園東中学校3年 小倉 優花

私は病気を持って生まれた。一歳になるかならないかの時には、短期間だが入院もしていたほど重いものだったらしい。以来、通院を続けている。幸い、成長とともに症状が軽くなっていて、今では薬の量はぐんと少なくなり、通院は主に、異常なしの経過を診ていただくための定期的なものになっている。

十五年間で我が家の家計から出ていった、私にかかった医療費は、どのくらいだろう。病院で精算をする父に尋ねたことがある。そして明細に書かれていた数字を見せてもらおうと、私のお小遣いでも支払えそうなくらいの額だった。もちろん受診内容によるだろうし、たとえ一回は少額でも、回数が重なれば大きな負担だが、それにしても、率直に安いと思った。

そのとき教わったのが、医療費補助制度だ。私の場合、健康保険に加え、市が私たち子供世代を対象に医療費を負担してくれている。明細には、親に支払ってもらった額の隣に、公的に負担してもらった額が記されていた。ものすごく大きな数字だったからびっくりした。これが十五年間、続いてきたのか。驚く私の隣で父が、

「つくば市さんに、感謝やでえ」
と偽物の関西弁で冗談めかして笑った。

この台詞を、以前、同じ口から聞いたことがあった。数年前から、私と父はつくば市の環境美化ボランティア活動を時々している。かつて、早朝の大通りに面した歩道のゴミを拾い歩きながら、父は何度か「つくば市さんに、感謝やでえ」と歌うように口ずさんでいた。

幼いころはずっと、私の症状はなかなか良くなりえず、父は不安の中で何度も病院に私を連れて行ったそう。長期間、苦労しながらも何とか生活してこられたのは、医療費を補助してもらえたから。そういう思いで父は、私が元気に生活できるようになって少し余裕ができたのを機に、市のボランティアに登録し、私も活動に参加させたのだった。

医療費は、働く人が納めてくれている税金でまかなわれている。怪我や病気なく働く人は、医療費に関しては、負担するばかりで損だと感じているかもしれない。そういう仕組みになっているといえればそれまでだが、私は、当然のように制度を利用するのではなく、恩恵を受けてきた者として言いたい。ありがとうございます。お金のことだから、誰だってできれば払いたくないものだし、税金が高いと嘆く声もよく聞く。でも、払ってくれる人達のおかげで、私たち家族は暮らしてこられた。同じような立場で、感謝している人たちは、きっと少なくないと思う。どうかそのことを知ってほしい。納められた税金が世の中に還元される仕組みは知られていると思うが、具体的に、こういう当事者を支えてくださっているということを感じてほしい。元気に暮らせる日々を、ありがとうございます。

税のバトンで緑を守る

横浜市立南高等学校附属中学校3年 森 彩夏

私の住む街、栄区はお世辞にも都会とは言えない。でもこの街で流れている穏やかな時間が私は大好きだ。朝は鳥がとても綺麗にさえずっているし、通学中には木々がさらさらと葉をゆらし私を見守ってくれているように感じられる。そんなこの街の日常を支えているのは山や森の存在が大きい。そしてその山や森を支えているのは税なのだと私は知っている。

小学校低学年の頃、私は税についてのビデオを見た。ビデオも記憶にはあるが、それよりも先生の言葉が今でもずっと心に残っている。「税金はビデオで見たように警察や消防の活動を支えています。でももっと皆にとって身近な事というなら、皆が普段遊ぶ、山をお手入れするお金も税金から来ているの。」私はびっくりした。自然は何もしなくてもそこにあるものだと思っていたからだ。驚いていたのは私だけではないようだった。その様子を見て先生は話を続けた。「先生は皆くらいの頃、東京に住んでいたんだけど、皆のように自然と触れ合えなかったのよ。だからとっても皆が羨ましい。」と。正直、小学生の私は都会に憧れていて自分の住む街が好きではなかった。だからもっと違う事に税金を使ってほしいと思ったのだ。

しかし中学生になり、色々な区から来た友人ができるとその考えは大きく変わった。きっかけは友人たちと小さい頃に好きだった遊びについて話した時だった。

「私は、ヤマゴボウの実で色水つくったり、散歩道に落ちている毬栗を集めたり、山全体で鬼ごっこをしたり…」何気なくいった話に友人たちはとても驚いているようだった。

「ヤマゴボウって何？ゴボウ？」

「栗って落ちてるもんなの？」

と私にとっては意外な反応だった。友人たちはゲーム機を片手に遊ぶ事が多かったらしい。私もゲーム機を持ってはいたが、それよりも友達と遊ぶ方がずっと楽しかった。そのことから私は沢山の経験をさせてくれた山や森に深い感謝の気持ちを抱くようになった。そしてあの時の先生の言葉がやっと分かった気がしたのである。

今、私の家の近くの森では工事が進められている。地盤の工事をする事でより安全に利用できるようにするらしい。この工事にかかるお金も「横浜みどり税」という税金で賄われている。私が幼稚園生の頃からずっと慣れ親しんできたこの自然を守ってきたのは税だ。

私は将来、幼稚園の先生となって、いつかの私のように山や森を駆け回り自然を感じて遊ぶ子供達を育てていきたい。そのためにはこれからもこの自然を守り続けなければならない。税を納め、その税で自然を守り育てるというバトンを次に受け取るのは私だ。

税金の使いみちトリアージ

稲城市立稲城第六中学校 3年 前田 結月

私の住む街は、電柱が地下に埋められていたり、道路と歩道がしっかり分かれていたり、近くの駅では最近踏切をなくして立体化されたりしていて、快適でとてもきれいです。

これらの整備は、税金を使って実現されていることを学びました。誰がお金を払っているのだろうと疑問に思ったこともありましたが、使われる税金の中でも「公共事業費」にあたることも知りました。みんなから集めた税金を、みんなが快適に豊かに過ごすために使われることは良いことだと思います。

しかし、少子高齢化の影響もあって、税金をおさめる人口が減って、使える税金が減っている中で、もし、無電柱化、鉄道の立体化などが、ただ景観のため、快適さや利便性のためだけなのだとしたら、それは問題だと思います。これらは、人々の安全も考えて整備されたものでもあるので、間違った使いみちではありませんが、私はまず、被災地の整備や医療など、生きるために欠かせないものから先に税金を使うべきだと思います。

限られた税金だから、何に税金を使うか選択して、何を優先して使うかを考えることが必要だと思います。学校で教わったり、テレビで観たことがある「トリアージ」の考え方と似ていると思います。限られた時間、お医者さんの数という状況の時、トリアージを行うのと同じです。

医療現場でのトリアージも、助けたい人がたくさんいた時、優先順位が低いからといって助けないわけではありません。みんなを助けるためには、どう動いたらいいかを考えるものです。税金のトリアージも一緒に、税金の使いみちがたくさんあった時、例えば豊かさのためだけだからと使わないわけではありません。全てを実現するために、どう考えるかです。

生きていくために絶対必要な税金も、人が豊かに快適に過ごすための税金も、どちらも大切です。ですが、私は、トリアージをすることで、税金の無駄使いもなくなると思うのです。

もうすぐ東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。「おもてなし」を約束して決まった東京なので、様々な場所をきれいにしたり、建て直したりするために、莫大な税金を使っていると思います。外国から来てくれる人々を歓迎することは良いことですし、私も、日本に行ってよかったと言ってもらえたら嬉しい気持ちになります。しかし、そこでもトリアージを忘れず、ただ大きなスタジアムを作りたい、渋滞は嫌だから道路整備をしたいということではなく、人々の命を守る「安全面」を最優先にして税金を使ってもらいたいです。

私は、おこづかいで何かを買った時の消費税しかおさめられていませんが、私のそんな小さな税金も、優先順位の高い方から使われるといいなと思います。

当たり前の風景に

白山市立光野中学校3年 中村 涼香

当たり前に道を歩いて、当たり前に学校へ行き、当たり前に公園で遊んで。その「当たり前」は税が無ければ「当たり前」になる事がない。そんな事、世の中の常識かもしれない。しかし、実際には自分達自身が納税者であっても、その税の使い道には多くの人に関心を持っていない。そのくせ、増税の話題になれば、こぞって使い道を気にし出すのはなぜなんだろう。税があつてこそその生活だと知っているはずなのに…理由は単純。日頃「当たり前」過ぎて、何に使われているかだなんて考えもしないからだ。もし、税が無ければ日本はどうなるのだろうと考えた事がある人はとても少ないと思う。「もし」の話だろう、今、日本には税という仕組みがあるのだから。「もし」無かったら、だなんて想像する必要はないと考える人も少なくないだろう。確かに、その考えが間違っているとは言い切れないのかもしれない。けれども、私はその人たちに声を大にして言いたい。「当たり前」を「感謝」だと捉えるべきだ、と。と言うのも、視野を広げて世界を見れば、日本人が「もし」の話だと思う事が実際の事となっているからだ。もちろん一部の島を除く、全ての国に税金は存在する。しかし、税によって救急車の利用にお金が掛からない、公道が整備されている等の事は「当たり前」ではない。税という仕組みはあれど、救急車の利用にお金を支払うのが当然な国もあるという事だ。だが、なぜそれが「感謝」につながるのか。それは、日本人にとっての「当たり前」が世界の人々にとっての「当たり前ではない」のだと伝えたいと思った際、「当たり前」を対義語で表すならばどう表現する事が出来るのだろうと考えたからだ。結論から言うと自分自身では思いつかなかった。その為、インターネットで調べた結果がそう、「感謝」だと分かった。サイトによれば、

『当たり前=あることが常のもの、つまりあることが常ではないもの=有り難きもの。だから、有り難きもの=ありがたいもの、つまり感謝だという事だ。』
だそう。啞然とした。まさにそうだ、と思った。税によって出来ているもの、出来ている事は有り難いものではある。だが世界を見れば一目瞭然、「当たり前」ではない。

そう気付かされた時、何も「当たり前」なんて無いじゃないかと思った。国民の税によって「当たり前」にはなっていようと、それを「当たり前」という言葉で片付けてしまつてはいけない。税という有り難いもの。日頃、何も考えずに過ごしているだけでは忘れてしまうもの。けれど、時々であっても「もし」無かったらと考え「当たり前」の風景を見てみよう。「感謝」すべき風景、それを守る為、今は消費税しか納めていないけれど、将来、他の税も納税するという形で少しずつ恩返しが出来るように税や社会、経済についてもっとたくさん
のことを学んでいこうと強く思う。

「ピッ」

新しいエアコンのスイッチを入れた。エアコンは勢いよく冷たい風を送り出し始めた。私の家では、今年エアコンを二台新調した。以前使っていたエアコンは、古かったがまだ壊れていなかった。この日より何日も前から私の家では、消費税が十パーセントに上がる前にエアコンを買い替えるか、壊れるまで使うか家族会議が毎日のように開かれていた。

高額のものを買うとなれば、二パーセントの増税でも金額が大きくなる。家計を預かる母にとって消費税増税は大問題だ。少しでも出費を抑えるため、毎日頭を抱えていた。一方父は、

「増税はこれからの日本を支えるためには、仕方がない。」

と言っていた。海外では、もっと消費税が高い国も多いのだというのだ。私は、他の国の消費税がどのくらいの割合なのか調べてみた。確かに消費税が日本より高い国は多く、特にヨーロッパは二十パーセント程度のところがいくつもあった。なぜ、ヨーロッパは消費税が高いのか。その国の人たちは不満はないのか。ヨーロッパの国々は比較的小さい国が多く、人口も少ない。人口が、少なければ、税収は少なくなってしまうため消費税などの税率を上げ、国の財政が困らないようにしているのだ。国民にもメリットがあった。医療費、教育費が無料の国もあるのだ。

では日本は、どうだろう。この作文を書いている時点での消費税は八パーセント。これは、世界的に見て安いほうだ。これを二〇一九年十月から十パーセントに上げる。日本の消費税の多くは、社会保障に使われる。では、社会保障とは何なのか。私にも使われているだろうか。ふと、その時私は昨年父が入院した時のことを思い出した。父は、手術のため一週間ほど入院した。退院日に病院でお金を支払った。数万円だった。数万円は確かに高額だったが、一週間三食付きで数万円なら安いね。と父に話した。ところが父は、私に入院費の明細書を見せて、

「ここを見てごらん。」

と指をさした。そこには、総請求点数九万二千点と書いてあった。父は、

「その点数に十かけた数が本当の医療費だよ。」

と教えてくれた。ということは、父の入院費は九十二万円。私は驚いた。父は本当ならばこれだけの医療費がかかるのだから医療費制度には感謝しないとイケないと言っていた。私の家族も税に助けられているのだ。税金は、人々から少しずつ徴収し、そして病気や介護など多額のお金を必要とする人々を助けている。みんなで、一人ひとりを支えているのだ。

私は、税金は募金に似ていると思う。税金を納めることで誰か困っている人の役に立つ。私が大人になった時、募金をする時と同じように見えない相手のことを思い、納税していきたい。

支払わされる税

防府市立富海中学校1年 山本 日花莉

「消費税十パーセントに反対します」

先日の選挙で、テレビや選挙カーから聞こえてきた言葉です。

生活を圧迫すると困るからだそうです。人によっては、

「私みたいな貧乏な者から取らないで、金持ちから取ればいい」

と言う人もいます。

多くの人達は、目の前で取られる税金に、「高い高い」と文句をつけますが、増税に反対する人は、税金が何にどれだけ使われているか考えた事はあるのでしょうか。

外国では、日本とは比べものにならないくらい税金がとても高い国もあります。

しかし、その国では高い税金に文句を言う人はほとんどいないそうです。その代わりに、自分が支払った税金の使い道には、みんな注目するそうです。せっかく払った税金が有効に活用されているか、ムダな使い方になっていないか、に目を光らせるそうです。

日本人は、支払う税金の高さに文句はつけても、払った後、その税金がどのように使われているかに興味を持っている人は、とても少ないです。

目の前の出来事に目を奪われ、のど元を過ぎれば後は知らん顔。それが外国の人達の目にどのように写っているのでしょうか。

今秋、消費税が十パーセントに上がる事が決まりました。その中で、八パーセントの軽減措置を取り入れる議論が交わされているそうですが、使い道の議論が報道されているのを見た事はありません。

支払う額を少しでも安くする事ばかりを気にするのではなく、せっかく納める税金を有意義に使ってもらえるか、ムダな使い方をしないか。

税率が変わる今こそ、払った先の使い道に目を向けるべきではないでしょうか。

その先に目を向けた瞬間から、私達の税金は、「支払わされる税」から、「支払う税」に変わり、真の豊かな日本へと生まれ変われると思います。

私達一人一人が、自分の税金が、自分を含めた誰かの役に立っているという自負を持って納税していくことが大切だと思います。

消費税十パーセントを払うので、私達の生活に役立ててください。

医りょうや道路に役立てる税金は、けっしてムダにはなりません。皆さんもしっかり払いましょう。

「当たり前」のありがたさ

阿波市立阿波中学校3年 田村 友理恵

「税金」と聞けば、私とは関係のないことと思っていた。しかし、今年学校で行われた租税教室でその私の考えが間違っていることに気がついた。税金は私たちの日常に深く関わっている。その中でも、私にとって一番身近だと思うものが二つある。

まず一つ目は「学校教育」についてだ。当たり前のように教科書をもらい、授業を受けている私たち。しかし、この教育費にも多額の税金が使われている。徳島県の中学生一人あたりには一年間約一四〇万円もの教育費が必要になる。また、九年間の義務教育の費用には、一人あたり約一一三一萬六〇〇〇円ものお金が必要だ。もし、税金がなければ、この費用を自分たちで用意しなければならない。そうなれば、学校へ通うことも難しくなるだろう。当たり前だと思っていた「学校生活」は、とても幸せなことだ。学習できる環境があることに感謝し、一生懸命、勉強しようと思う。日本国憲法にも定められている教育を受ける権利。私が義務教育を受けてから九年目となる今年。今までの学校で教わったことは知識だけではなく、集団行動の大切さや精神的な面など、数多くあったと感じている。貴重な経験や体験をしてそこから学び得たことは自分自身に大きな影響を与えてくれた。税金は私を成長させてくれたのだ。

そして、二つ目は「国民医療費」についてだ。私の住んでいる市では「あわっ子はぐくみ医療費」というものがある。これは、高校を卒業するまでの間、医療費を市が税金で負担してくれるものだ。だから、私が病院で治療を受けても、そこで医療費を支払う必要がない。また、高校を卒業した後も健康保険証を持っていれば、病院で治療を受けても、医療費の支払いは一部だ。今では、国民医療費の公費負担額は約十六兆四七一一億円、国民一人あたり約十二万九六〇〇円にも達する。私たちの命を守り、健康に暮らせるために使われている税金。私も、病院には今までたくさんお世話になり今の健康な体がある。税金のない今の生活は考えられないほど、税金は私たちの中で必要不可欠なものになっているだろう。

公平な誰もが幸せな社会を作るための税金。私自身も「消費税」を納めている「納税者」の一人だ。しかし、税金には所得税、住民税、法人税などのたくさん種類があり、将来私も納める税金の種類が多くなるだろう。そのときには、しっかりと税を納め社会に貢献できる納税者に私はなりたい。少子高齢化が進む日本の社会。だからこそ人と人同士が互いに助け合うことがより重要になると思う。その架け橋になり未来を築く税金は私たちの生活を支え、幸せな日々を与え続けてくれている。

税金があるからこそ成り立っている「当たり前」のありがたさを今、私は実感している。税金には、感謝の気持ちでいっぱいだ。

私たちが国を支え、国が私たちを支える

福岡市立香椎第3中学校3年 大瀬良 遥

『税金を払わない四十七歳男性「税金ないと生活かなり助かる」』という記事を見た。この作文を書くために税について調べていた私は、毎日当たり前のように税に支えられていることに気付き驚いた。その反面、この男性のように税を納めることに対して否定的な考えをもつ人間もたくさんいることを知り、怒りと疑問を覚えた。

「税は社会への参加費」というように、社会に出ると必ず関わっていく税。この男性は税がどれだけ必要なものかわかっているのだろうか。税が働かない世の中がどうなるのか想像したことがあるのだろうか。交通整備がされず事故が増える。通報者がお金をとられるので誰も警察を呼ばない。病院はお金もちだけの特権に。結果死者が増える。命に関わるだけでなく、学校に通えない子どもが増え、就学率が激減。そうすると日本の教育が疎かになるどころか、平等の文字は消えていく。社会人であるならば、税がどれだけ大事なものか知っていて当然だと思う。もしそれを知っている上で税を滞納するのであれば、それは立派な「人任せ」だ。税を払わない者と税をしっかりと払っている者が同じような生活をするのは許せないことだと私は考える。なぜ後者が損した気分にならないといけないのだろうか。それが続くと、誰も前向きな気持ちで税を払わなくなる日が来るかもしれない。悪循環だ。

しかし、税を滞納している人の中でも、経済的な問題で払いたくても払えない人もいるのだろう。だからといって許して良い理由にはならないが、私が大人になった時、そのような人が身近にいたらできる限り応援したいと思う。自分たちが自分たちの生きる環境をつくる。それには助け合うことも大事だと考える。

私は、税を納めてはじめて「社会に参加している」と言えると思う。社会人になる前に、税に関する正しい知識を身につけておく必要がある。そして、一人一人が税に支えられていることに感謝するべきだ。日本中全員が当たり前に整備された道を歩き、病院に行って十分な治療を受け、警察に守られ、九年間の義務教育を無料で受けられることは、決して当たり前ではない。このような安心・安全な環境づくりのために一生懸命働いてくださる人々がたくさんいる。このことに気づき、日本中が感謝で包まれた瞬間、税を滞納する人がゼロになると思う。

社会人になって、自分が頑張って働いたお金の一部が国へ貢献されることは、すごく偉大なことだ。

図書館から税を考える。

熊本市立白川中学校 1年 上野 楽雅

ぼくは、図書館が大好きだ。毎日、少しでもひまがあれば、図書館に行くほど大好きだ。図書館には数え切れないほどの本がある。色あざやかな絵本、大きくてぶ厚いずっしりとした図鑑、ぼくの大好きなマンガなどがいっぱいあり、ぼくにとっては宝箱のようだ。

そして図書館の魅力と言えば、どの本も無料で貸してもらえるとということだ。ぼくのお気に入りの世界甲虫大図鑑は、税込で七千二百二十円もする高価な図鑑で、自分のおこづかいではなかなか手が届かない。しかし図書館に行けば、無料で借りることができ、家で心おきなくゆっくりと甲虫をめどることができるのだ。図書館の無料貸し出しシステムとは、なんとすばらしいことか。

しかし、なぜ無料で本を借りることが可能なのだろうか？ どうやってこんなにたくさんの本を購入することができるのか？ このたくさんの本を所蔵する図書館の建設費や図書館で働く人たちへの給料はどこから出ているのだろうか？ 考えれば考えるほど、無料で貸し出すなんて至難の業だ。

そこで調べてみると、「税金」に行き着いた。どうやら、このカラクリは税金が関係しているようだ。

図書館だけでなく、ぼくたちが通っている学校や、いこいの場である公園、毎日使用している道路などの公共施設にも税金が使われている。その他にも、ゴミ収集、消防署の救急活動、警察の防犯活動、病院代などの公共サービスにも税金が使われている。

要するに、税金は、多くの人の生活や安全のために必要な施設やサービスのために使われており、道路を造る、水道を整備するなどの一人ではできないけれど、みんなの力を合わせればできるようなことをしている。人々の安全で快適な生活のために税金は使われているのだ。一人一人が使い道をきちんと理解してみんながきちんと税金を納めればこそ、安全で快適な生活が維持されていくのだ。互助の精神が公共の礎にある。

国税庁の国の一般会計歳出額のグラフを見てみると、社会保障関係費が一番多い。社会保障関係費が、急速な少子高齢化により、年々増加しており、社会保障の給付と負担が経済の伸びを上回って増大すると現制度が破たんしてしまう。時代の変化に伴って、税金の使い方や制度を変化させて行く必要がある。理想と現実がかけ離れてしまわないように、制度の構造改革が必要となるであろう。依存しすぎず、見捨てることなく、平和で安全な社会を維持するために、税金が使われて欲しいと思う。

税金を納めれば、幸せになれると思えるような税制改革をして行って欲しい。

税金の正しい使われ方

南城市立知念中学校 3年 糸数 博香

「私達の税金がもったいない。」これは、最近話題の障害者の議員のために行われた、国会の工事に対するある人の意見です。私はこの話を聞いたとき、障害者のための工事ならとてもいい事だと思い、税金のことなんて考えてもいませんでした。しかし税金という物を関連づけるだけで、こんなに反対の意見ができてしまうのはなぜなのか、では、本当に正しい税の使われ方、とはどういう事をいうのか、私はとても疑問に思いました。

最近のニュースで、税金がどのように利用されているのか知らない人が多い、と取り上げられていました。確かに、私も税金という言葉を知ると消費税などしか知らず、それが何に利用されているか分かりませんでした。ですが調べてみると、意外にも身近なところで税金が利用されていることが分かりました。例えばごみ収集です。ごみ収集が無料で行われるのは税金のおかげです。もし税金がなかったら、ゴミ収集が有料になり、払わない人がいると町にゴミがあふれてしまうかもしれません。他にも、救急車や医療費も税金が負担してくれます。これこそ税金がなかったら救急車に来てもらうのにもお金を払い、また治療費にもお金を払ったりと、一気に出費が重なってしまいます。これらの例は、正しい税金の使われ方と言っていいでしょう。

では、間違った使われ方とは一体なんなのでしょう。私は最近の「テスラ問題」を思い出しました。これは、地球温暖化対策の一環として高額な電気自動車を公用車として導入した市に対し、市民が「税金の無駄遣いだ。」と猛反対した問題です。これは間違った税金の使われ方なのでしょう。確かにこの問題はこの自動車が高額だったため反対されました。もしこの車が、値段もそんなに高くなく、環境に優しいという同じ理由だったら、賛成する人も居たかもしれません。

最初に挙げた国会議事堂の工事費、次に挙げたテスラ問題も、しっかりと理由があり、私達の未来の生活を豊かにするために税金を使っています。税金は、みんなが豊かで安心して暮らしていくために納めるものです。なので、これら二つの税金の使われ方は正しい使われ方だと私は思います。

税金の使われ方の正しい、間違いは人それぞれであり、どれか一つに決めることはできないと思います。税金は、先程言ったように私達の生活を豊かで安心して暮らしていくのにみんなが納めるものです。今年十月に八%から十%へ増税すると予定の消費税ですが、この増税にも賛否が分かれました。でも、よく考えると、納める税金が増えるという事は今までよりも生活が安定し充実する、という期待ができるということなのです。

将来、私達が大人になると、学生するときよりも納める税が増えます。そのときに「嫌だな」「面倒くさい」と思わず、しっかり納めていきたいです。